

烏森トレッキング回想記

‘ 1 0 . 3 . 1 5

第一回

日 時：‘ 9 7 . 1 1 . 5 (土) ~ 1 1 . 6 (日)

概略行程：

1 日 目 御岳駅～御岳溪谷～ケーブル下滝本駅～御岳平～展望台～御岳ビジターセンタ
- ～長尾平～綾広の滝～ロック・ガーデン（岩石園）～天狗岩～長尾平～武蔵
御嶽神社（御岳山 9 2 9 . 0 m）～ 宿泊 / 登奈利荘

2 日 目 大塚山（ 9 2 0 . 3 m ）～丹三郎屋敷～古里駅～鳩ノ巣駅

メンバー：米本、山田、吉川、大谷、磯崎

装いを凝らしたメンバーが、早朝の青梅線 / 御岳駅に集まる。

生憎の曇り空ではあるが、紅葉は盛りの様子にて、メンバーの顔にも笑みが溢れ、先ずは順調な出足しと喜び、駅前広場で身支度する。

トレッキング初めを御岳溪谷遊歩道歩きに変更し、青梅街道脇の急階段を下って、遊歩道に降り立つ。

御岳溪谷は、「日本の水・百選」、「多摩川八景」にも選ばれる景勝地。

渓流は水量豊かで瀬音も高い、岩に打ちつけては白色の飛沫を上げる。いつもはカヌー愛好家で賑わう橋周辺は、早朝故か、川面上に張られたフラッグ取り付け用糸線が垂れるのみ。

溪谷周辺は秋色一色に染まり、遊歩道に覆い被さる様に生茂る樹々、対岸岩場に屹立する小木共々、黄葉、紅葉に綾どられ、極め付きは後方、「御岳橋」の橋桁覆う巨木の紅葉、名も知らぬ巨樹が枝を伸ばす。

“元氣な内に”とアドバイス（目配せ）する賢者居り、流れ急な溪谷を背景に、早速メンバーの笑顔を記録。

余りに好調な歩きに予定を変更し（記録では“勢い余り”とある）、ケーブル下 / 滝本駅迄歩くが、足に掛かりのない急坂コンクリート道は誠に歩き辛く、メンバーから不興を買う。

“足慣らしと、途中の民家軒下石段で見られる、深紅の楓葉舞う絶好の紅葉ポイントを案内したかった”と弁明するも聞く耳を持たず。

【余談1】日常用語として、「トレッキング」と云う言葉はすっかり定着したようだ。

本来的な語意は“山道を牛のごとくゆっくり歩く様”、と云われるが、我が国では従来、世界の名峰山麓に入って眺望や周辺散策を楽しむ山旅（トレッキング・ツアー）を案内する用語として主に用いられていた。

現在の様に山歩き全般を指すようになったのは、中高年者参入による“登山ブーム”到来を受けてのことで、その背景には業界（山岳用品、旅行、出版等の各社）の巧みな商業主義が垣間見えるとも云われる。

<参考>

代表的な「ヒマラヤ・トレッキングコース」として、中国/チベット自治区・ラサ市からエヴェレスト・ベースキャンプに入るルート（8日前後で30～40万円/1名）がある。

高度順応化のため3日ほどの滞在を要すとされるラサ市の標高は3,607m、バスで向かう最終ベースキャンプ地は5,154m。

何ともダイナミックで、費用ばかりか時間的な余裕も必要のようである。

（エヴェレスト（別名チョモランマ）/8,848m、富士山/3,776m、我等が御岳山/929m）

『追記』‘05.8.26 朝日新聞 チベット「空に一番近い鉄道」より

中国/青海省ゴルムド～ラサ間を結ぶ青海チベット鉄道工事（全長1,142km）で、南米/アンデス鉄道を抜く世界最高地のタングラ峠（5,072m）にレールを敷設。

ラサ駅の工事も進んでおり、全線開通予定は‘07.7。

ケーブルで御岳山の入り口、「御岳平」に上り、更にリフトで展望台へと乗り継ぐ。

山上からの眺望は都心の街並み一切を隠し、黒ずむ山塊と山間を埋める白雲の流れのみにて、水墨画にも似た黒白の世界。曇日にはいつも見られる風景で、これも雲海と楽しむが、メンバーはいかが見たか。

御岳の自然を案内する「御岳ビジターセンター」を覗いた後、御師集落から御嶽神社への参道を息を切らしながら登って、昼食予定地、「長尾平」に移動。

山上の紅葉は、麓に比し、若干、盛りを過ぎた感が否めず、食卓作りに、木テーブル上に積もった落葉を払うは、早、初冬の装いと云うのが正確か。

各自持参の弁当を開いて、早、食事。

家庭の事情を反映してか、愛妻手製、駅前コンビニ調達と作りに差があるは止むなしも、「握り飯」、「缶詰」、「漬け物」と互いの食糧出し合っの食事は童心の覚醒楽しく、また、

枯葉舞い散る食卓風景は、早、爛酒を飲む趣有り。

【余談2】会の始まりは、烏森会で金を稼いで海外旅行をしようと云う当初計画が、国内温泉旅行に後退し、更には、自腹で、“林間に酒を暖めて紅葉を焼(た)く”、と云う流れで実現したものである。

“林間に云々”は、てっきり漢詩の世界と思い込んでいたが、関係図書を調べても未だに見当たらないのは勘違いしていたのであろうか。

山歩きの初めは奥御岳溪谷/ロック・ガーデン巡りから。

別名、「岩石園」とも呼ばれ、片道歩行時間約40分の、苔むす岩場道を緑が覆う深山の溪谷。

小雨の降り始める中、奥の院(1,077m)、鍋割山(1,084m)巻き道を辿り、水場の先、休憩所の前でUターンして、ガーデンの上端へと廻り込み、崖上に立つ。

眼下には、「武蔵御嶽神社」の神官修業滝、「綾広の滝」。

周囲三方を大岩で囲い、鳥居を立てて注連縄飾る威厳振りながら、水量、勢いは今一つ。

見渡すロック・ガーデンは、すっかり初冬の装い。

何時もなら、樹々が鬱蒼と生い茂り、至る所に緑のトンネルを造るが、今は珊瑚の様な枝模様を露出し、風も無いのに、小雪が降るかの様に木葉が舞い散る。

石段を下り、ガーデン歩きをスタート。

大岩に手を添えて石段を下り、足場を確かめて脆い岩場をゆっくり進み、岩縫う流れは飛び石を伝って渡る。

浅い流れではあるが、水は澄み、水量は豊か。

流れに舞い降りた木の葉が色鮮やかさをデフォルメし、漂ったり、潜ったり、岩間を急に走ったりと風情を倍増。

最終、淵に流れ込むや、行き場を失って空回りし、浮遊する腐葉の黒墨みに絡め捕られてしまうが、自然の習いと気に留めることもなし。

登って来るハイカーとエールを交わし、道を譲る。

雨に濡れた岩場下りの連続は足場確保に俯いての歩きを強いられ、やはりコースは上りに取るべきだったかと、ちょっぴり反省。

途中、岩場に休んだりして、無事、ガーデン歩きを終える。

石段上の「天狗岩」で小休止。

元気なメンバーは鉄鎖を手繰って大岩を登り、岩上に祠の祭祀を見つけたと喜び、はし

やく。

余力有り、急坂直下約5分に七段の釜を持つ名瀑、「七代の滝」が在ると誘うが、**聞こえぬ振りして取り合わぬは冷静沈着、いや何とも老獪!**

長尾平に戻って、木ベンチで一服。

すでに雨は上がり、午前中に見た人の群は消失。残されるは静かな晩秋夕風景のみ。

しばし休んだ後、御岳山の山頂となる「武蔵御嶽神社」に立寄り、宿へと向かう。

「登奈利荘」は御師（神官）の宿。

料理絶品にて、「大根の煮物」が特に美味。米本氏が女将に入手先を訊ねると、“**御岳産にて非売品**”と答えて、それ以上に問う隙は与えず。(‘05.8 御岳駅直売露店で辛子大根を発見、「御岳大根」に非ずや?)

部屋に戻って、地元の酒、「澤ノ井」片手に、秋の夜長を語り合う。**酒の在処は台所入口前の冷蔵庫と知り、思い出同様、尽きる事の懸念はなし。**

翌日は、予定の鳩ノ巣ノ裏参道下山を変更し、大塚山から古里へと下る。(理由は簡単、せめてもう一汗かきたかったため)

大塚山は御岳山尾根続きの山にて、「カタクリ(4月下旬)」、「レンゲショウマ(8月)」の群生地知られる富士峰園地から道を北西方向に分ける。

山頂からの眺望に恵まれないのと、間近に鉄塔を据えるが印象悪く、訪れる人の少ない山とも云われるが、広葉樹の森が拡がり、緑豊かで寄り道したい静かな山。

樹々はすでに裸木化し、道は落ち葉に埋もれた絨毯道。“ザック”、“ザック”と枯れ葉歩きを楽しみながら、間なく、明るい山頂に到着。

山頂に人影はなし。

当初下山予定の裏参道、城山方面の尾根筋を眺望した後、少し下って、小屋と便所の建つ展望小屋から都心を臨むが、やはり街並みは姿を隠す。

早々と下山に掛かり、登ってきた逆方向に道を下る。

頂上からは下る一方で、メンバーは余裕綽々。ビニール袋に紅葉を狩りながら、昔話に花を咲かせてホイホイ下る。

しかし、余りに早い時間での下山に、**登って来るハイカーから、“どこから登り、どこへ向かうのか”**と訊かれて、**答えに窮すは如何なものか。**

丹沢の山に詳しい山田氏と、意外や、山の日常に明るい大谷氏の楽しい掛け合いを聞きながら、おおよそ400mの標高差を下る。

【余談3】東京都は奥多摩の植樹を推進中で、山歩きの途中、しばしば、林道の整備、樹木の伐採、植林風景に出会う。樹目はスギ等の常緑樹を主とし、植育の容易さや保水性の良さ等、合理的理由に基づくものと説明する。(以前はスギの収益性を掲げていたが、販価の低下した現在は外したようである)

無論、目的は緑化による自然環境の保全で、CO₂の削減他多目に渡ると思われるが、急務は以前より指摘され、深刻化が伝えられる都心のヒートアイランド化現象への対策であろう。

局地的落雷が頻発し、桜の開花が沖縄県の次に早くなったり、冬を越せない筈の亜熱帯の鳥が悠々棲息したりと云う温暖化は、この百年での温度上昇が3度とも云われ、全国平均の上昇率1度を大きく上回っている

都は、都心部ビル屋上の緑化率法制化により吸熱体制を強化する一方、奥多摩緑化による保水力増強により都心河川への流水量増大を図り、併せて、既設河川暗渠部を元に復す等の再開発により、冷熱体制の整備を急いでいると云う。('05.9「運河」化と云う表現を使用。げに、公共工事のネタは絶えず!)

しかし、環境派からの攻撃は厳しく、破壊の結果に対応、対策するばかりではなく、原因そのものを抑制、除去する施策に踏み込むべきではないか、また、山の姿、形を、自然の摂理でなく、人の都合により定形化、コントロールし続けることが可能、妥当なのか、バランスが崩れるとどうなるのか、と云う気になる指摘もある。

山麓古里の里は秋色満開。民家の庭に黄葉、紅葉賑々しい。

道端や民家軒下の彩色を拾い集めながら、無人の古里駅に歩き、青梅線を鳩ノ巣駅に下る。('05.7現在、古里駅はすっかり姿を変え、駅舎はログ・ハウスに、周辺は管理し易い舗装路にと衣替え)

御岳より一層谷深い鳩ノ巣溪谷の眺望を楽しむのと、河畔でのバーベキューとの計画であったが、予定の「鳩ノ巣バンガロー」は予約無しでは利用不可と断られ、止む無く近くの休憩茶屋、「民宿 雲仙屋」でビールと山菜蕎麦の食事。

幹事として猛反省するが、鳩ノ巣駅プラットフォームで撮った最後の写真を見ると、Vサインを送るメンバーの顔には笑みが溢れ、怒りも収まっていたかと安堵する。

【余談4】最近の登山ブームには眼を瞠るばかりである。

3,000mを超すアルプスの山々に人の列ができ、百名山の「槍ヶ岳(3,180m)」では、狭い山頂に立つのに、先の登頂者の下山を待つ必要があり、山頂足下に順番待ちの行列ができると云う笑えない話も伝えられる。

近郊低山でも事情は同じで、人気の山頂は人で溢れ、休み場所の確保にも苦労する。中

高年登山者参入が最大の要因と思われ、そのこと事体は誠に結構であるが、人が溢れる山に人が集まるのは誠に不思議で、少なくとも、名のみ追う山歩きは控えたい。

第二回

日 時：' 9 8 . 6 . 6 (土) ~ 6 . 7 (日)

概略行程：

- 1 日目 御岳駅～ケーブル下滝本～長尾平～七代の滝～天狗岩～ロック・ガーデン～綾
広の滝～芥場峠^{あくば}～本岩展望台^{もといわ}～大岳山荘展望台～大岳山(1 , 2 6 6 . 5 m 日
本二百名山) ～長尾平～ 宿泊 / 登奈利荘
- 2 日目 日の出山 (9 0 2 m) ～養沢小屋～上養沢バス停～武蔵五日市駅～東秋留駅～
秋川ファーマーズ～東秋留駅

メンバー：米本、山田、吉川、大谷、磯崎

二回目のトレッキングは新緑の奥多摩行。

当初、武蔵五日市側から大岳山稜 / 馬頭刈^{ますかり}尾根に取り付き、長い尾根道を辿って、「大岳山」を登攀、その後、御岳へ下ると云う一般ルートを計画し、案内状を送付した。

しかし、計画時の高ぶりから冷静さを取り戻すに連れ、まさにトレッキングの神髄とも云えるメンバーの深い歩き（三步進んで立ち止まり、額の汗を拭っては一步退く）を思い出し、直前に予定を変更、前回同様、待ち合わせ地を「御岳駅」に戻す。

今回も天候に恵まれず、雨中の歩き。

登りのベース、「長尾平」で身支度し、前回、立ち寄りを見送った「七代の滝」へと直降下。

かなりの急坂に膝への負担が気になるが、“折角の「上りの貯金」を無駄使いしおって...”と、メンバーは別の悩みに頭を占有されてか、気にする風なしに助けられる。

途中、上養沢バス停からの登山道と出会う辺りから沢音の響きが近くなり、小さな木橋で沢を渡ると、やがて道は上りに反転、立ち塞ぐ大岩を巻くように廻り込むと、そこは早、「七代の滝」の岩置、激流が淵を打つ。

岩に囲まれた七段、七釜の捻れ滝は雨も手伝い水量豊か。釜淵から見上げる水流は、あたかも白龍がのたうつがごとくで、規模、勢い共に「綾広の滝」を圧倒する。

大岩に腰掛けて、しばし休息。

左手に滝流を見ながら、歩きを再開。

前回休止の「天狗岩」を目指し、鉄梯子の連続を登り返す。短くはあるが、急な直登に

心臓はバクバク！

メンバーの合羽姿が余りにたくましく、後ろ姿を記録しようとファインダーを覗くや、脚が...、脚の上がりは何故かスローにモーション！ 眼の錯覚かと思わず瞬きするも...

前回同様、「天狗岩」の大岩下で小休止。

云うまでもないが、大岩ばかりか、鉄鎖の存在すら注目されず。

前回の反省から、今回のガーデン歩きは上りに採る。

“沢登り”と云うには道が整い、水量も少ない深山の奥沢ながら、渓谷を覆う樹々は春の息吹に満ち溢れ、雨に洗われた若葉の緑が眼に爽やか。

途中、御岳沢休憩所の木テーブルに荷を降ろして小休止。

首にタオルを巻いて、岩石を足場に清流で洗顔。頭から水を被り、心地良い冷たさを楽しむが、眼前の葉陰越し、苔むす岩に、のそりのそりと歩む「でんでん虫」を見つけて、つい目を細める。

「綾広の滝」を最後に、ガーデン巡りを終え、「水場」に回る。

毎回立ち寄り、汗を流して喉を潤す嬉しい「水場」。ドクドクッと水量豊かも、流れる先が、あの「綾広の滝」とは未だ合点がいかず。

次に向かうは、日本二百名山にて奥多摩三山の一つ、「大岳山」。

奥多摩登山ガイドでは必ず紹介される人気の山で、“瘤”のような頂き山容が特徴で、その急峻振りは知る人ぞ知る。

取り付き直ぐの急坂は小石だらけのジグザグ路。

単調で無愛想なだらだら坂が続き、何とも歩き辛いばかりか、休むに適切な場所もない「試練の道」。積雪時にはアイゼン（鉄爪）装着要否を案内する立て札が立つ。

それでもメンバーは、顔を真っ赤に黙々と歩を進め、愚痴もこぼさず任意（勝手）に休み、最初の目標地点、「芥場峠」に無事到着。

ここまで来たなら折角と、晴れた日、周囲360度のパノラマが広がる「本岩展望台」へと片道15分の寄り道をするが、煙る雨に視界は無く残念無念と悔しがる。（向かう前から解っていたではないか？ いやいや、山の天気は変わり易いと云いますから、はい！ それと本当を云うと視界は150度位です！）

とは云え、寒さに耐えて、立ったままで食事をするメンバーの姿は、まさに、「岳人」の風なり。

峠に戻り、再度、「大岳山」へ。

メンバーが寡黙になるは、霊山に向かうための緊張感によるものか、それとも、余りにハードな...

悪天候と云うこともあり、さすがに登る人は少なく、時折、孫連れのお夫婦や女性教師に引率された小学生集団が先を急ぐが（抜いて行くが）彼らの顔にも一切笑みはなし。

それでも、鎖場、鉄梯子なんのその、自棄のやんばち、火事場の馬鹿力、一気に山頂足下、「大岳山荘展望台」に辿り着く...フーッ！

眼前には、当初、縦走を計画した新緑の「馬頭刈尾根」^{まさかり}...が連なる筈も、降りしきる雨に薄墨のシルエット模様を見せるのみは、何とも残念無念と安堵する。（いやはや、何と申しましょうか、複雑な心境が、つい、こう云う表現になってしまいました。はい！）

周囲に他パーティの人影は無く、メンバーは沈思黙考。中に眠り出す人も居り、若干、気懸りであるが、ここまで来ればと、しばし休む。

最後の登攀へと荷を担いで、鳥居をくぐって祭壇への石段を昇り、頂きへの登山道に取り付く。

“何だ坂、こんだ坂、これしきごとき何のその、勢い付いたら止まんぞ”、と頂上間近の岩場が連続する難所を無事乗り越えて、約20分の急登で無事山頂に立つ。

残念ながら、無人の山頂はガスに包まれ視界なし。

それでも、いつの間にかメンバーの顔に笑みも戻り一安心。後から来た短パン姿の外国人2名を「鋸山（^{のこぎり}1、109m）」、奥多摩駅方面に見送り、下山に取り掛かる。
（鋸山コースは、下りでも3時間内外を要すハードなコースで、1週間の筋肉痛を保証）

～以下はスキップするが如く読む～

“後は妻が待つばかり、駅で「澤ノ井」買うたぞな、今宵の酒は旨いぞな！”

【余談5】「日本百名山」は作家深田久弥が選んだ日本の山100座である。

必ずしも標高にこだわるものではなく、歴史、姿、品格等を含めた総合的判断による選択と云われ、1,000mにも満たない茨城/筑波山（876m）、鹿児島/開聞岳（922m）等も名を連ねている。（cf. 我等がホームグラウンド御岳山929m）

その後の乱開発により、現在では、その名に値しないのではとされる山も多く、以前、月刊「文芸春秋」で数座の入れ替えが議論されていた。（'00.7月号 誌上座談会「新・日本百名山を選ぶ」）

いずれも山頂近く迄、ケーブル・カー、ハイ・ウェイが敷設され容易に登れる山が多く、理由が那邊にあるかが窺えるが、無論、入れ替えできるものでもない。

タブーなるか、一番に議論されるところだ、ゴミに埋もれた“偉大なる通俗な山（深田久弥）”は俎上に乗せられていなかったが、「世界自然遺産」に指定されなかった意味は重々肝に銘じたい。

なお、「日本三百名山」は、その後、「日本山岳会」が選んだもので、「日本二百名山」は、更に後、「深田久弥クラブ」が選んだものである。

近時、百名山踏破を目指す人が多い。目標立てが、元気、継続の源と云うならそれも良からうが、トレッキングを楽しむのに、さほど意味があるとは思えない。

また最近、朝日新聞が岩崎元郎氏選定による「日本・新百名山」を同紙水曜夕刊及び週間朝日に連載しているが、広告欄で扱うべき内容・構成ではと少々辟易している。

宿は、前回同様、「登奈利荘」。料理、酒共、またまた満足。

翌日は天候に回復の兆しが見られない中、予定通り、「日の出山」の山越えに向かい、雨中を出発。

通り道の宿坊入り口木札が、“この先、日の出山を經由し、八王子、横浜、アメリカ国に至る”、と豪快、楽しく道案内する。

起伏少なく道幅広い尾根道は、「関東ふれあいの道」の一区分、“杉の木陰のみち”とも称され、進路右手の山斜面は植林の杉林、左手は広葉樹の雑木林と好対照をなす。

所々で出っ張る樹の根や岩に、たたらを踏んだり躓いたり中高年の弱さを丸出ししながら、途中の大岩に休み、“冷や汗”を拭く。

最後の急な木階段を登ると周囲の風景は一変、辺りは一挙に明るくなり、雨に濡れ、新緑輝く広葉樹の森が広がる。

道を分け、左手正面には「東雲山荘」、右手の石段を登ると「日の出山々頂」。

先ずは小屋に入って濡れた体を拭き、シルバー・エイジにより運営される小屋内を見学、中では煙草や缶ジュースも販売される。

「日の出山」山頂に立つ。

いつもなら人で賑わう山頂には、早い時間と悪天候に人一人居らず、展望良とガイドされる視界も霧雨くすぶり、出発地御岳山の眺望すらなし。

しばし佇んだ後、早々の下山を決定。

昼前のバスに間に合えばと逆方向の木階段を急降下するも、到底間に合わずと直ぐに断念、一挙にペースダウンする。

中腹の「養沢小屋」に立寄り、雨宿り。

登って来る人々と挨拶を交わして、水場で痛飲。これが美味しいの、なんの、“たまらん！”
(養沢鍾乳洞に続き、'04.1現在、小屋は閉鎖されて水場も撤去、あ～無情！)

下山を再開。

下るに連れて、踏み跡が細り、道の行く手を樹々雑草が塞ぎ、衣服はズブ濡れになるが、山麓、「御岳林道」と出合う頃には雨も上がる。

ここからは脚に厳しい舗装路を「上養沢バス停」へと歩く。

「養沢」は数軒の家が寄合う山間の集落。JR武蔵五日市駅とバス路線で結び、「上養沢バス停」は養沢線の終着点。

次の便迄に1時間余りの待ち時間があり、自由時間宣言し、各自それぞれに時空間を過ごす。

ベンチ横の流れは養沢川。枝葉を拡げる新緑が川面隠すが、水を集めて瀬音を響かす。なにしろ上流迎ればロック・ガーデンの流れなり。

【余談6】“水の流れ”

大岳山、鍋割山、奥の院(長尾平から西に見る三角錐の山)～ロック・ガーデン上端の水場～綾広の滝～ロック・ガーデン御岳沢～七代の滝～養沢川～北秋川～秋川～多摩川～東京湾

途中、五日市線を東秋留駅で下車し、「秋川ファーマーズ」でバーベキュー...の予定が、材料が準備できないため、サービス不可とのつれない返事。

“それは無いでしょう、ほれ、この通り、ガイド・ブックにも予約無しで可と書いて....、ダメなものはダメだって、そんな理不尽な....、それでは私の立場が....、...皆さんこういう事情で...”

土産に新鮮野菜を求めて、近くの蕎麦屋でビールと蕎麦、どこかで記憶する図。

【余談7】種々あるも、順調にレベル・アップし、この勢いなら奥多摩の山々踏破は間近と確信。奥多摩の、そして東京都の最高峰、更には日本百名山の一座、「雲取山(2,017.7m)」登山もその内にはと、「雲取山荘」のランタン明かりを眼に浮かべる。

しかし我がメンバーは慎重、謙虚。今回の「ファミリー・コース」踏破に驕ることなく、今一度原点に戻り、「初心者山歩き入門」の復習に励みたいと、強引、強硬な申し入れあり、今しばらくは初心者コースの復習、予習、また復習！

第三回

日時：'98.10.31(土)～11.1(日)

概略行程：

1日目 奥多摩駅～奥多摩ビジターセンター～氷川キャンプ場～奥多摩湖ドラム缶橋
～小河内^{おごうち}ダム～奥多摩駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊/登奈利荘

2日目 御嶽神社～長尾平～御岳平～御岳溪谷～小澤酒造～澤乃井園～沢井駅

メンバー：齋木、米本、吉川、磯崎

齋木会頭の参加を得、“晩秋の奥多摩水紀行”と洒落る。

今回、初めて好天に恵まれ、空澄み渡り、陽柔らかな青梅線の終着駅/奥多摩駅で待ち合わせ。

東京都の最高峰、「雲取山」への基点駅となる駅前広場は、デイ・バックの軽装から、大きなザックを抱えて本格的な山装束の登山客で賑わい、向かい先はそれぞれも、好日風景に満ち溢れる。

【余談8】「好日」と云う表現は学生時代の記憶を懐かしがって使用したものである。当時の山岳雑誌あちこちに、「好日」と言う言葉が溢れ、とりわけ、「好日山荘」と云う登山用品店の広告が印象に残っている。

ログ・ハウスに若い男女二人が憩うもので、その周辺には眩しいばかりの山用品が並べられ、中には使途すら不明な物もあった。最近の雑誌でも、「コウジツ」、「Koujitsu」と言う言葉を含め、時折見掛けられるが、現在の主役言語は、やはり、「トレッキング」であろう。

駅前、「奥多摩ビジターセンター」を覗いた後、急流が水括る氷川溪谷の河原に竈を立て、醤油味の「魚鍋」を炊さんする。なぜか、会頭は竈の造作に詳しい。

久し振りの野外調理であるが、肌寒さが残る時間が助けとなり、まずまずの味付けと自讃するも、量が過ぎて食べきれず。

隣竈の娘さんに裾わけしようとする強者居るも、“ノーサンキュー”。

親父がつついた鍋云々だからではなく、彼女等のメニュー、「スパゲッティ」に合わないため、それが証拠にアウト・ドアー用マッチは、“謝々”と受取ったではないかと慰める。

予定のバスを見送り、タクシーで奥多摩湖中程の浮き橋、「ドラム缶橋」へ移動。

湖畔の道は、右手に「鷹ノ巣山」、「雲取山」へと連なる石尾根の山麓岩壁が迫り、左手には紅葉間近な広葉樹の疎林が続き、なんとも爽やかなドライブ・コース。

それでも、“やはり、座の高いバスからの眺望が一層優る”と、狭い車内に、お腹をすばめて、一人勝手な講釈をする。

【余談9】奥多摩地区のバスとタクシーの料金相関は前者の割高が目立つが、おおよそ4名対1台の釣り合いと思われる。

以前早朝の御岳駅で、女性ハイカー2名から「ケーブル下」迄の相乗りを誘われたことがある。歩きを楽しむほどの道ではないが、(なに! 第一回ではわざわざ予定を変更して歩いたではないか!) 急ぐ旅でもないのだから、「申し訳ないですが、のんびりと行きたいので、バスで行く贅沢を許して下さい」と若干捻って答えたと、内1人がニッコリと頷き、「それもいいですね」との即座の返答、笑顔の良さに加えて、その頭の回転振りの良さに驚いた、楽しい思い出がある。

(えっ、そんなことがあったかい? でもあたしゃあ人見知りするタイプで、相乗りなんて端っから嫌いな性分でねえ。旦那にゃ悪いが、これ幸いと、あんたの言い分に乗っただけじゃあないのかねえ。まあ、いづれにしても覚えちゃいないけど!)

湖上の浮き橋に座り込み、奥多摩の山並みに見入る。

正面には「御前山」(1,405m) 右手には「三頭山」(1,531m 日本三百名山) 前回の「大岳山」を加えて、「奥多摩三山」揃い踏み。

橋を渡った先には奥多摩周遊道が走り、左手に上ると「山のふるさと村」から「三頭山/都民の森」へ、右手へ下れば「三頭大橋」を渡って新青梅街道に合流し、「山梨/小菅の湯」へ。

湖面を渡る風は何とも爽やか。柔らかな陽を浴びながら、届かぬ水面に両脚をぶらぶら揺らす。

会頭の勧めにより、しばし苦吟するが、素養の無さは如何ともし難く、季語にも戸惑うお粗末さ。

ただ、そうした心境を得るが幸いと一念発句。

秋の風 湖面を渡り 橋揺らす
行く秋に 浮橋までも 漂うか
秋祭り 歩きし道は 湖(みず)の底

【余談10】今回は案内出来なかったが、ドラム缶橋に降りる道を直進した先に、「小河内神社」が祭祀されている。

囲む林間には著名な松の巨樹が立ち、夏には、「クチナシ」の白い花が匂う。

ダム工事に際し、湖底に沈む集落の安寧を祈願し建立されたと記す静かな聖地で、住民の多くは、更に上流、山梨/丹波の里に移ったと云う。

バスで、「小河内ダム」に戻る。

過ぎし昔の湧水時、「しょうがないダム」とも揶揄されたが、今なお、神奈川、東京の水瓶にて、春の桜を絵葉書にする。

湖畔には人多く、湖面のさざ波に見入る人、湖岸の句碑を読む人、ダム堤から遙か下方の放水路を覗き込む人と振る舞う姿はそれぞれも、奥多摩の秋を楽しむことに変わりはなく、山麓は紅葉前、標高差約400mの山上は如何と、野暮な自問する人も同様なり。

南面には、先に眺めた「御前山」が迫り、最もポピュラーな登山道入口はダム堤の先。

急坂続きの難コースであるが、「カタクリ」の咲く4～5月にはカメラを抱える登山客が列をなし、途中、「奥多摩湖」、「富士山」の撮影ポイントを提供し、山頂近くに「カタクリ」の群生地を造る。

しばし佇んだ後、奥多摩駅行きバスに乗車、青梅線を御岳へ上る。

御岳は定宿、「登奈利荘」。

今回初めて玄関に、「歓迎 烏森会御一行様」の案内板が掲げられ、それを見つけたメンバーが指を差して大喜び、その光景がまた楽しい。

変わらぬ歓迎振りながら、今宵の宴席は大広間片隅を間仕切ったの小間にて、首座を占有するは人数勝る中高年の女性グループ。

カラオケと明るい笑い声で我らを圧倒するが、美酒と美味な料理の馳走に、いつの間にかそれらも放念、何時もの様に楽しく過ごす。

翌日は見事な快晴にて、山上は懸念吹き飛ぶ紅葉の真っ盛り。

急坂を登り、先ずは天然記念物である「^{かみよげやき}神代櫻」の巨樹を背にして笑顔を撮る。相当の老木にて、幹に比べ枝葉決して豊かならずも、彩り振りは若木に遜色無し。

陽光が燦々と降り注ぐ参道を進み、武蔵御嶽神社への石段を上る。

総数400段とも脅し(実際は320段内外)石段下に来ると、急な無神論者や病人を輩出するとも云われる急な石段ながら、頭上の黄葉、紅葉余りに見事で、気付かぬ内に一気に登る。(あれっ!どこからか叱責の怒号が...、気のせいかな?)

長尾平も、樹々の数だけ綾を織りなす色模様。

抜ける様な青空をキャンバスに、秋彩色を透かして見る。

下山後、御岳溪谷沿いの左岸遊歩道を沢井に歩き、小澤酒造の「澤ノ井」醸造工程見学会に参加。手慣れたガイドは眠りを誘うが、無事、土産の一合瓶酒を頂戴する。

渓谷沿いに造られた「澤乃井園」に移動し、館内で「澤ノ井」の試飲を楽しんだ後、庭に設営された屋根付きの木テーブルで遅めの昼食。

対岸の「寒山寺」とを「楓橋」で繋ぎ、エメラルド色の溪流を樹々の枝葉で覆う趣向を見せるも、何故か、昼食メニューはビールと蕎麦。

無人駅、沢井から帰途につく。

第四回

日時：'99.5.22(土)～5.23(日)

概略行程：

1日目 軍畑^{いくさばた}駅～高源寺～常福院^{たかみずさん}～高水山(759m)～岩茸石山^{いわなけいしさん}(793m)～惣岳山^{そうがくさん}
(756m)～御岳駅～御岳平～ 宿泊/南山荘

2日目 ～長尾平～ロック・ガーデン～綾広ノ滝～長尾平～御岳平～御岳渓谷～御岳駅メ
ンバー：齋木、米本、吉川、森、磯崎

森氏が初参加し、冬枯れ期の訪問が良とガイドされる初心者向けの代表コース、「高水三山」を新緑に登る。

一山目、「高水山」は、取り付き直ぐから急登続き、沢沿いの道を登り切ると、次は木の根が露出する針葉樹林の急坂が続き、最後はロープでガイドされる登山道造成中の悪路となり、心の臓は休む間もなし。

それでも、尾根近くで微風に揺れる広葉樹の森が拡がり、最後は起伏少なく、緑豊かな「常福院」への道。

右手からは、上成木からの林道が合さる。

山頂は常福院裏手の小丘陵であるが、事実上、院がその役割を果たし、花満つ庭には、日溜まり求めて休む人、弁当広げて食事する人と、そこかしこでハイカーが憩う。

昼食は二山目、「岩茸石山」で。

唯一山頂らしく、北面には東京都と埼玉県^{ぼうのみね}の都県境界線を引く「棒の嶺(969m 別名、「棒折山」)」を臨み、急坂の尾根道で繋がる。

人の多い山頂から少し下った山斜面の草むらにシートを敷き、各自持参の弁当を開く。毎度のことながら、歩いた後の食事は格別の旨さで、「カップ入り減塩味噌汁」は前回の「カップ麺」に続き好評を博す。

三山目、「惣岳山」は登山道の崩壊が気になる赤い山。

山頂は樹林に囲まれ、小さな広場中央には「青渭神社」の神殿が建ち、静かな聖域を創る。御岳から登る途中に水場、「真名井ノ井戸」を置き、ハイカーの喉を潤すが、夏場は潤れることが多く、今回も汲むこと叶わず。

三山を登り終えて、御岳へと下る。

長い急坂路ではあるが、ワイワイ、ガヤガヤ、楽しい会話で気を紛らわしながら、徐々に高度を下げる。

途中、御岳駅で待ち合わせた会頭から入電。

約束の待合せ時間 15:00 が迫っており、メンバーに一層の奮闘を願うが、「心」と「体」は別物とばかりに、下山速度に一向の変化なし。

止むを得ず、状況説明のため森氏に先行下山してもらい、約束の時間に約 30 分遅れて何とか合流、御岳の宿へとバスに乗る。

【余談 11】最近、携帯電話での安易な救助依頼に批判が高まっている。

詳細不勉強で、不正確な点もあるが、救助依頼の一次通報先は種々であるが、最終的には地元の自治体（具体的には（山岳）警察、消防署等が連携）が対応窓口となり、レスキュー活動が開始される。

その際発生する費用は、現状、原則的には地元自治体の負担で、家一軒分の費用が発生すると巷間云われるのは、遭難関係者等が個別に民間レスキュー隊の出動を要請する場合と聞く。

山岳県と呼ばれる長野、富山、山梨県等ではレスキュー体制の維持・管理に加え、相当額の搜索費用予算組みを強いられているようだが、最近では、一部、再考したいとの発言が出始めている。（'04 初頭、長野県が搜索ヘリ有料化の検討開始を発表。また福井県は '04.2 の関西学院ノワンゲル搜索に対し一部費用の請求も！）

しかしその一方で、携帯連絡による救出事例が増えているのも確かな事実で、現時点、問題の存在を認めるにしても、その効用も認めざるを得ず、今後の議論を今しばらく見守りたい。（'08.10 丹沢では一人での山行きに携帯は必需品と広報）

我がパーティも、毎回、メンバーに携帯電話の持参を願っている。

経験の通り、場所、機種により通話事情は一様でなく、山岳登山では、通信確度の高いトランシーバー利用が一般的であるが、通話の可否はともかく、自身の居場所認識が薄いメンバーには、万一を考えて、今後とも携帯の持参を薦めたい。

ただ、同一車内で通信し合って、笑いこけるのは他人に気味悪く、山頂から家人、知人への自慢架電は野暮千万と心得るべし！

宿は初めての「南山荘」。

「日の出山」に近く、木の香匂う良宿は、もてなし、料理共、「登奈利荘」に遜色なし。

楽しい宴に妙なる噂。

上りのケーブル・カー内で不審な会話を耳にしたと云い、内容、極めて不謹慎につき、
具体名の公表は控えるが、内容は概ね以下の通りである。

“ さん、^{チヨメチヨメ} ** の鳴き声をテープに収録してきましたので、万一 ** が居なかった場合でも、** の鳴き声は流せますのでご安心下さい。”

O・ヘンリー、「最後の一片」の心遣いとは似ても似つかぬ愚行にて、腹が立つこと頻り。
そんな姑息な手立てを喜ぶ会員 人が居るはずもない！

翌日も快晴に恵まれ、長尾平からロック・ガーデンを歩く。

若葉は眼に優しく、なお至る所、新芽の息吹盛んで、青葉を透かして青空を見るのは爽快の極み。

しかし、そうしたことに心が向かず、我らと前後して歩く男女二人を、“年が離れ過ぎて
いるのでは”とか、“昨日の「**仏法僧の鳴き声を聞く** 会」のメンバーでは”とか、世俗に
浸る不屈きなメンバーが若干名。

“ええ年をして困ったもんじゃのぉ。いらんことを考えるのは、まだまだ運動量が足ら
んのじゃろうか、次回の参考にせにゃのう”、と雑念浮かび、あっと言う間に流れに転倒、
“どげんなとんじゃあ、おえらやせんとう！”と一人で力む。

長尾平に戻って昼食。

初めて宿で作ってもらった「握り飯し」に缶詰、味噌汁を付け、最後は森氏持参のドリ
ップ・コーヒーで仕上げるフル・コース。

隣の熟女パーティは、麵料理か、大鍋に連結火器で湯を沸かす。何ともダイナミックと
羨ましがりますが、我がパーティに、かの道具を運ぶ甲斐性有りや否やと思案する。

真っ青な空を仰ぎ、新緑を揺らす五月の風を胸一杯吸い、しばし休息。

前夜の件、万が一鳴き声が聴けなくとも、初めての参加者に紹介するための、単なるデ
モ・テープの準備ではとも思い直す。

長尾平の五月は明るく、早、初夏の候。

第五回

日 時 : ' 9 9 . 1 1 . 1 3 (土) ~ 1 1 . 1 4 (日)

概略行程 :

1 日 目 青梅駅 ~ 青梅鉄道公園 ~ 青梅丘陵 ~ 矢倉台 ~ 宮ノ平駅 ~ 御岳駅 ~ 御岳平 ~

宿泊 / 南山荘

2 日 目 長尾平 ~ 大塚山 ~ 御岳平 ~ 御岳溪谷 ~ 御岳駅

メンバー : 齋木、米本、山田、吉川、磯崎

晩秋の晴天下、予定のメンバーがJR青梅駅に集う。

青梅市は「御岳山」をも市域とする奥多摩地区の中核都市で、文字通りに、「梅」の名産地として知られる。

駅前コンビニで食料を整え、靴音を響かせて、早朝市街を闊歩する。

青梅線の踏切を渡るや、直ぐに丘陵への上りとなり、急勾配の連続に、早、心臓は高鳴り始めるが、道の先に市街の展望と眼の覚めるような碧空が開け、力を得る。

最初の訪問地、「青梅鉄道公園」は近く、庭に、「SL」並べて大歓迎。入園料は来園者数のカウントを兼ねるか、回転レバーを回すワン・コイン(¥100)。

内部は想像した程に広くは無く、展示資料も期待した程の内容なし。

目玉のSLは、その厚化粧故か、力強さ、逞しさを欠き、意外に小さく感じられたのは余りにも遠い過去の記憶との比較故か。

早々に見学を切り上げ、丘陵ウォーキングコースに戻る。

丘陵の入り口目印は舗装路外れる土の道。

「青梅丘陵」は市街北部を東西に走り、西端からは西北尾根へと連なり、最終、「雷電山」、「榎木峠」に抜けて、更にその先は過日踏破した「高水三山」へと繋がる緑の回廊。

展望の開ける南面側は、手前より順に、「青梅線」、「青梅市街」、「多摩川」を見渡すことができ、更にその向こうには「金比羅尾根」の稜線を遠望する。

地元市民の散歩道でもある丘陵尾根には、親子連れ、犬連れ、散歩、ウォーキング、ジョギングと組合せ、目的済々な人々が行き交い、風景と馴染んだ服装振りを自慢する。

当地訪問は、「紅葉」と「多摩川俯瞰」を目論むが、前者は御岳駅周辺同様、標高400m内外にて時期尚早と早々に知り、後者は樹の繁りもあって、第三、第四休憩所、それに矢倉台から蛇行の一部を見るのが精一杯で、“時期を誤った”と猛反省する。

とは云え、青梅市民自慢の地、種目豊かな樹々は自然林の美しさに溢れ、「冬枯れ期の雑木林」、「早春芽吹きのもみぢ色」は、さぞ見事ではと思いを馳せる。

一応の目的地とした「矢倉台」は屋根付の休憩所を置く小さな丘。

宴会客が占有し、そのうち酔客1名の転倒を見るに至っては眉をしかめるばかりで、不愉快千万。

止む無く丘下ベンチで昼食とするが...、おとっと...、大事な、大事な「カップヌードル・ビッグ」が崖下にコロコロと...、追っ掛けっこする内、不快さ増幅。

(翌日、雪を冠した「富士山」が金比羅尾根向こうに高嶺の一部を見せていたと聞き、それも見逃したと怒りが再燃、カップの点検に忙しかったもんなあ！)

道を戻り、途中で林道へと右折し、赤土のだらだら坂を無人駅、「宮ノ平」へと下る。

駅近くの畑地で、「向日葵」の大輪と出会い、つい盛夏と錯覚、思わず汗を拭いてしまう習性に苦笑い。

晩秋の午後、日常の忙しさから解放され、のどかさに浸る。

御岳に移動。

宿は、前回に続いて「南山荘」。理由は簡単、前回宿泊時、京王電鉄勤務の亭主からビールのサービスを受け、再訪を約束していたため。

何たる幸運か、広いベランダから見上げる夜空に満天の星。

名指しできる光は無いが、遠い記憶に残る“星降る夜”の再現に、何年振りかと、天を仰いで、ずっと以前の記憶を辿る。

遙か彼方の、都心の灯も明るく、空気澄み渡る今宵を知る。

翌早朝、寝ぼけ眼でカーテンを引くと、正面、「日の出山」が夜明けの白みの中に黒い稜線を引き、黒白、墨絵の世界を醸し出す。

しばらくすると、白みが徐々に赤味を帯び始め、やがて真っ赤な太陽が山端に姿を見せる頃には、黄金色の輝きへと見事に変化、これは大変とメンバーを起こして、久し振りの「日の出」を愛でる。

太陽が、すっかり、風景に馴染む頃、いつの間にか「日の出山」の背には真っ青にペイントされた秋空が広がり、まさに、“晩秋の好日”の始まり風景に満ち溢れる。

【余談12】米本氏は、毎訪問時、早朝の「日の出山」登山を続けており、幾度も「日の出山」から、「日の出」を迎えているとの事。

今回は、珍しく、富士が展望できるほどに空気が澄に切っていたとのことだが、文献によると、「日の出山」の名称由来は日の出を迎える山にはあらず、御嶽神社より見て日が昇る山の所以にて、この点だけは押さえて置く必要があるろう、うん！(“してやったり”のうなずき表現)

長尾平で紅葉を楽しんだ後、大塚山に立寄る。

途中、道を間違えて古里方面への巻道を歩いてしまうが、下りはいつもの道に戻り、豊かな秋色を満喫する。

行程最後は富士峰園地脇の坂道を御岳平へと下る。途中、会話はなく、山道には靴音のみ響き渡る。

下山後、御岳駅近くの溪谷岩場に降りて昼食。南山荘製の「おにぎり弁当」に、お湯を沸かして味噌汁付き。

食後、大岩に立って溪谷を見渡す。

向こう岸に黄葉に包まれた孤木の屹立を遠望し、溪谷に秋降るの図を観る。

第六回

日 時 : 8 . 19 (土) ~ 8 . 20 (日)

概略行程 :

- 1 日目 相模湖駅 ~ 石老山^{せきらうざん}入り口 ~ 顕鏡寺^{けんきやうじ} ~ 融合見晴台^{ゆうごう} ~ 石老山 (694.3m) ~ 大明神展望台 ~ 渡船場 ~ 相模湖駅 ~ 宿泊 / 姫谷温泉^{ひめたに}
- 2 日目 (姫谷新道) ~ 陣馬山 (857m) ~ 明王峠^{みょうおうとうげ} ~ 底沢峠 ~ 陣馬高原下バス停 ~ 八王子駅

メンバー : 米本、山田、吉川、森、磯崎

新緑を見送るも、やはり行きたやと、初めての夏山トレッキング。

趣向を凝らし、行き先も初めて中央沿線を選び、ポピュラーコースの「石老山」と相模湖挟んだ「陣馬山」とする。

早朝の、中央線相模湖駅に集合し、「石老山入口」へとバス移動。

「石老山」は苔と奇岩、怪石の山。

苔むす旧参道石段から取り付き、大岩を伝うようにして登り、途中、随所に立つ岩石の案内板では都度立ち止まり、“ふむふむ”と読み、氣息を整える。

中腹の「顕鏡寺」に到着。

手水で汗を拭き、境内の銀杏の巨樹を指さして、“秋には、寺全体が黄金色に染まり、その様、何とも見事！”と説明するや、“なのに何故、この時期に訪ねたのか”とばかりの冷たい視線に気付き、思わず眼を伏せる。

【余談13】“夏の山行く人の心は高嶺の花に咲いて語らん”と唱われる様に、夏山の楽しみは、雪解け後、お花畑に咲き乱れる「高山植物」を訪ねる山行きに代表される。

巡り会うには相応の高峰（2,000m内外）に登る必要があるが、交通路の開発が進んだ今日、さほど難しい話でも無い。（ただ往々にして、そうした山は「盗掘」等により、人に荒らされている事が多く、会うには、やはりそれなりの“汗かき”が必要かも知れない）

しかし我々が計画する近くの低山となると、多くのガイド・ブックは秋から冬を挟んだ春迄を登山好適期と案内し、積雪時の春山、炎熱時の夏山登山は余り薦めていない。

夏山低山の楽しみを挙げるなら、「キャンプ」、「沢登り」辺りになろうが、思いっきり汗を流す「涼感」も加えたい。

巨樹脇の小石段を上って、歩きを再開。

九十九に刻まれた山道は、途中、雨水路と化した赤土の道となり、足の掛かりを探して、慎重に高度を上げる。

「融合見晴台」で一服。

涼しげな朝の相模湖を遠望しながら、声には出さないが、“静かな湖畔”を、つい輪唱。出発前に、全員、木テーブルに座り、ポーズを取って、遠隔コントローラーで写真撮影。
道は、なお半ばにも達してないが、メンバーには伝えず、荷物を担いで続きを登る。

檜木の道を進み、やっと尾根に辿り着く。

汗を滴らせての山頂は霞か雲か、富士は無論、丹沢方面の展望も無く、在るはむせ返る暑さと、耳うるさい虫の羽音のみ。

汗に濡れた衣服を周辺の樹々に掛け、“衣干すちょう 天の石老山”と唸り、早速、朽ちた木テーブルに持参の弁当を開き、毎度のことながら、旨い旨いと頬を膨らます。

汗が乾く間もなく、下山を開始。赤土の急坂を駆け下る。

「大明神展望台」で小休止。

眼下に相模湖を臨み、水光る湖面の向こうには高尾山系が連なり、左奥には、明日登攀予定の陣馬山が横たわり、中央に景信山（^{かげのぶさん}727.1m）、右手には高尾山（599m）が鉄塔を光らせ、連山の背には夏の青空が広がる。

ただ、後方の南西方向、天空に浮かぶ筈の富士は、ここでも姿を見せず。

下山を再開。

生い茂る樹々の間を縫うように下り、沢沿いを進むと林道、舗装路と出会い、最後はの

どかな里山歩き。

ぶらぶら歩きを終え、目印の垣根で左折して、ジグザグ道を湖畔に下る。名も知らぬ垣根樹ではあるが、秋には深紅に染まり、周囲の紅葉と見事に調和するが、ここは知らん振りして、“今は黙していかん”と「北帰行」。

客が集まり次第出航すると云う渡し舟は、我々が乗り込むや否や、直ぐに出発。

舳先に一匹の犬が座り込むが、友好的な風はなし。バランスを取るためかとも思うたが、船賃聞いて、下船を許さぬためと知る。

向かう先は、対岸の相模湖公園船着き場。

時期ならば、紅葉、黄葉で染まり、湖面向こう（すなわち、現在地側）の石老山、山の端に沈む夕陽を見ることができ、老いも若きも集まる湖畔の公園。

到着するや否や、素知らぬ顔で相模湖駅へとまっしぐら！

【余談14】何と、その後のニュースにびっくり仰天！

湖畔の観光船業者（湖巡航の遊覧船）2軒は、以前より犬猿の仲で大変な商売敵。

通常は交替出航で、一方が客寄せ中は他方が呼び込みを自粛する決まりが、なんと今回、その掟を破り営業妨害をするばかりか、最終、殺傷沙汰にも及んでしまったとの事。

加害店は営業を休止したとのことだが、一見のどかそうな観光地にも、凄まじい闘いがあることを垣間見る。

それにしても犬は見たが、猿はなあ...？

宿は陣馬の湯、「姫谷温泉」。

陣馬山麓、栃谷川沿いの鉱泉湯で、小振りながら露天風呂も整のえる高級宿。せせらぎ音は夜通し鳴り響き、窓に虫除け網戸は取り付けられているが、冷房設備不要の「山の宿」。

汗を流し、浴衣に着替えて、さあ宴。

ビール瓶に滴る水滴を拭き、グラスを返して準備は万端、“さあ、さあ飲もう、さあ飲もう、夏だ、ビールだ、さあ乾杯、グビッ、グビッと喉の渇きを潤おし、さあ飲もう！”

あれれ、...、何故か不明も、メンバーは早々と寢床に就き、気持ち良さそうに寢息を和す。あれまっ、トホッホッ...！

硝子戸際の籐椅子に座り、栃谷川のせせらぎ音を聞きながら、一人酒。

“まさか、昼間の意趣返しでもあるまいに...？”、“かと言って、案内状の「夜更けた山の出湯では、湯煙り向こうの岩陰に、浮かぶ頂の白い影」に惑わされて、早寝した訳でもあるまいに...？”、“いやいや、ほど良い疲れに美酒が効いて、つい心地良い眠りに誘われたに相違なし”と合点し、グビビッと飲んで寢床に入る。

翌日も快晴。

朝食後、山宿では珍しい牛乳のデザートを馳走なる。

前日約束の、明王峠下までの車による送迎は、途中の通行止めを理由に断られ、当宿亭主が切り開いたとする新道（当方にて勝手に、「姫谷新道」と命名、途中で栃谷尾根登山コースに合流）に取り付く。

急な登りが連続し、早々に汗滴らせての歩きとなるが、途中、谷からの涼風が吹き上げる箇所が至る所に在り、何とも爽快、気持ち良い登山となる。

山頂はまさしく360度のパノラマ展望。

しかし、北面、奥多摩の山並がまずまずの眺望を見せたのに対し、前日同様、南西方面、「丹沢」、「富士」、「南アルプス」は霞の中で姿を見せず。

以前、茶店亭主から聞いた「ビュー・タイミング」、「冬場の寒冷期、強風、大雨等の翌早朝が良」を思い出す。

茶店の亭主が我らの登山コースを訊ね、「姫谷の親父は、あの下山路を「藤野駅近道」と勝手に案内看板を立てているが、あれは自分のところ（姫谷温泉）への近道で、藤野駅には遠回り、何とも困った奴だ」とコメントする。

山頂には茶屋が3店（富士見台、清水、信玄）あり、内一軒は姫谷の親父の親戚筋と聞いたが、この亭主は...？

尾根道を下り、富士の撮影ポイント、「明王峠」で小休止。

涼風を求めて樹間に座り込む内、余りの心地良さにしばらくは居眠りタイム。

夏の高校野球を聞きながら、木洩れ陽の尾根道を底沢峠迄歩き、「陣馬高原下バス停」への急坂を下る。滑落懸念と、膝にも厳しい悪路を無事下山、麓の清流で汗を流し、林道を抜けバス停へ。

何とそこには、魚返夫妻が姉さんと！

聞けば、我々が下山路に取った道を登り、明王峠から陣馬山に歩いて、和田峠へ下山。道中、夫人（旧黒田嬢）が脚を捻挫し、峠より車で送って来てもらったばかりとのこと。

と言うことは、途中、陣馬の尾根上でお互い擦れ違った勘定にもなるが、互いに気付かなかった訳である。因みに、最初に気付いたのは夫人で、山田氏の変わることのない風貌から解ったとのこと。

募る話をバス車中に繋ぎ、JR八王子駅で別れる。

すっかり様変わりした八王子の駅前中華飯店に入り、軽く乾杯。

後日、米本氏からの依頼で、今回のトレッキング・スナップを大和氏宛送付する。一時なりとも、心とんで貰えれば幸いである。

第七回

日時：'01.5.19(土)～5.20(日)

概略行程：

1日目 奥多摩駅～(森林浴コース)～氷川キャンプ場～奥多摩駅～桃ヶ沢～おくとまむかしみち～境橋～奥多摩駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊/登奈利荘

2日目 長尾平～ロック・ガーデン～長尾平～御岳平～御岳駅

メンバー：齋木、米本、山田、吉川、森、磯崎

小林氏初参加の予定が、急な会議で欠席となり残念至極。それでも、これまで最多人数6名の参加を得、**ゴマ塩混じりの黒烏が奥多摩路に群をなす。**

自他共に認める“晴れ男”、森氏の妖術に、ますます磨きが掛かり、今回も快晴下のトレッキング。

風薫る五月の朝、登山客で溢れる奥多摩駅から近くの溪流沿いの道、「ふれあいの森林浴コース」を歩き、氷川キャンプ場に向かう。

柔らかで、透ける緑に包まれた散歩道は空気も清冽、水光る川面は眩しく、しなやかに伸びる小枝の若葉が眼に優しい。

二つ目の吊り橋を渡って、氷川キャンプ場前、鋸尾根登山口に出る。

散々騒がした野外炊さんのメニューは、予定通りに手間の掛からぬ「素麺流し」。とは言え、各家庭の習いが主張され、料理進行にはそれなりの紆余曲折有り。

一応の合格点に達したのか、多めの麺も無事完売。(M氏がぼやく、“行き掛かり上、無理して食ったもんなあ！”)

ただ、工夫の「ジャガ芋の蒸かし」と「ポップ・コーン」は余分であったかも。

今回は、“おくとまむかしみち”のウォーキング。

かつて、甲州間との経済要路の一部であった“むかしみち”は、奥多摩/氷川(奥多摩駅付近)から奥多摩湖/水根(小河内ダム近辺)迄の約9kmを指し、旧青梅街道の一部も含む。

現在の新青梅街道とも並行し、途中、どこからでもバス停に出入りできる利便性から、ウォーキング雑誌では、しばしば紹介される人気のコース。

春の息吹を胸一杯吸おうと、今回はその中間路、桃ヶ沢～境橋間の約2.6kmを歩くことにし、桃ヶ沢バス停で下車する。

新青梅街道から少し下り、分岐する旧青梅街道に入ると、そこはすでに、“むかしみち”。奥多摩/氷川方面に向かって、歩きをスタートする。

旧街道の面影を残す“みち”は、ほぼフラットで緑に包まれた静寂の道。

歩く左手/北側上部を新青梅街道が走り、右手/南側崖下は「御前山」、^{そうがく}「惣岳」から流れ込む「惣岳溪谷」が沿う。

溪谷を覆う樹々は、なお若葉の育みながら、汗ばむ陽気に氷水が旨い。(詳細は語らぬ方が**良いが、奥多摩駅前スーパー購入の「氷」が、キャンプ場に続き、ここでも大活躍!**)

途中、溪谷に懸かる「^{どうどころ}道所吊橋」、^{しだらく}「しだらく吊橋」から「惣岳溪谷」を見下ろし、谷の深さと水の流れの急を知る。

橋の袂に留まり、頻りに人数勘定する御仁が居り、どうかしたかと訳を訊ねると、橋梁に取り付けられた看板を指さす。

“同時渡橋は5名迄”

“みち”の道中そこかしこに、往時の生活や神々への信仰振りを窺わせる史跡が残され、傍らには、懇切丁寧な案内板も立ち、都度立ち止まり、“むかし”を懐古するが、何故か、荷駄積む馬の歩む様はイメージできず、悠久の時の流れも感じられず、“みち”を切り取り歩きしたせいとも気がする。

道端民家に人影は見られず、意外かな、奥多摩/氷川方面から上るハイカーとの出会いも無く、我らの会話以外、時折響き渡るは道上を走行する車音のみ。

コースの最後は巨樹、「いろは楓」。

季節は外れるものの、見事な枝振りを見せ、秋の“みち歩き”を誘う。

坂を下り、橋上のバス停、「境橋」へ。

さきほど歩いてきた奥多摩湖側トンネル上部草むらに、猪突猛進する動物を見つけ、“**牡丹鍋には、まだ早過ぎる”**、とみんなで大笑い。

(後に、あれは「カモシカ」と笑う人が居るが、いづれにしても、「猪」、「鹿」、「蝶」で一役なり!)

満員バスに乗り込み、御岳の宿へと奥多摩駅へ。

宿は久しぶりの「登奈利荘」。事前の打診で、メンバーからの根強い支持を知る。

料理は相変わらず秀逸で、有償か無償かで悩ませるカラオケをサービスするばかりか、部屋で持込み酒を飲む最中、いきなり襖を開けて、素知らぬ顔で果物を差し入れする女将の如才なさは健在なり。

二日目はロック・ガーデン巡りの後、長尾平に戻って昼食。

端の木テーブル脇に青々と伸びる一本の若木を見つけ、溢れるばかりの生命力を愛でんと、座るつもりで荷降ろしするや、“そこは駄目！”と大喝受けて慌てて離れる。

声の主はもちろん山田氏で、その木は何と「漆の木」。それにつけても、山田氏の博識振りには改めて感服するばかり！

晴天下、陽光燦々と浴びながら、「おにぎり」と「おでん」をメニューに楽しい昼食。

今回、「登奈利荘」から大鍋借用と言う妙手見つけるも、空腹のメンバーには加熱すら待てず、折角の工夫も実り少なく、何とも遺憾で拍子抜け。

食事の話題は、しばし、“漆談議”が続き、後に座る若いカップルをからかったりして、大笑い。

食後は木陰に移り大休止。

草枕で横になる人、肺空気を入れ替える人、会話を楽しむ人、写真を撮る人と、のんびりとした時の流れに身を任す。

下山途中、鍋の返却に登奈利荘に立ち寄ると、笑顔の女将から茶を勧められたメンバーはつつい座敷に上がり込む。

案の定と云うべきか、靴紐を締める頃、手には溢れんばかりの土産物を買込み、何とも鮮やか女将の商魂！

第八回

日時：'01.12.8(土)～12.9(日)

概略行程：

1日目 初狩駅～椎茸栽培場～高川山(975.7m)～(古宿コース)～リニア資料館～田野倉駅～大月駅くわさい～桑西くわさい～
宿泊/破魔射場・金森(民宿)

2日目 桑西～大月駅いわどのさん～岩殿山(634m)～大月駅

メンバー：山田、吉川、小林、森、磯崎

初めての、12月の山歩きは展望を求めて富士の山梨側入り口、大月を訪ねる。
小林氏が初参加するも、米本氏が脚の調子今一つで、残念ながら初めての欠席。

空気は凜と張り、陽光柔らかな早朝の「初狩駅」に駅員相手に騒ぐ男が一人居り、その傍らには下を向く男がもう一人。

“何しろ、「ホリデー・パス」がお得と教えられ、大枚二枚に40円払って買ったわなあ。ところが何だって、使えるのは今日が限りだって？”

でも俺、今日は帰らないよ。端っからその予定だよ。”

“えっ、払い戻しは駄目だって？そんなつもりで訊いちゃあいねえよ、フン！（苛立ち表現）”

“つまり何だよな、1,650円で来られる所を、ホリデー・パス代2,040円払って、更にご丁寧に区域外料金190円を払わせて貰ったってことだよなあ。”

“間抜け幹事の勤めとは云え、気付かなかった俺も悪いよ。でも天下のJRさんともあるもんが、客が勘違いしちまうような、そんなべらぼうなことをやっちゃ駄目だよ。”

“こう言っちゃなんだが、明日の日曜日をホリデーと思っただけ可笑しいかい。ホリデーにホリデー・パス使って可笑しいかい、えっ...？”

“何だって...、お偉い人が決めたことで、お兄さんは係わっちゃいねえって...、そりゃそうだ、どう仕様もねえか。”

“あ～あ、朝から験が悪いや...畜生、山へ登るのを止めて、今日一日、JR乗り回しちゃおうか。”

（駅員奥に入り、再び登場）

“...、何だいこりゃ...えっ？白旗史朗撮影の「秀麗富嶽十二景」のポスター？...なかなか綺麗じゃねえか、...えっ、くれるって？本当にいいのかい、悪いなあ、...折角だ、貰っちゃまおう。”

“何か気遣わせちゃったかな...、邪魔したな兄さん。”

【余談15】 民営化後のJRは着実に改革を進め、何とも素晴らしい経営振りである。

新幹線建設に際しては、既存の不採算路線を地元第3セクターへの経営委譲を条件とし、いつのまにか、「ひかり」を「のぞみ」と名称変更し、事実上の値上げを実現。

我らへの影響はトクトクキップ、「高尾・相模湖フリーキップ」に続き、「奥多摩・秋川フリーキップ」も廃止され、「ホリデー・パス」も2,300円に大幅値上げ、実質的には利用価値はほとんど無くなった。（'04.2）

“話は聞いて貰うものだ。ところで後のメンバーはどうなってんだ？おっといけねえ、携帯に電話が入ってらー。”

“もしもし”、“...何だって？ 電車に乗り遅れた...、でっ？、大月駅からこっちにタク

シーで向かってるてえ！了解、了解”

“ 何でえ、もっと大馬鹿が居やがった。”

若干の遅れにて、無事出発。初冬の陽を受け、高川山への林道に入る。

今後のメイン・ルートとガイド・ブックで薦められるコースは、登るに連れ、小石だらけの悪路となり、登山道に入ると霜解けにより何とも歩き辛い泥濘続き。

それでも順調に高度を上げて、山頂には予定より40分早めの昼前に到着。

【余談16】計画タイムにはかなり余裕を持たせている。

例えば、初狩駅から高川山迄の標準コースタイム（休憩時間等を含めぬ実歩行時間）は90分であるが、今回の計画では160分を予定した。

結果的には120分の歩きであったが、コースタイムはあくまでもスケジューリングの参考に過ぎず、さほど拘る必要はないと考えている。

歩行時間を気にすると、間違いなくバテが早く、事故にも繋がり易く、肝心のトレッキングを楽しむことはできない。今後共、マイペースの歩きに専念するつもりである。（あれ、どこからか拍手が！）

なお、トレッキング一般論では、50分の歩きに10分の休憩と云われ、上記コースに当てはめると2ピッチ100分のコースとなる。

賑わいの山頂は南正面に据わる「富士山」は黒ずみの山容を見せるのみで、南西面の南アルプスも銀嶺を隠し、残念ながら期待したシャッター・チャンスは得られず。

それでも、北面の「滝子山」(1,590.3m)、^{たきこやま}「雁ヶ腹摺山」(1,874m 五百円札の富士撮影地として有名)、^{がんがはらすりやま}東面の「九鬼山」(970m)、^{くきさん}丹沢・道志山系はまずまずの眺望で、山頂周辺に感嘆の声が絶えず。

【余談17】奥多摩、および中央沿線地区の山からは、北側、^{たかのすやま}「鷹ノ巣山」(1,736.6m 某氏が^{野郎}ビバークした山)、^{雲取山}「雲取山」方向の展望は比較的恵まれるが、南の丹沢、富士、南西の南アルプスは昼時を迎えると、太陽の位置関係によるものか、眺望は後退してしまい、特に、「富士山」は山頂付近に雲がたなびき、昼を過ぎて雄姿を観るチャンスは非常に少ない。（学問的には、陽射により上部空気が暖められ、それを受けて山麓部冷気が谷風となって上部に上り、山頂部の暖気を冷やして、雲を造成させるとのこと）

できるだけ早朝に登るしかないが、展望を求めるなら冬場に限る。

なお、「秀麗富嶽十二景」は大月市が選定した同地区十二山からの富士十二景で、「高川山」^{高川山}、「滝子山」^{滝子山}、「雁ヶ腹摺山」^{雁ヶ腹摺山}、「九鬼山」^{九鬼山}、「岩殿山」^{岩殿山}等が名を連ねている。

山頂南斜面の岩場に休憩場所を確保し、楽しい食事。

毎度ながら、色んな食料が提供され、吉川家手製の「おにぎり飯」に頬を膨らませ、何と今回は、小林氏自らが早起きして調理した煮物2品を馳走になり、感謝、感謝で大拍手！

道と気付かず、登山道にシートを敷いて食宴するパーティが居り、事情を説明し移動を勧めると、今更面倒とばかりに岩を跨いでの迂回を求めるには、ただ唾然とするばかり。

周りの人からの非難も加わり、やっと片付け始めるが、中高年に限らぬマナーの悪さはどうしたものか。

しばし展望を楽しんだ後、人少ない古宿コースを東南方向に下り、「小形山」を巻く。九十九折りの急坂は落ち葉に埋もれて、膝に負担の少ない冬枯れの道。

途中の谷間に時期外れの紅葉を見つけて、樹の種類がとか、日照条件がとか、種々、要因を究明し合うも、さすが自信有る回答は無く、最後の結論は、“こんな時、大谷氏が居たならなあ”で、一件落着。

時間が有ればと計画した、「リニア資料館」に立ち寄り、幸運かな451Kmの試走を観る。いやはや何とも速い！

無事、初日の予定を終了し、富士急/田野倉駅へと田圃道を歩く。

途中で出会った親父に駅への道を訊ねると、返答に今一つ要領を得ないが、一応、我々を案内する風にて後に従う。他のメンバーは素知らぬ顔で先を歩くが、解っている筈は無く、時折、後ろを振り向くは笑止千万！

途中、親父の自宅前で別れたが、やはり正確な導きであった。

大月駅から、バスに乗り継ぎ、今夜の宿へ。

終点のバス停、「桑西」に着く頃には夕闇が迫り、今度は駅から同乗の女の子にガイドを頼む。彼女は知的障害者と見受けられたが、心籠る案内を得、無事、「民宿 破魔射場」に入る。

(別れた彼女が向かう丘上に明るく灯をともし民家が一軒、彼女の帰りを待つ家庭の明かりに相違なし)

「破魔射場」の名は北西の山、「ハマイバ丸(1,752m)」から。

かつては溪流釣客用の山宿であったが、上流ダム工事の開始により漁場を閉鎖し、その後を民宿コースに変更したとのこと。

入場後、声を掛けても応答はなく、土間に据えられた、野趣豊かな達磨型ストーブに薪をくべ、勝手に暖を取るが、電話予約時、“釣り宿をやめているのは知ってるわよねえ”と、やけに愛想のなかった大女将の対応振りを思い出す。

間無く、娘さんに案内されて、檜炬燵の整えられた和室に落ち着き、良かった、良かったと変な安心。

他に泊客が居ないのか、山宿は静寂に包まれ、習いで窓を開くと、窓外は漆黒の闇に溪流音が鳴り響く。

奇怪な岩石が立つ浴槽は全員が入っても十分な広さで、湯量も豊か。水滴が硝子戸を滴り落ちるのを見て、外部との寒暖差を知るが、湯加減上々、“いい湯～だな”と、つい一唸り。

びっくり仰天、宴の席は、「囲炉裏部屋」！

願望から、勝手に事前案内したが、まさか実現するとは...、若干、整い過ぎではあるが、鉤も垂れ下がり、席には厚い座布団を敷く。

外を寒風が吹きまくる中、囲炉裏を囲み、鉤に掛けられた「牡丹鍋」と「おでん」の馳走で飲み食いしながら、本日の長かった行程を振り返る。

部屋に戻って矢倉炬燵に入り、二次会開始。

テーブル上に、地元の酒、「笹一」の一升瓶を据え、互いの近況を当てに冷酒で飲む。冬の夜は深々と更け、窓の外からはドグドグと流れる川音が途切れることなく響き渡る。

翌朝も快晴。

いつもと違い、椅子掛け、土間食堂での朝食が、又、一興。

奥で、斜に構える大女将は想像通りの愛想無し(でも、中々美形ですよ!)ではあるが、給仕してくれる娘さんは器量良しで、明るい快女兒！

釣り宿から民宿に変更した経緯がダム建設であったことを聞きながら食事を終え、別れを告げる。

バス停、「桑西」に歩き、大月駅への始発バス待。

待合室には、手作り、小振りの可愛い座布団が並べられ、地元人の心遣いを想うと暖かさが一段。

我等5名のみで出発したバスも、途中、徐々に乗客を増やし、山麓近くになるといつの間にか満席となり、病院通いの仲間同志か、楽しい会話が車内に弾む。

その時、突然とも云うべく、眼前に大きくて真っ白な富士が出現！

“オーッ”と、つい声を上げるが、地元人も認める威風堂々たる雄姿を民家軒上に追いながら、今回のトレッキング目的はこれで果たせたと確信する。(電線が張りめぐらされた町並みの印象と共に、未だ残る鮮烈な記憶)

しかし大月駅から「岩殿山」への歩きは、正に、“富士を見ながら登る山”の見本で、駅から登山口迄、登山の途中、山頂からと、いずれの場所からも、そして昼に掛かっても、その姿を隠すことはなく、終日、富士三昧。

ただ、メンバーから、“山麓散策コース”との案内はガイドミスである”との厳しい指摘を受け、“一気の登りが続く、なかなか悔れないコース”と訂正し、なんとか理解を得る。

【余談18】第二回の失敗例もあり、事前の下見は大体行っている。

例外は第五回の「青梅丘陵」と、今回の「岩殿山」で、どちらかと言うと行程が短く、時間的にも余裕が有るケースである。

今回はともかく、第五回と、第六回の「夏山」訪問時期には若干の悔いと反省がある。

山頂下の丸太に座り、眼前に富士を見据えて、おにぎり弁当。

吹き抜ける風が心地良く、時折の強風に、帽子を深く被り直したり、小石で食卓シートを押さえたりと大はしゃぎ。

少しだけ気になったのは、山頂でと言うより、何故か、公園で食事をしている風が感じられた点で、メンバーは如何也。

いつものことながら、2日目の昼食は会の終わりが近づくのを意識し、無事を安堵すると共に一抹の心残りが隠せず、つい次回を語る。

なお、姿を隠さぬ富士を後に、下山路を別コースに取り大月駅へ。途中、山田氏が脚を痛めるアクシデントあるも、大過無し。

駅前のフランス風レストラン、「レストラン・アダージッシモ」に入り、冷えたビールで、“お疲れ様！”と乾杯を交わす。

メニューに、「枝豆」、「冷奴」、「焼き鳥」を探すが、意味不明で愛想の無いカタカナばかりが並び、つい知らん振り。

帰路の「特快」車内は、酒も手伝い、メンバー爆睡。

【余談19】約1カ月後の‘02.1.12(土) 南西の山並み向こうに大きな富士を見据え、TBSラジオ/土曜ワイド、“永六輔、その新世界”(毎土曜日、8:30~13:00)を聴きながら、「陣馬山」を登る。

平井麻衣子キャスター、“本日の「乙女探検隊・関東新地図」は、山岳写真家として皆様ご存じの白旗史朗先生に故郷大月市の「岩殿山」をご案内して貰います。

現在機材を持って先生と一緒に登山中ですが、私の目の前には大きくて真っ白な富士山がその雄姿を見せています。

途中の資料館には先生の「秀麗富嶽十二景」等の写真展示コーナーも設けられているとのことですが、先生、本日は宜しくご案内のほどお願い申し上げます。

『彼からの興味有る話2話』

1. 静岡側からの富士は観る角度により風貌様々にて、「御殿場富士」、「三島富士」等、場所により呼称を変える。一方、山梨側からの「富士」は一つであるが、時の流れに従い刻々と表情を変えるので注目。

2. 登山体力について、登りは1/3の力で、下りは余力を残し2/3の力で。

(皆さん、どう思います?)

<余談の付録/平井麻衣子さん> '04.2.21(土)「高川山」登山中に聞く土曜ワイド。

「乙女探検隊」のゲスト、元小結舞の海が平井麻衣子キャスターと「両国界限」を案内。彼らしく、一見、誠実そうでありながら、それでいてシニカルなコメントが続いたが、終了間際の一言、“ところで、乙女探検隊の「乙女」はどちらに居られるのでしょうか?”

その一瞬、麻衣子さんばかりか、スタジオ、リスナーも凍り付く。

自身の言い様にも思い当たるところがあり、深く反省。

第九回

日時 : '02.11.2(土)~11.3(日)

概略行程 :

1日目 奥多摩駅~(森林浴コース)~氷川キャンプ場(飯盒炊さん)~梅久保~(おくたまむかしみち/いろは楓、境橋、槐木)~奥多摩駅~御岳駅~御岳平~
宿泊/登奈利荘

2日目 ~長尾平~大塚山(昼食)~御岳平~御岳駅

メンバー : 齋木、米本、山田、吉川、磯崎

春を見送り、約1年振りのトレッキング。

人で賑わう早朝の奥多摩駅に予定のメンバー集合。残念ながら、若手の小林、森両名は欠席する。

寒暖の変化が急であったことから、紅葉は早目とも云われ、日程調整に苦しんだが、向かう青梅沿線車窓は、なお緑が濃く、早、時期尚早を知る。

ただ週始めの天気予報が外れて、一転、“大快晴”には大喜び。

駅前、「スーパー小川屋」で食材を求め、いつものように溪流沿いの道、「森林浴コース」を歩いて氷川キャンプ場へ向かう。

氷川渓谷での野外料理は3回目。

河原のあちこちに煙が立ち、人は好日を捉えるに抜かりなしと感心し、溪流近くのいつもの場所に荷を降ろす。

会頭をコック長に、本日のメニューは調理難易度をぐ~んと上げて、「十目飯し」と「薩摩芋の味噌汁」。

身内のことながら後者は秀逸、前者は水加減に若干の迷いがあったが、まずまずの出来映えと評価が一致、それが証拠に、多すぎるのではと懸念された五合の飯が無事完売。

【余談20】今回、当初のメニューは「ソース焼きそば」+「味噌汁」であった。

しかし、吉川氏から「焼きそば」には「ビール」、「味噌汁」はないでしょうとの指摘があり、別に「ガーリック・ライス」のリクエストを受けた。

しかし、「ガーリック・ライス」のレシピを一読し、その複雑さからこれは無理と即断、当メニューに変更したものである。

因みに、十目は「里芋」、「筍」、「牛蒡」、「人参」、「椎茸」、「竹輪」、「油揚げ」、「ジャコ煮干し」、「グリーンピース」、「三つ葉」とした。

またまた行動計画の変更。

“おくたまむかしみち”の行程前半1/3ウォーキングを、予定の逆歩きとし、梅久保から氷川/奥多摩駅へ下ることにする。

スタートは目玉の一つで、わざわざ前回のコースに重複させた巨樹“いろは楓”の再訪から。しかし、当然ながら、楓葉は青々とした繁りを見せ、色付く気配は一切無し。

“再度、いつの日にか”と唇を噛みしめるが、当然の結果が予想されながら、何故に訪ねたかは何とも不思議で、どうにも不思議。

その直後、「不動の上滝」への道を、“なんとも凡庸すぎる”と切り捨て、境橋から橋詰へと隧道近道とんねるを歩く功利的判断をしたから、なお不思議。

それにつけても、何ごとにも動じることのないメンバー諸氏の、この鷹揚さはどこからくるのか摩訶不思議！

「橋詰」バス停横の石段を北側に上り返し、再び、“むかしみち”に戻る。

今回の“むかしみち”は驚くばかりの賑わい振りで、擦れ違う人、先を急ぐ人、共に多く、かつての往来風景を彷彿させる。

ただ、秋彩色は所々に見られる程度で、紅葉を楽しむには今一つ。

奥多摩湖 / 小河内ダム建設時、資材運搬用に敷設された廃線軌道プレートガーター跡を観た後、マメ科の巨樹が立つ、「槐木^{さいかちぎ}」の休憩所で小休止。

さほど古いものとは思われないが、付属する立派なトイレ設備には蜘蛛の巣が張り、建物そこかしこに傷みが目立つのは何とももったいない。

奥多摩 / 氷川から歩き始め最初の峠となるこの辺り、道は舗装されて、建ち並ぶ民家の造作も新しい。

“むかしみち”を忘れ、“小さな旅”のメロディが浮かぶはそのせいか。

“みち”は再び尾根巻道に入るが、右手の崖下樹間には車の走る「新青梅街道」が見え隠れして、里との近い距離を知る。

間無く、どこからか、賑やかな演歌の響き。「祭り」か「運動会」か、はたまた、「大売り出し」かと、おしゃべり三昧...、いやっ、推理し合いながら、どんどん進む。

行程の最後は羽黒三田神社手前での隧道^{トンネル}跡覗き。現在も廃線軌道跡を残し、かつての労苦と希望を観る。

“おきたまむかしみち”の歩きを無事終了、氷川 / 奥多摩駅は直ぐの距離。

かくして、“むかしみち”踏破も、残るは、行程後半 1 / 3 の桃ヶ沢 ~ 奥多摩湖 / 水根間のみ。これまでに比し、アップ・ダウンは、若干、急になるが、我らが脚力に何の不都合もなし！

御岳駅は人盛況。

16:00 PM 近くの遅い時間にも拘わらず、なお山に向かう人が多く、臨時バスの捌きに汗掻く西東京バスの親父、つい笑みこぼすは正直者。

山上、ケーブル御岳山駅も同様で、下る人の待ち行列が御岳平迄溢れ返る。

空一転し霰降る中、急がぬ我等は宿入りする前に一服と、御岳平木テーブルに腰掛けて、お湯を沸かし、コーヒー、紅茶でしばし休憩。

頭上の花棚、「大藤の花」に向かって、“枯れていては頭の保護にもならぬでないか”とふざけて叱る。

宿は今宵も「登奈利荘」。

“ 旨い！ ”、“ 旨い！ ”を連発し、“ 満腹！ ”、“ 満腹！ ”、とお腹を出して、「カラオケ」が鳴って大賑わいの大笑い。

女将より、同宿の写真家？ / 関口氏は朝が早いのでと諫められ、宴を切り上げ部屋に戻って、また痛飲。女将が差し入れの二合冷酒も足りず、いざ出番と非常用の気付け薬、“ トリス ”も出勤。

全員揃っての夜更かしは珍しく、終わり知らずの楽しい二次会。ワイワイ、ガヤガヤ、呂律怪しい会話は果てしなし。

散会、夜更けた山宿に静寂が戻り、硝子戸を引いて窓外の冷気を取り込む。漆黒の闇向こうに都心の灯は明るく、空には満天の星、明日の快晴は違い無し。

翌朝は驚くばかりの空澄み渡る快晴日。

都心の高層ビルはおろか、茨城 / 筑波山まで明瞭な山容見せ、既に一汗かいた米本氏も、“ 今朝の「日の出山」からの「日の出」は最高、「富士山」も明瞭な姿を見せ、絶好の眺望！ ”と高揚気味に語る。

昨夕方の「霰」を思いだしながら、“ 強風に限らず、霰でも ”と理解し、両方併せて、“ なるほど、なるほど ”と肯く。

朝食には昨夕クエストの「御岳大根の煮物」が添えられ、またまた美味と舌鼓。

添えられた辛みの「もろみ」は奥多摩入手も、もう1種の「もろみ」は自家製と自慢した女将、我らの、“ 旨い、旨い ”の連発に、ついほだされたか、大奮発、土産用にと後者のお裾分けを全員が頂戴する、感謝、感謝、嬉しいな！

【余談21】最近、武蔵御嶽の國、「御嶽神社」の境内に高札が立った由。

「隣近所荘」の女将が申し立てるには、春秋一度、宿を利用する客人の中に、講名、「烏森会」と称す集団が居ると云う。

“ 「人品卑しからずも、些細なことに感嘆し、なんでもかんでも褒め讃える。私も、ついその気になり奉仕に精出してしまいが、送り出した後、どうにも勘定が合わないばかりか、大変な持ち出しに気付く」、

と云う悪質なもので、いわゆる、「褒め殺し」の術かと思われる。

また、「烏」と名乗るも、毛色は半ば白髪にて体型メタボ、むしろ古狸の風とも聞かれ、いよいよ怪しい。

皆も、くれぐれも注意の上、それらしき者を見掛けし折りは、木の葉を軒下に吊すなり、門前に塩を盛る等によりその正体を見破り、くれぐれもたぶらかされることのないよう注意すべし。

神社官長

その横には、**“それにしては、女将の羽振り中々では？”** という『落書き』もあり。

長尾平は山麓よりも黄葉、紅葉が進み、秋色一色。

真っ青な空には雲一つなく、風も吹かない小春日和下、柔らかな陽を受け微睡みを楽しむ。

やがて、ヘリコプターの飛来が心地良い安息を邪魔するが、これも餌食と、早速に望遠鏡を取り出し、“事故発生による救援機”とか、“あのマークは報道機関のもの”、更には、“演習機”と諸説紛々に飛行目的を忖度し、しばし談笑、時を遣る。

(正解は、長尾平に新設されたヘリポートを利用したの、東京都消防庁による飛行訓練に到着。)

長尾平から大塚山に回る。

木の葉が樹間を舞うが、なお緑を残す紅葉前、踏みしめる黒土の道に落葉の重なりは薄く、期待はかなわず。

先を歩いていた母娘連れから山頂への道を訊ねられ、笑顔で答えるが、頭をもたげる妙なライバル心。幸いかな、少女のホイホイと駆け登る姿を見て、直ぐに醒める！

山頂に到着。

親子の姿は見られなかったが、中央の木テーブルを確保し、「握り飯」と「味噌汁」で、早目の昼食。昨夜からの行動を談議し、次回の予定を語る。

道を戻り、富士峰園地脇を御岳平に歩き、売店で、「もろみ」を探す。おばちゃんがサービスに淹れてくれた「昆布茶」は中々の味。

「御岳山」は本日も好日にて、人盛況なり。

第十回

日 時：‘ 03 . 5 . 24 (土) ~ 5 . 25 (日)

概略行程：

1日目 奥多摩駅～氷川キャンプ場／飯盒炊さん～桃沢～(おくたまむかしみち)～奥多摩湖／水根～奥多摩駅～御岳～ 宿泊／登奈利荘

2日目 日の出山～松尾～つるつる温泉～武蔵五日市駅

メンバー；米本、山田、吉川、小林、森、磯崎

出席予定の会頭が、風邪引き後の大事を取り欠席し、小林氏は所用にて2日目からの参

加となる。

前々日迄の天気予報に、“ 終に我らも悪運尽きたか、いくら何でも今回こそは雨中の歩き ” と覚悟する。

しかし、前日夕になっても、なお陽射しが残りに、“ ひよっとすると、ひよっとするのでは ” と微かな期待が広がり、一念発起し、照る照る坊主に脅しをかけるや、その甲斐あってか、雨が降らぬばかりか微かに陽も射す。

今回は奥多摩西北部の谷間集落、「日原溪谷」に入り、新緑揺らす五月の風に吹かれながら、「溪流釣り」と「バーベキュー」、更には、「日原鍾乳洞」見学を計画したが、はっきりしない雲行きもあり、またもや予定を変更。

初日は氷川キャンプ場での「飯盒炊さん」と“ おくたまむかしみち ” の残り 1 / 3 ウォーキングとし、2 日目は「日の出山」を山越えて、山の出湯、「つるつる温泉」への立ち寄りと衆議する。

【余談 2 2】今回初めて、無記名による「コース」のアンケートを採った。

前述コースは、いずれも圧倒的支持 (3 / 4) を得たもので、適度な汗欠きにアウト・ドアの楽しみを加味した内容が選択されたようである。多数決で決められるものではないが、今後の参考にしたい。

因みに、初日の残り 1 票は予定通りの「日原溪谷」、2 日目は「鳩ノ巣裏参道下山」、汗を滴らせてのフル登山は敬遠された。

急な炊飯メニューは「カレー・ライス」と決め、全員揃って、「スーパー小川屋」に向かう。

副食に、米本流「野菜サラダ」と、森流「舞茸のホイール焼き」が加わり、食材を抱えて、巨樹、「奥氷川神社・三本杉」脇を抜け、「森林浴コース」を氷川溪谷にと歩く。

何時もより、若干、川下に竈を立て、今回の竈人は会頭に代わる吉川氏。

いずれの料理も上々の出来と思われるが、量的課題を次回に残す。なかんずく、炊いた飯が 2 K g は、よくよく計算すると 1 升 4 合、一人当たりで計算すると三合弱の並外れ。

“ 販売最小袋がそれ ” と、かばう意見も出たが、反省頻り、捨てるに忍びず、「握り飯」にして全員に配る。

小林氏にも是非賞味して欲しいとの声が多く、熱き友情によるものが、それとも...は別にして、同氏の分も確保する。

【余談 2 3】定かではないが、学生、部活時代の一人当たりの飯盒量は、朝・昼は 1 合、夕は 2 合見当であったと記憶する。

年齢、運動量に相違があるとは云え、今になって考えて見ると大変な量で、未だに記憶するのは、大山山麓豪円山キャンプ場での夕食である。胡椒味の「ハムライス」をボール3杯平らげ、仲間の新入生は4杯目のお変わりをしていた。

興味ある事実であるが、パーティで最も過酷な重い荷物(40Kg内外)を担ぐのは2年生であるが、彼等を含め、上級生は小食である。

彼等の余裕は、自分がダウンする前に1年生がばてると云う確信で、これほど心強い味方はないようである。その時の構成メンバーは四年生が1名、リーダーの3年生が1名、2年生は3名で、新入生3名の計8名であったが、何故か炊飯の勘定は合っていた。(まさか、上級生が空腹を我慢したと云うようなことは...)

いつもの通り、予定時間を超える長い食事を終え、残り1/3の“むかしみち”へと奥多摩駅から、「桃沢」へとバス移動。

広い旧青梅街道の道脇に、“みち”への取り付きを見つけて、急坂を登る。

歩き始めとしては少々きつい上りであるが、頭上を樹々の繁りが覆い、爽やかさは十分、気合いを入れて黙々と進む。

登る途中に来た道を振り返るや、遙か彼方、「惣岳溪谷」方面から、我らが後を追う様に迫り来るメツチェン一名、色鮮やかなセーター姿が眼に眩しい。

坂を登り切ると、正面、西方向の葉陰越しに、「小河内ダム」の放水路急斜壁が忽然と現われ、一同感嘆の唸り声。規模小体とは云え、それなりの雄壮さを見せ、区切りも良しと一休み。

谷から吹き上げる涼風が心地良く、胸を膨らませて大きく深呼吸する。

間無く追いついたメツチェンに、“さあ、どうぞ”と道を譲るは我らの礼節、通り過ぎた後、“意外とおばさん”とばかりに顔を見合わせるは我らの性根、何とも恥ずかしい限りである。

更に続く“みち”を、“もうすぐ”、“もうじき”、“あの角曲がれば”、“その角過ぎれば”、“さあ着いたかな”、“もう着いたかな”とメンバーを励ますと、敵もさるもの、“心臓が飛び出しそう”と任意(勝手に)に一本立て、昔話に花を咲かせる。

【余談24】“メツチェン”は、もちろんドイツ語の、“娘さん”

山の言葉の多くはアルペンスイスを背景に、現在でも多くのドイツ語を残す。ex. コツフェル(調理容器) シュラフ(寝袋) ケルン(石塚)

“一本立てる”は“小休止する”の意で、重い荷を背負ったまま、ステッキ(ピッケル)

を尻にあてがい、立って休むことを指すとのことであるが、近時知った言葉である。

祠の小さな「^{せんげん}浅間神社」を右手に見遣り、無事、山上の集落に到着、民家軒下の石垣上に荷を降ろす。

規模少体ながら、眼前、山斜面には「棚田」が切り開かれ、目一杯植えられた野菜や花々の種類をなぞりながら、またまた、“小さな旅”の世界に浸り、棚田を背に全員の写真を撮り、しばし休息。

歩きを再開。

“みち”は再び尾根を巻く「山道」となり、急な左手山裾を鉄柵で守られた古道を辿る。

間無く、大きく視界が開け、左手の山麓側には小河内ダム・奥多摩湖取水部が俯瞰され、右手の山上には寄り添う様に建つ二軒の民家。

メンバーに“みち”の終わりが近付いたことを告げると、突然、吉川氏が、“ここは昔、友人と訪れ、見知らぬ民家で一夜の宿を世話になった憶えがある”と遙か昔の記憶を蘇らせ、その言葉に、皆の脳裡にセピア色の世界が広がる。

“みち”の最後に水根キャンプ場内の「むかしみち休憩所」に立ち寄り、“おくたまむかしみち”の全行程を無事踏破。

奥多摩湖、「水と緑のふれあい館」を覗いた後、湖畔のバス停に並び、奥多摩駅行きのバスを待つ。すでに時間帯を過ぎたのか、期待した臨時バスは来る気配が無く、宿入り時間の遅れを女将に一報。

なお明るい湖面の輝きを見つめながら、水不足により一時撤去されたと聞くドラム缶橋の現況は如何と、つい、水量を目測する。

「登奈利荘」には、いつもと約1時間遅れで到着し、早速、汗を流し、浴衣に着替えて宴の席に。

今日の女将はやけに慎ましやかで、“本日は「岩魚」が入手できましたので”と三つ指ついで口上を述べるが、何故か視線は鴨居に向かったり、台所を振り返ったりと宙に舞う。

その後も控えめな応接が続き、“ひとつカラオケでも”とかの明るい誘いは一切無く、仰々しさばかりが目立つ余所余所しい応接。

とは言え、料理の旨さに変わりなく、いつものようにワイワイ、ガヤガヤ楽しい宴。

部屋に引き揚げ宴の再開、テーブル中央に奥多摩駅購入の角瓶を据えて準備は万端、さあ飲むぞ！

しかし、何故かメンバーは元気なく、杯進まず、会話も弾まず。

TVでは阪神タイガースが苦戦中、観るに忍び難しと早々に床に就くメンバーも居り、

女将の妖術ここに極めり。

翌早朝5：00前、早起きした一部メンバーが、「武蔵御嶽神社」で厄払い？ 別に、ロック・ガーデンを一周する寝惚け者も約1名。

空気は清澄、朝露に濡れた枝葉の緑は鮮やかさに溢れ、鳥の囀りは耳に爽やか。

早、何組かの泊まり客が逍遙する長尾平の木テーブルで休み、厄払い人が炒れてくれたドリップ・コーヒーを喫みながら、至福の時をゆったりと過ごす。その旨さたるや...、何と表現すべし！

朝食を終えた9：00少し前に小林氏が合流。早速、「にぎりめし」を手渡し、「日の出山」へと荷を背負う。

皆まで訪れる「日の出山」は第二回目以来。

朱の鳥居を立てたりと、尾根道はそれなりに風景を変えるが、木の根、埋もれ石による足下の悪さは何ら変わるところ無く、

早朝の山頂に人影はなし。

密かに期待した眺望は、案の定、「御岳山」辺り迄で、富士は無論、新宿都心方面も霞の中。

階段状に造作された木ベンチに腰を掛け、お湯を沸かしてコーヒー・紅茶を又一杯。昨夜飲み残したウイスキーを滴らして、「ウイスキー紅茶」と洒落る御仁も居り。

やがて、御岳、五日市ノ上養沢・松尾と各方面からの登山者が到着し始め、山頂はいつもの賑わい風景。

木ベンチを譲り、南東方向、「松尾」への登山道を探して下山に掛かる。

息を切らしながら、急坂を登って来る人々と挨拶を交わし、鳥の餌付け台を見つけては「握り飯」を“馳走”。

久し振りに約1時間の長い下りを無事クリアするも、その後続く「つるつる温泉」への長い林道歩きが脚にはより厳しい。

温泉前の路上売店に、「ロン・ヤス団子」を見つけて大笑い。

中曽根ノD・レーガン、日米首脳による、「日の出山荘」での“水入らずの歓談”を記念してのものと思われるが、商魂逞しいと云うべきか...、後から来るメンバーに指さし知らせて、笑いを引き継ぐ。

(D・レーガン氏‘04.6.6永眠、合掌)

初めての温泉メニュー、「つるつる温泉」。

日の出山々頂を始め、下山後の入浴を誘う広告看板を至る所に立て、よほどの大資本経営ではとの「噂の館」。

早い時間帯のためか、下山客より車で訪れた一般客の方が目立ち、客の溢れる「温泉」は「山のいで湯」と言うより、「ヘルス・センター」の様相と云うは、見当外れと笑われるか？

ただ、芋を洗うがごときの入浴風景に、湯の循環具合を気にするメンバーは複数名。

浴後の昼食は畳敷きの大食堂。

地元の山菜を素材とする「釜飯し」はお薦め通りの味良しで、値段も手頃な値打ち物。その上、給仕をしてくれる娘さんは微笑が溢れて、元気潑刺、明るい返事で好感度は誠に良。

意外なるかな、経営母体は「日之出町」と聞き、それまでの不思議も氷解するが、娘さんが日之出町職員とは驚木、桃の木、山椒の木！（弾むと、何故かこうなる）

温泉発のレトロな乗り合いバスに乗り、五日市線 / 武蔵五日市駅へと向かう。

車中、「温泉入浴」に「アルコール」が入ったメンバーの眼は心なしか微睡み気味も、到着直ぐにホリデー快速、「新宿行き」の便を得、帰宅に向かう。

拝島で八高線利用の山田氏と、立川で中央線利用の吉川、小林、森の各氏と別れて今回のトレッキングも無事終了。

（中央線は、またもや事故で停止中。幸い、直ぐに動き始めたようだが、なんともトラブルの多い問題幹線。事情背景は単純でないにしても）

第十一回

日 時：' 03 . 11 . 23（日）～ 11 . 24（月）

概略行程：

1 日目 武蔵五日市駅～秋川橋河川公園 / 飯盒炊さん～本宿役場前～^{ほつさわ}弘沢の滝～下平～
宿泊 / 民宿 かんづくり荘

2 日目 ^{かずま}数馬温泉センター前～都民の森～^{みとう}三頭大滝～十里木ランド / バーベキュー～武蔵五日市駅

メンバー；齋木、米本、山田、吉川、大谷、小林、磯崎

東京都唯一の村、「檜原村」は三方を尾根に囲まれた「柚子の里」。

奥多摩南西域に位置し、北には御前山山塊と大岳山稜 / 馬頭刈尾根が迫り、西には、山頂で山梨県との都県境界線を引く三頭山が座り、南には三頭山から張り出す「笹尾根」が出っ張り、尾根向こうの山梨県 / 上野原町との壁を造る。

更に、三頭山から伸びる別の山稜、「浅間尾根」が村の中央部を東西に走り、見事に村域を南北に分断し、山塊をなぞると、「文字模様」を象形する。

今回、初めて同地区でのトレッキング。

「浅間尾根」の東端から、檜原街道を南秋川沿い（「浅間尾根」南手）に上り、かつて養蚕地として栄えた「数馬の里」を、晩秋に訪ねる。

待ち合わせ地は奥多摩登山の、もう一方の玄関口、武蔵五日市線の終着駅 / 武蔵五日市駅。

連休中日の駅前バス・ターミナルは装いを凝らしたハイカーで溢れ返り、例によって、臨時バスが次々と仕立てられるが、客を捌くには追いつかず。

拡声マイクで、バスの行き先をが鳴り立てる案内人の周りには、終わるのを待ってバスの行き先を訊ねんとする中高年のハイカー達が纏わり付き、理由が解らず。

【余談25】奥多摩トレッキングの玄関駅は、既述の通り、青梅線の終着駅 / 奥多摩駅と武蔵五日市線 / 武蔵五日市駅である。

他のJR駅やバス停で降車する人の向かい先は、おおよそ推測できるが、さすが、上記2駅ではまったく見当がつかない。

ターミナルは武蔵五日市駅の方が整備されているが、混み具合、利用頻度は圧倒的に奥多摩駅が高いものと思われる。

今回は連休を利用し、初めて（日）（月）のスケジュールを組む。

森氏は所用により欠席となるが、大谷氏が久し振りに加わり、過去最高7名参加の大編成となるが、定刻迄には全員が集合する。

天気予報は初日 / 終日晴れ、2日目 / 晴れ夕刻曇りと喜ばしてくれるが、**見上げる空には雲が厚く、つい森氏欠席の不安が頭をよぎる。**

早速、パーティを2分。昼食担当の小林氏、それに山田、大谷両氏の計3名が、駅前、「パーク・ショッピングセンター」へ食材の買い出しに、残り4名は竈造りに、「秋川橋河川公園」へと別動する。

公園への道中、抜ける風は冷たく、路上周辺の樹々は葉落が進み、なお残る葉にも色褪

せが否めず。

橋上から見下ろす「秋川」は、意外なるか、水量は乏しく川幅も狭小、時期を逸っしたためか、この時期、この程度のものかと煩惱しながら、河川敷に降る。

キャンプ場は「秋川」の広い河原を利用したもので、案内パンフに見られるような芋を洗うが如き繁忙期の様相は既に無く、静かで透明色の晩秋風景に包まれ、間近に見る「秋川」は瀬音が高く、水も清冽を知り、ひとまず安堵する。

鍋釜借用に受け付けに並ぶや、場内管理人と女性リーダーの睨み合いに遭遇。

石を積んでの直下炊き禁止等、利用規則を丁寧に説明する役人気質100%の親父が言うには、“これを説明するのが私の仕事でねえ、何かあった日にゃ、あたしが責任取らされれちゃうんだよ”

V S 実利に敏で、痺れを切らす熟女が返す、

“杓子定規にやってりゃ陽が暮れるよ、あたしゃ遊びに来たんで、お前さんの講釈何ぞを聞きに来たんじゃないよ”

と互いの言い分をぶつけ合って、互いに相譲らず。

それぞれのご意見共にごもっともと感心し、“互いに引くな！”と我を忘れて、つい、軍配替わりの団扇を扇ぐ。

やっと全容を現した昼のメニューは和風仕立ての「野菜の炊き合わせ風寄せ鍋」と「鶏肉団子鍋」の鍋料理2品に、市販の「おにぎり」、「細巻き」付き。

味、量、共に合格点も、強いて軍配を上げるならば量が少な目で、若干、手の込んだ風に見え、皆の箸も集まった後者かも。

食後に一服。

コーヒー・カップを傾けながら、煩雑な日常を忘れて、想い想いの晩秋。

初冬の風が、河原に立ち昇る幾筋かの白煙を揺らし、時折射し込む晩秋の陽が、渓流向こう岸に残る樹々彩色を、一瞬、浮かび上らせる。

いつも通りの長居に、予定のバスをまたもや見送り。

バス停迄の距離とスケジュール維持から、一瞬、タクシー移動を考えるも、事前にバスカード(5,000×3=15,000 17,550 利用可)を購入済みであったことから、次バスの乗車を選択し、武蔵五日市駅に戻る。

次に向かうは“日本の滝百選”にも選ばれた「払沢の滝」。

「浅間尾根」の東端に位置し、バス停からのアプローチが容易であることから、時期を

問わずに訪れる人の多い名瀑は、1～2月の寒冷期に流れが氷凍結することもある。

最寄りのバス停は「払沢の滝入り口」であるが、バス便の関係から、2つ手前のバス停、「^{もとじゅうく}本宿 役場前」で下車する。

尾根が途切れて、南北の秋川が合流するこの辺り、川名を「秋川」と変えて、南北の人が出会う村の中心地でもある。

バス停そばの橋上から、「南秋川」の川面を覆う見事な紅葉を見つけ、さきほどの「秋川橋河川公園」の風景を思い出し、自然が織りなす綾の微妙さを感じ入る。

【余談26】檜原村は浅間尾根の北側を「北谷」、南側を「南谷」と呼称し、かつては北谷の方が人家も多かったようだが、檜原街道の開通により南谷の軒数が逆転。

そのためか、その後長らくは、村民数で勝る南谷出身者が村長職を独占し、ここしばらくは無投票当選が続いていた由。

ところが前回の改選時、北谷から対抗馬が登場し、久し振りの村長選挙となったが、「浅間尾根」の壁は厚く、変わらぬ人口比のためか、桜と散ったとTVがドキュメント。

云うまでもなく、「北秋川」は北谷からの流れで、「南秋川」は南谷からの流れである。

橋を渡り、南北の分岐点となる三叉路を右手、北の方角に取り、滝に向かって北秋川沿いを歩く。

通りの民家軒先には、乾燥のためか、「大根」、「蒟蒻」、「芋」、「木の実」等、山の幸が寒風に晒され、まさに、「小さな旅」で見る「里山の冬支度風景」と、心を和ませる。

入口付近には休・祭日が営業日のギャラリー、喫茶店が並び、道の途中には木の香臭う木工細工店が出迎え、店頭に掲えられた望遠鏡で、正面、遙か北方の馬頭刈尾根山腹に白く輝く「天狗滝」の流れを捕らえることができる。

滝迄の山道は約15分。

山道の終端に位置する「払沢の滝」には、早、人が集まり、「日本の滝」にフラッシュを連射、本日も盛況の予感。

滝を臨む休憩小屋でコーヒータイム。

森氏欠席により、火器1セットのため、またもや2回に分けての湯沸かしとなり、バスの出発時刻と睨めっこ、後半組は歩きながらの忙しい喫茶。

“次回迄には、別の誰かに購入させるべし”と心に誓い、標的を絞る。

会頭から、バス停前の名物豆腐店、「ちとせ屋」製の「うの花ドーナツ」のお裾分けを頂戴し、ヘルシー感を覚える微妙な味を初めて賞味する。

【余談27】奥多摩地区には難解な読みの地名が多い。

「払沢(ほっさわ)」も然りながら、「笛吹(うずしき)」、^ム「人里(へんぼり)」、^ム「神戸(かのと)」はなかなか読み辛い。

それぞれに由来有るものと思われるが、いずれもバス停名にも使用されており、笑えぬトラブルがあったのは想像に難くない。

本宿バス停に戻り、今度は、三叉路を左手、南谷方向に向かう「数馬行」のバスに乗車し、檜原街道を南秋川沿いに上り、「^{しもひら}下平」で下車。

バス停からは廃屋他、数軒の家屋が散見されるものの、今夜の宿、「民宿 かんづくり荘」らしき建物は見当たらず。

大谷氏の機転で宿に携帯連絡し、浅間尾根登山口側に少し戻って無事入場。

兜造りの旧屋は、街道から1階分下がったレベルを入り口とし、北面窓下に、「南秋川」の流れを見る三層式。

定員70名と、既利用宿ではトップクラスの規模であるが、宿泊客は我らを含んで4組20名強と推量する。

【余談28】宿選びは、立地、接客振り、コストを念頭に行っている。

観光旅館は好立地であることが多いが、^ムに難点があり、近時は、「民宿」を優先して探している。

とは比較的把握し易いが、問題は^ムである。広報内容(インターネット情報やガイド書案内文句etc)で絞った上、電話の対応振りを観察するが、過去、申し込みを中止したケースはない。

烏森トレッキングでの実績は陣馬の湯、「姫谷」が観光旅館もどきで、大月、「破魔射場」、それに、今回の「かんづくり荘」が民宿と称されているが、御岳の御師の宿も後者の分類となろう。

到着直ぐに、トラブル発生！

2室に分かれた部屋の内、会頭、米本、山田組の部屋炬燵が、原因不明の故障で用立たず。しかも、のんびり女将からは、“実は、その事は昨日より解っていましたが、治す手立てもなくて...”と、放置を自白。

義理と人情に厚い大谷氏から、“客商売にあるまじき振る舞い”と叱責された女将、予備線を蔵中探し、やっと見つけて、メンテ・サービスにも詳しい同氏に修復して貰う。

自慢の「檜風呂」は樹の香抜けた時代物ではあるが、豊富な湯量が風呂中に湯煙を立て、

大きな硝子戸は水が滴り流れ、その風情たるや誠に良。

宴の席は天井高く、四方八方スペースたっぷりの大広間に設けられ、4組の座席間に間仕切りは無し。

かつては、所狭しとばかりに、養蚕箱が何段も積み重ねられていたのではと思いを馳せつつ、高天井を見上げるや、懐古も吹き飛ぶ大梁の傾き。

これは大変と両端支える補強柱に慌てて目を遣るや、床を離れて宙に浮く。こうなりやママよと腹を括り、“ここにも、冷房不要の「山の宿」、とブラックジョークを絞り出す。

料理は山菜中心の素朴味。

楽しい宴は、4組共に、負けじとばかりに互い勝手な声張り上げ合い、時折、エールを交わしたりと微妙なハーモニー。

炬燵修理に一言御礼申し上げたしと我らが宴席に若女将が罷り出て、熱燗3本携えるは誠に殊勝な心掛けで、遠慮無く頂戴し、早速、馳走になる。

仕上げの「もり蕎麦」が、また何とも旨く、満足、満足とお腹を撫で撫で、場を締めんと一言具申、“こんなに旨い「白菜漬け」を残すは何とも勿体無し”と。

予定通り、酔漢の衆議は包んで貰うことで一致し、作戦完遂の交渉役は大谷氏以外に適任無しとも意見が一致、無理を頼んで送り出す。

ウワッハハのウワッハッハ！

さすが大谷氏、成果は満点、予定...いや予想通りに、増量成った「大盛り箱」を持ち帰り披露する。何でも、女将の母者が耳打ちしてくれたそうで、“そうか、なるほど、さもあらん”と、みんなで腹打ち大笑い。

4人部屋に集まって二次会スタート。

武蔵五日市駅前/コンビニ購入の「角瓶」を据え、ストレートで飲む。

口角泡を飛ばし、声音が上がる頃が宴のたけなわ。

まだまだあるぞと、非常用のポケットウイスキーにも出勤願うが、酒の切れ目を睡魔が襲い、軒かき出す御仁が出ては、自然散会も止む得なしか。

明日の天気はと硝子戸を引くと、火照った体に心地良い冷気が一気に浸入。

しかし、外は山影の陰影すら判別できない暗黒の世界が広がり、漆黒の闇向こうから南秋川の水音が響くのみ。

明日の好天は望み薄かと観念し、寢床に就く。

全員、身支度を整えての朝食は、隣のバス停、「数馬温泉センター前」からの、朝一番の「都民の森」行き急行バスに乗ろうとの算段から。

それでも、旨い旨いとお代わりは弾む。

鈍よりとした曇空に覆われた「都民の森」到着は9；30AM前。

祭日と云うこともあり、登山者を含め、早朝からの来場者は多く、森の入り口は賑々しい。ただ、密かに期待した、いつも深紅に染まる駐車場の樹々は、残念ながら、すでに葉を落とす。

【余談29】帰りのバス時刻表に、予定した便の後に急行便を見つけて、場内整理員に次の降車予定地、「十里木」に停車するかと訊くと、軽く、“YES”の返事。

それならスケジュールに余裕もと喜んだが、何故か気になり、別の若いバス運転手に再確認するや、重く、“NO”の回答。

“やっばしなあ”と妙な得心をし、引き下がる。(実は事前調査で把握済みであったが、「十里木」は2線が交わる重要バス停でもあり、ひょっとしたら臨時停車もと淡い期待で訊いたもの)

急坂と木階段を上り、なお所々に彩色を残す木屑路を、「三頭大滝」へと歩く。

途中、展望が開け、案内看板とベンチを置く休憩所もあるが、視界は無く、早々に先へと急ぐ。

「三頭大滝」は落差33m、岩肌を伝うがごとく流れる静かな滝は、大和撫子の如き風。

メンバー全員で滝の観光橋、「滝見橋」に並び、眼前の長い滝流を追う。

例年なら、樹々が橋の周囲を紅葉で埋める筈も、すでに葉落後にて、何とも残念と悔しがる。

滝の上部に回って、流れの源を見た後、「滝見橋」入り口横の木テーブルに座りティータイム。

バスの出発時間に急かされるタイトな計画から、後の湯沸かし組は、またまた下山しながらのコーヒー賞味。

【余談30】5～6年前になるか、三頭山から三頭大滝へ下ってきた時、女子大生から、「都民の森」に対するアンケート調査を受けたことがある。

完成したばかりの「木屑路」の評価を主とするもので、人工路は似合わない、余り良い回答はしなかったが、年々、それなりの馴染は認められる。

米本氏が広場の売店で黒土付き大根を購入。新鮮さもさることながら、大きさが半端で

なく、「おろし」と云うより、やっぱし、「煮物」かな」と、お節介な調理指南。

短時間の滞りで、予定通り、11:00過ぎのバスに乗り込む。

最後のイベントは十里木ランド河川敷でのバーベキュー。

管理人から、「材料を手配する迄、火を付けずに少々お待ちを」との指示を受けるも、秋川の晩秋は余りに風が冷たく、焚き火を始めてしまい、知らぬ間に焚き尽くす。

大谷氏が買い足しに行き、苦情のひとつも吐いたか、またもやここでも、薪木1巻(500円)の他サービス端材を持ち帰る。

【余談31】バーベキューの材料手配に40分程要すとのランド側説明に、興味深い推理が2種。

多数派は、蕎麦屋の出前同様、「今、出ました」の類で、短か目、調子の良い回答と理解。もう一方は、後のトラブルを避けるため、長目に鯖を読み安全を見た回答と解釈。

<後者の推理背景>

1. こうした施設は、往々に提供者側が主導権を持ち、マイペースで運営している。
2. 駅前スーパー迄は車で10分内外。(広場に、絵をペイントしたワゴン車が駐車) たかが材料手配に、40分もかかる筈はない。

結果は前者が正解で、1時間近い待ちぼうけ。

<後者の弁解>

1. 食材に飾り加工迄するとは読めなかった。
2. 亭主の一言、「食材迄、注文いただきまして有り難うございました」。エッ、他の客は...そうなんだ!

鉄板で肉と野菜を焼く、正統派「バーベキュー」に、在庫を一掃するがごとく調達したビール、酒、発泡酒、更には、昨夜入手の「白菜漬け」が加わる大判振る舞い。

焚き火に手を翳しながら、昨日、今日を振り返り、話題尽きずの「烏合の衆」。

渓流向こう岸の樹々には、なお秋彩色を残すも、水の色は、早、鈍色、冬の色。抜ける寒風が十里木の里に白煙をたなびかせ、いつのまにか小雨も混じる。

バス停、「十里木」に歩き、武蔵五日市駅へのバスを待つ。

雨に濡れたせいか、道脇丘陵の樹々が、しっとりとした薄朱色の紅葉を見せる。

【余談32】バス停位置の相違に気付いた御仁、有りや否や?

「十里木」は数馬・藤原方面と養沢方面(日の出山下山後利用した路線)の分岐点とな

り、路線により合流地点前に同名バス停が2ヶ所有る。降車したのは前者バス停で、乗車したのは後者バス停である。

前述の「本宿役場前」も、北の藤原方面と南の数馬方面に分かれるポイントバス停（但し、同一バス停）で、「払沢の滝入り口」は北路線に設けられているものである。（もっとも、南路線バスでも寄り道する便が多い）

バスの便数が少ない奥多摩地区では、バス停位置の把握が行動範囲を広げてくれる貴重な知識となる。

（後日、今回の記録を整理していると、宿の領収書、明細伝票の特別料理欄に、「はくさい（夜）500円」の記載有り。...何のことだろう?...!）

第十二回

日 時：'04.3.13（土）～3.14（日）

概略行程：

1日目 日向和田駅^{ひなたわだ}～吉野梅郷、「梅の公園」～吉川英治記念館～二俣尾駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊 / 登奈利荘

2日目 登奈利荘～（裏参道）～大檜峠～上坂部落～氷川溪谷～奥多摩駅
メンバー；米本、山田、吉川、大谷、磯崎

今回のトレッキングは、早春3月に奥多摩 / 吉野梅郷、「梅公園」を訪問。

会頭は、「膝」の大事を取り、小林氏は社内旅行で、森氏は別の所用でと、それぞれ欠席。

大谷氏も、義理と人情のしがらみ（なんでも、町内会の会長に選出され、そのお披露目会が翌朝ある由）から、初日のみの参加となる。

【余談33】最大人数8名参加予定が、最終4名に半減したのは何とも寂しい限りである。

決して、電話向こう、女将の落胆振りが気になるわけではなく、無論、役割分担が増えるからでもない。愉快な仲間との、折角の出会いを失いたくないからである！（イエ～イ、拍手、拍手）

今回の反省は、日程決定 / 2月9日、宿予約 / 2月下旬、訪問 / 3月中旬と、若干、計画に間延びがあった点で、誠に難しいところである。

待ち合わせの青梅線 / 日向和田駅は予想通りに人の波。

毎年、3 / 1～3 / 末日迄を「梅祭り」の期間とし、駅頭に紅白の雪洞を飾るばかりか、

ホリデー快速をも臨時停車させる盛況振り。

気になる天気も、昨日から好転に向かい、早朝から晴れ模様。ただ、春霞か、この時期にしては、透明感が今一つ。

定刻迄には全員の笑顔が揃い、颯爽と出発。

青梅街道を御岳方面に歩き、赤い欄干の「神代橋」から「多摩川」を渡る。

橋上から早春の多摩川を見下ろすと、朝陽を受けて水が光り、早、水温むが風も、両岸に自生する樹々は、なお、芽吹き気配すら見せず、枯野のごとし。

橋を渡った先は、梅の街路樹が誘う広い通り。道の両側には梅を素材とする土産物店、飲食店が立ち並ぶ。

いつもの様に、お気に入りの右手歩道をそぞろに歩き、いつもの通り、青空に梅花を透かし見る。

青梅街道に平行する、もう一本の広い通り、吉野街道を渡り、「梅公園」への小道に入る。道の両側、民家の庭には春の花々が咲き乱れ、花色の華やかさと育む人の心が気持ちを和ませる。

公園近くの道端露店には「綿菓子」、「もろこし」、「たこ焼き」と馴染みの品が並べられ、お祭り気分が満ち溢れる。

園内は、早、人盛況で人の波。

順路に従い、梅林の丘陵を登り、白梅、紅梅と、綻び盛りの梅花を愛で、梅に交じる「サンシュユ」の黄色花で眼を洗う。

ピークに設けられた休憩所から梅公園を俯瞰し、白い花を付ける「枝垂れ梅」を背景に、はい、ポーズ！

園を一巡し、入り口近くの木テーブルに座り、若干、早めの昼食。

梅見と云うこともあり、今回は、特別に、「梅酒」を準備し、更に、メンバーからのリクエストで、「缶ビール」も加え、「昼間酒」の大判振る舞い。

その代わりでもないが、久し振りの弁当持参に、姑息を恐れず、メンバーの嗜好と家庭の事情を窺うと、家庭味は「握り飯」の一名のみで、後は、コンビニ、駅弁の相違はあれ、大同小異の簡便物...あじゃ、じゃ！

公園管理の親父から、“園内、火気厳禁！”と、みそ汁用の湯沸かしを注意されるが、悪運強く、遅かりしや沸騰後での警告！

【余談34】当初、横長ベンチで食事を始めたが、間無く近くの木テーブルが空き、早速、

移動を開始。

ところが、いつの間にか、四面の二角に女性6人組が座り込み、一瞬驚く。

移動の出遅れから、事情が良く理解できなかったが、詰めて座れば、我ら5名を含め、11名の着席は可能で、決して拒むものではないが...

気弱い我らは、何故か、片隅、小声での小宴を強いられる。

後で事情を聞くと、多人数であることを理由に、相席を申し入れられたとの由で（別の説では、少々の後塵を物ともせず、着席権を主張したとも）年齢50歳内外と思われるリーダー以外は比較的若い女性達。

我らを異性と意識しないのは仕方がないとしても、“折角の楽しい食事を何とも無体な方々”と繰り返しを云う。

道を戻り、街道裏道を「吉川英治記念館」へと北に歩く。

柔らかな陽射しが心地良く、道中、至る所に咲く梅は、それぞれに見事な花模様。まさに案内通りの、“梅こぼれ 春が爛漫 吉野郷”と悦に入る。

道中の案内看板に誘われて、農家裏口まで入り込み、「岩割りの梅」を拝観するが、命名されたほどには迫力なし。

しかし、柵に囲まれた黒土の畑地に樹高低く、等間隔に植育された梅林は食用樹（梅実）と山田、大谷両氏の解説で知るが、見事な枝振りばかりか、白い梅花が黒土と黒ずみの幹枝に映えて醸し出す、得も言われぬ清楚な美しさ后感嘆する。

道なりに、「即清寺」の境内に昇る。

弘法大師は、ここにも立ち、見上げる背には、薨の波と青い空。眩しさに手を翳し、“南無大師遍照金剛、南無大師遍照金剛”と合掌。

「吉川英治記念館」は直ぐの距離。

受付の、長蛇の列を見た大谷氏、“以前、両親と来館したこともあり、外で待とうか...”との躊躇を見せるも、**人波に押されて全員入場。**

順路の最初は、硝子戸越しに透かし見る書斎から。野暮な措置と舌打ちしながら、檜炬燵、木製戸棚を確認する程度で順路を進む。

記念物展示室には人が溢れ、押されるままに前へ進む。

ゆっくりと拝観できる状況にはないが、机上に並べられた手書き原稿を拾い読みし、**よくぞ、読み取れるものだ！と、毎度ながらに、校正者の天賦振りに感心する。**

続く順路は庭園歩き。

素人判断ながら、庭規模に比し、若干、多樹気味ではと決めつけるが、庭の中央に立つ巨樹、「椎の木」は案内通りの存在感を示し、筆を休め、窓際に立って、臉をほぐす吉川英治の姿を彷彿させる。

見学を一巡。後陣を待ち、庭先の陶製ベンチに休む。

傍らに設けられた古井戸から水を汲み上げ、洗顔したり、旧屋の、かつての玄関位置を推理し合ったりと悠々たる時を過ごす。

館の正面側、「吉野街道」に出て、「二俣尾駅」へと北に歩く。

駅への脇道を入ると、高台の小学校校庭に見事な桜並木を発見。未だ、蕾の膨らむ気配は見られないが、早、幹は春に輝き、奥多摩の桜開花は後1ヶ月ばかりかと推量する。

米本氏が、道端、無人店舗に並べられた「木片」を買い求め、“使途に、特に定めは無し”と興じ、メンバーの心が和む。

無人駅、「二俣尾駅」で、なお付き合おうとする大谷氏を上り電車に押し込み、上り下りに別れる。

御岳駅で下車し、ケーブル滝本駅へバス移動。

ケーブルで御岳平に登り、富士峰園地裏道を歩き、大塚山分岐に設置された木テーブルで、春の午後に一服。眼前に、芽吹き前の「御嶽神社」、「奥の院」の峰を見据え、生レモンを絞って、「レモン・ティー」を喫む。

この機会にと、地図を広げて未定の翌日行程を衆議し、裏参道から「大檜峠」に下り、上坂部落を奥多摩に抜け、氷川キャンプ場で飯盒炊さんと決め、食事のメニューは山田氏一任で、無事結論。

とは言うものの、メンバーは皆、「長州そうせい候」に似て、相槌を打つばかりで意見は述べず。

時間の流れと共に、頬を撫でる微風が寒気を増す頃、ザックからコートを取り出して着重ねし、それを機にとばかりに宿へと立ち上がる。

「登奈利荘」の女将が、笑みを浮かべて大歓迎。いつもの二階部屋に荷を降ろす。

宴の前に、NHK / 宮本愛子アナが案内する「小さな旅、“神の山 春の舞い ~ 東京御嶽山 ~ ”」の集録ビデオを観る。登場する「原島荘」は、近隣、参道沿いの既知の宿。

“原島さんとは、同じ、「婿取り同志」ということで、日頃から親しくさせてもらっています”と、云わずもながの女将の告白。何を着じらってか、早、冷酒のサービスが加わり、

今日も楽しい夕餉の進行、御油断召されるな、烏の反撃を！

賄いを手伝う子息は、訪れる度に、びっくりするほどの成長振りを見せるが、その分、女将の襟元に白いものが目立つは止む無しか。

部屋に戻り、静かに二次会。

酒はウイスキーで、当ては、ガス・バーナーで弾く「ポップ・コーン」と、山田氏持参の「あられピーナツ」と「あたりめの醤油焼き」。いずれも美味も、我がメンバーには、いずれも御法度の「高カロリー品」。

ベランダに立ち、明日の天気を占う。

天空の星はかすかに輝き、町の灯は山麓御岳駅周辺迄。都心の灯は闇間に消失し、明日の快晴望む薄と観念する。

朝食は、いつも通りに8時から。

食卓には例の「大根煮」も添えられ、メンバーの食欲を刺激、お櫃の蓋は閉じる間も無し。

第一回目に予定した裏参道下山を、7年目で、やっと実現。

谷を巻く下り道は、小石が多いのが難点であるが、なだらかな平坦路で、視界は明るく、芽吹きの際は萌葱色に包まれる人気のコース。北東に大塚山の鉄塔を見ながら、徐々に高度を下げる。

道の要所、「コナラの巨樹」が根を張る「大櫓峠」に到着し、小休止。

右手/北東への山道を下ると「鳩ノ巣」へ、前方/北への尾根道直進は「奥多摩」へ、左手/林道終点から西南へ下ると、名瀑、「海沢三滝」を経て、「奥多摩」へと繋がる。(直進道と合流)

【余談35】鳩ノ巣から裏参道を登る途中に、「越沢パッドレス・キャンプ場」を見下ろす道脇に四阿屋風の休憩小屋があり、軒下にハイカーの名句(主に川柳)が並べられている。選考者不明も、通る度に休み、楽しい一時を過ごしている。

山歩き	すすめて妻は 海外へ	徹也
山歩き	亭主(われ)に差をつけ 妻威張り	喜楽
山歩き	昨日(きのう)の酒が 足乱す	トホホ...
擦れ違い	あちらとこちら 年令(とし)くらべ	KMC
御岳みち	足にわらわれ 年さとり	文子

負けずに一句。

御岳山 ここにも鎮座 山の神	烏 森
家族にも ケーブル登山は ひた隠し	烏 森
ディパック 衣服詰め込み 型造り	烏 森
山行きの 都合決めるは 妻の腹	烏 森
トレッキング いつのまにやら 里歩き	烏 森
小休止 我が水からと 皆が云う	烏 森

* ' 0 6 . 春 更に下手に、新たな四阿屋が完成し、短冊が並ぶ。(その後、どう云う訳か短冊掲示は禁止される)

間もなく、鳩ノ巣方面から単独行の中年女性1名が到着。2台の木ベンチは我らが占有中なのを見て、少し離れた巨樹の根元に荷を降ろす。

“独りで、それも女性が”と、吉川氏が首を捻る。

【余談36】トレッキング入門書では、中高年者の「単独行」を控える様指導する。

理由は明快で、複数メンバーであれば、事故発生時、仲間による助けや通報が期待できるが、単独行だとそうはいかない。

確かに、駅前や山頂等で見かける、「行方不明者の情報提供依頼」のほとんどが高齢者の単独行で、問題の本質からすると、中高年者に限定されるわけではないが、トラブル発生確率や自力脱出能力からそうなるものと思われる。

ただ、単独行可否の議論で、「山歩き」そのものの目的を忘れてはならない。

細かな議論は別の機会に譲るが、「山歩き」に求める価値感やその手法は、個々人自ずと異なり、トレッキングに集団行動は馴染み辛いと云う考えが従来から根強くあり、今なお、「山歩き」の原点は、「単独行」であると主張する人が少なくない。(頂きを目指す「山岳登山」との大きな相違点であるが、この世界でも、「無酸素登山」とか「単独登頂」とか、別次元の価値観はあるようである)

「氷川・奥多摩駅方面」への道を直進。

なだらかな尾根歩きの後には、ジグザグ模様の急坂が始まり、本格的な下りに突入。踏み跡は薄く、道は荒れ放題。途中、倒木が目立つ頃には、次第に列間が拡がり、元気な会話も一休み。

中高年者には、下ると云うより、墜ちていく人が多いと揶揄する人がいるが、云い得て妙である。

樹間に舗装路が見え隠れし始めると、間無く、「上坂部落」に到着。

「奥多摩霊園」を覗いた後、単調な舗装路を下り、“何とも嫌な道”と、脚が悲鳴を上げる頃、大檜峠からの林道に合流する。

奥多摩駅迄は、まだまだ遠く、途中、金網越しに、都の水産試験場生け簀を眺め、しばし休息。

予定時間を約1時間遅れて到着し、またまた予定の変更！

疲労気味のメンバーには、最早、飯盒炊さんする意欲は無しと判断し、山田氏には申し訳ないが、駅前スーパーで各自好みの弁当を買い、氷川溪谷に降りて、“のんびり昼食”の緊急動議を提案すると、即承認を得る。

吊り橋横の石段を下り、溪流出合いの河原に荷を降ろし、竈が無いせいもあり、珍しく、三々五々に分かれての静かな昼食。

各自の調達物を覗き見るや、いずれも簡便物で総じて小食は、疲労のせいか。

それでも、「おにぎり」+「焼きそばパン」+「カップ麺」の3食揃い踏みの大食漢が約1名。

食後は、のんびりと。

模様を選んで河原小石を集める人、形を選んで川面に石を滑らし遊ぶ人、シートを敷いて寝そべる人、早春の午後を、それぞれに過ごす。

溪谷の流れは、雪解け水も加わってか、透明度が一段と高く、水量、勢い共に文句無し。

陽が雲間に見え隠れし、早春の風に揺れる樹々がザワザワと葉音を立てる頃には、汗もすっかり引き、いつの間にか寒気が忍びよる。

ザックから防寒具を引っ張り出して、初日の、朝の装いに戻し、帰り支度に、残る荷物をパッキング。

奥多摩駅は至近距離にて、背負う迄もなし。

第十三回

日 程：'04.11.28(土)～11.29(日)

概略行程：

1日目 五井駅(小湊鉄道)～上総中野～水月寺～幻の五滝～養老溪谷・栗又の滝～滝見苑(昼食)～養老溪谷駅～五井～岩井～ 宿泊/民宿「魚赤」

2日目 岩井～浜金谷～鋸山/観月台・日本寺～保田～山田屋(昼食)～保田駅

メンバー：米本、山田、小林、磯崎

今回は、小林氏の企画により、南房総・安房の旅。

訪ねる先は、紅葉の名勝地／養老溪谷、梅ヶ瀬溪谷と、東京湾が一望でき、“地獄のぞき”で知られる、「鋸山（のこぎりやま） 329m」。

今回は、初回から連続参加していた吉川氏が、退院の翌日と云うこともあり、残念ながら出席かなわず、加えて、会頭は大事を取り、大谷氏は別の所用から、また森氏は友人とのサッカー観戦先約があり、それぞれに欠席、第三回以来の最少人数4名の旅になる。

待ち合わせは小湊鉄道の起点駅でもある JR 内房線の「五井駅」。

神奈川組み（米本、山田、磯崎）は横浜駅から東京湾アクアライン経由のバスで、地元小林氏は電車の乗り継ぎで、それぞれ現地に向かい、予定時刻に無事合流。

（神奈川組は一番早いバスで到着し、インターネットで検索した五井市内の巨樹巡りをしたようだが、何故か多くを語りたがらず）

小湊鉄道は房総半島を東南の方向に走り、終点の「上総中野駅」からは「いすみ鉄道」と繋ぎ、最終、外房線の「大原駅」と結ぶ横断線。

JR ホームに並設されたプラットホームにはザックを背負うハイキング客で溢れ、“まさに、現在が紅葉の盛り”と確信する。

【余談37】紅葉が、陽光と寒暖の差から生じるのは周知の通りで、南国沖縄県は後者の条件に恵まれず、紅葉を楽しむことが難しいと云われる。

時期は緯度と高度が関係するが、日本の紅葉前線は北海道／大雪山からスタートし、最終、花の郷、千葉／南房総で終焉する。

旅慣れたメンバーは颯爽たるもので、てきぱき動く。

米本氏は、心得たりと、ホーム上の臨時切符売り場で4人分の「1日フリー乗車券」をまとめ買いし、後のメンバーは、座席確保に先行した小林氏を追い、全車輦を隈無く点検。

成果は上々、横一列の並び席ながら、4人分を確保し、荷物を寝かして占有宣言。とは云うものの、古狸にも似た我メンバー、かつての様に寝た振りをする必要はなく、中には、早、優先される好々爺も居り。

定刻に出発した満員電車は、しばらく、平凡な田園風景の中を走る。

車窓から、「光風台」の駅名を見、かつて同所から丸の内に遠距離通勤をしていた取引先担当者を思い出す。

やがて電車は山間に入り、徐々に里山風景を増す。

停車した小さな駅舎の背には、実で枝撓む「柿の木」が立ちすくみ、車内には歓声が上がったたり、指さし合ったりと当初の空気が揺れ動く。

リーダーの指示により予定を変更し、「養老溪谷駅」での降車を見送り、次駅終点、「上総中野駅」迄乗車。

行先知らずの気楽な鳥は、どこに向かうやら、どこで降りるやら、一切をリーダー任せにし、駅前からはバスに乗り継ぐ。

満員の車内は今日の予定を語る団体客の会話がかまびすしい。

バス停「水月寺」で下車し、広い通りから右手の脇道に入る。

小さな石段を上り、小さな門をくぐると、禅宗の名刹と紹介される「水月寺」。規模小体ながら、構えは充分、甍が急勾配に波打つ本堂が境内正面に建ち、右手、塀際の庭には黄金色に輝く銀杏の巨樹が天を刺す。

寡黙になったメンバーは三々五々に白い玉砂利を踏み、真っ青な空を見上げて大きく深呼吸をしたり、本堂脇の立札に歩み寄って墨書された案内書きを読んだりするが、いずれの御仁共に、何とも穏やかな表情を見せる。

寺を後にして、陽柔らかな里道をぶらぶら歩き。

途中、道端の無人売店で、4個が200円の冬至湯用大玉柚子を購入したり、畑地の産物を論評したりと、楽しい里歩き。

起伏なだらかな丘陵を更に進むと、右手の小丘に実を満々と付けた柿の大樹が抜けるような青空に屹立し、枝を広げる。

まさに、“枝の撓む鈴なり状態”で、写真か絵画を見る鮮烈さに入手の工夫も忘れてしまい、しばし見入ってしまう。

【余談38】知識の無さもあるが、山歩きで得られる“自然の恵み”は少なく、果実となると皆無に近い。

常日頃から、「柿」の一つ位は嚙ってみたいと思っているが、良く知られる、「山葡萄」、「山無花果」の区別も付かず、登山道に落ちた、小振りの「イガ付き栗」を拾うのが精一杯である。

最近、もっぱら、「山の水」で、毎回、1.5ℓのポリタンと予備水筒を満タンにして持ち帰り、家では生水で飲料している。(コーヒー用には、自宅近くのポンプ湧水を利用)

ぶらぶら歩きは、なお続き、次に向かうは、案内板に導びかれて、「幻の滝」。

道の先に、人で賑わう屋台の並びを発見！ 狭い通路を挟み、裸木を組上げただけの簡易な売店と休憩茶屋が並ぶ。

左右を覗き見しながら、人の流れに従って進むと、なんと正面眼下崖下には「幻の五滝」が姿を現す。

早速、木梯子を伝って急坂を下り、順路通りに五滝を周遊するが、期待したほどの風情はなし。

一巡後、木が朽ちて、今にも床が抜けそうな、崖下の休憩台で一服。

滝を背景に、全員の写真を撮ろうとするが、持ち主は無論、最新式のデジカメ操作に戸惑うばかり。

道を戻り、右手に五滝へと流れ込む水流を見ながら、なお歩く。

丘陵を少し下ると、間無く、右手の流れが左に大きくカーブし、流れを渡る小さなコンクリート造の堰に出会う。

そこが、「養老溪谷 / 滝めぐり遊歩道」の下流入り口と知り、「幻の五滝」の水源が、「養老川」と知る。

遊歩道は、道幅約 1 m、全長 1.7 Km のコンクリート造で、片道約 45 分のフラットな道。

道の右手は草木と枯れ木の雑木林が続き、左手には水量豊かな「養老川」の流れ、更に、その奥には岩壁が切立ち、逞しく根を張る樹々が紅葉を綾どる。

なかなかの景観と喜び、地を這うような流れに、丹沢山麓の「出会いの流れ」を思い浮かべていると、擦れ違う人(女)が、“「奥入瀬溪流」の様ね”と、仲間同志の会話を交わし、上から下まで燃えるような紅葉に、“現在が盛り”と云おうとすると、常連らしき人(男)が、“来週末辺りがピークかな”と連れ人に声を掛け、水を差す。

往く人来る人と、人の流れに絶え間なく、抜きつ抜かれつ、はたまた右に左にと道を譲って錦秋の溪谷歩きを楽しむ。

人のざわめき声が近くなると、間無く、遊歩道の終着地らしき、広い河原に到着。

予想外に人が多く、河原の岩石あちこちに腰掛け、お喋りしたり、弁当を広げたりと、くつろぐが、視線の先は一方向、眼前の溪流へと怒濤に流れ落ちる「栗又の滝」に集中し、あたかも野外劇場に居るかの風。

千葉県随一の名瀑とも評される「栗又の滝」は滝長 100 m、幅 50 m、延べ落差 30 m の堂々たる流れ。紅葉のトンネルから流れ落ちる様は、絵画を見てるがごとし。

【余談39】千葉県には何故か高い山が無く、最高峰は408mの「愛宕山(南房総)」となり、都道府県の山高自慢では最下位となる。(次は沖縄県で、「於茂登山(石垣島)526m」)

なのに、何故、こんなに水が豊かなのかと不思議がると、メンバーが笑う。

後日、本で調べると、千葉県は高原が多い地域で、養老溪谷の豊かな水は、保水力に恵まれた土質の所為と知り、水源は麻綿原(まめんばら)高原と知る。

昼食は急坂を上って、「滝見苑」で。

旅の情報誌に常連広告する温泉旅館は、立地を生かして、食事と日帰りの入浴サービスも併営するしっかり者。

入り口付近は待客で溢れ、店のルールに従い、グループの代表者名と人数を記帳し、順番を待つ。

1時間も待ったか、やっと案内された席はスペースたっぷり、隣席とも独立した嬉しいレイアウト。

入り口部との対照に、温泉旅館ユースの宿命かともほくそ笑いし、掛け声高くビールを注文。何か当てをとメニューを広げて、眼が点に！

何故か知らねど、阿吽の呼吸、メンバーのオーダーは、居並ぶ品書き掻き分けて、「カレー・ライス」と「山菜蕎麦」、各2ヶに集約される。

スケジュールの遅れから、「梅ヶ瀬溪谷」巡りを断念し、「養老溪谷駅」への移動を決定。次発バスには時間があると、再度、「粟又の滝」上流部岩場に降りて湯を沸かす。

大岩を敷く川床は大半を露出し、幾筋もの、透明色の水の流れが、岩溝を縫うように滑り落ち、途中、合流し合ったり、岩を打って飛散したりし、最終、釜淵へと流れ落ちる。

滝の上流部から「粟又の滝」を眺めると、周囲を広葉樹の綾取りに包まれ、あたたかも色彩画を見る様な落ち着きのある風景で、白い激流と見事に調和する。

なかなかの風情と喜び、しばし見とれるが、時折、滝壺の向こう側から、こちらを見上げる人が居るのは何とも興醒めと文句を云う。

満員御礼の「養老溪谷駅行き」バスに乗り込み、しっかりと座席を確保。

車中から見下ろす溪谷は、まさに童謡唱歌、「紅葉」の世界、歌詞そのままの“色模様”に思わずハミング。

駅に着くと、ちょうど、上りの電車が到着したばかり。

悲しい性と云う無かれ、駆け出す人につられて慌てて飛び乗り、満員電車に居場所を探

す。

五井駅に戻り、内房線に乗り換えて、海沿いに南総ノ里見へと下る。

早、暮れなずむ車窓から大きな夕陽を追い、“もう30分早ければ、今日の宿泊地、岩井の浜から夕陽が海に沈む様を”と口惜しがる。

すっかり日の暮れたJR岩井駅からはワゴン車の出迎えを受けて、今日の宿、民宿、「魚赤」へと向かう。

意外なるか、宿は街の広い通りに面し、増築を重ねてか、そこそこの部屋規模を有し、迎える声も威勢が良し。

宿の周辺は海の臭いがなく、赤いネオンが怪しく光る。

部屋に案内されるや、またまたトラブル発生！

山田氏が、“あれ、お姉さん、部屋を間違えているでしょう！”、“ほら、すでに別の人の荷物が…。俺達の部屋じゃないでしょう”とお女中を叱ると、“連れの人が…、先に…”と戸惑い声で言い訳する。

山田氏に迎合するメンバーの怒号が宿中に響き出すと、お女中堪らず帳場に走り、混乱、混乱、大混乱！

大の男4人が部屋の入り口に立ち塞がり、早く落ち着かせると与太を打つ。

その時、肩に白タオルを掛けて、浴衣に羽織姿の男衆一人が、暗い廊下の向こうから登場し、“えらく遅かったじゃないか！”と一声発す。

何と！、何と！、吃驚仰天、現われし姿は、昨日退院したばかりの吉川氏！

<訂正> メンバー：米本、山田、吉川、小林、磯崎

宴の料理は「地元の幸」ふんだんで、期待通りに、「刺身の舟盛り」も加わる豪華版。

侍るお女中から、料理自慢の一つも聞きたいところであるが、宴の話題が、もっぱら、吉川氏の「計略話」に終始するは止む無しか。

仲間に入れないお女中を気遣い、「地引き網漁」の参加や見学の可否を訊ねると、“時期は終わりました”と無惨に話の穂を折られる。

二次会開始。

“人脈”を話題に、いつものように喧々囂々、丁々発止。議論の合間を縫い、近くのコンビニへ酒の調達に走る“若氣”に、ついほくそ笑む。

翌朝、再度、岩井駅迄送ってもらい、洒落た駅舎を背景に、全員揃って写真撮影。

【余談40】デジタル・カメラの普及スピードは凄まじいばかりであるが、早、飽和状態に達し、携帯電話同様、買い換え需要の時代に入ったと云われている。

次代のフィルムと期待されたAPSフィルムは、性能面から35mmフィルムに退けられ、手軽で高性能と人気を博したコンパクト・カメラも、デジカメの登場により、完全に息の根を止められて全滅。

デジカメの対抗軸になると予想された一眼レフ・カメラも、プロの世界を例外に、近時はデジタル化が進み、35mmフィルムが店頭から消失してしまうのは、そう遠い日では無さそうである。(アナログカメラ所有者は対策要。無責任に予想するなら、一応残されると思うが、プロ用フィルムのように高額化は避けられまい)

こうした動きは、カメラメーカーを含めた写真業界の再編を意味し、ここ数年で業界地図が一変され、街の写真、D・P・E店数の大幅な減少は必至と思われる。

近隣、D・P・E店の親父は、未だデジカメ技術を認めず、“写真は撮りたい対象をいかに画像表現するかで、忠実に、何でも再生すれば良いというものではない”とアナログ写真の画像処理技術(自分)の必要性、優位性を主張し、近所には、未だ、唯々諾々と従う旦那もいる。(残念ながら、親父の店も閉店。私はどうすりゃいいんだ！)

内房線を二駅上り、本日の訪問先、「鋸山」への最寄り駅、「浜金谷」へ移動。

吉川氏は大事を取ると言い訳し、そのまま木更津へ向かい、「海ほたる」経由で帰宅の途に。

秋日和下、駅前に人は少なく、柔らかな朝の陽を受け、「鋸山」への裏登山道を歩く。途中、神奈川/久里浜港からフェリーで金谷港に渡って来たハイカー数組とも合流。

舗装路脇の木板ガイドに従い、樹林に覆われた登山道に入るや、急登の連続で、土の感触を楽しむ間も無しと不平を云いながら、ヒイフウ登る。それでも、最初の目的地、「観月台」迄を一ピッチで登り切り、一気に昨夜の酒気を抜く。

「鋸」の一峰となる「観月台」からは東京湾の展望が一挙に開け、「富士」こそ姿を見せずも、見事に晴れ上がった湾向こうに神奈川/三浦半島を遠望する。

屋根付きの休憩所で、しばし休み、汗を乾かし雉を撃つ。

【余談41】山言葉に、“雉を撃つ”と云う隠語がある。

尾籠な話で恐縮だが、藪に入り用を足すことで、その様が雉撃ちのスタイルに似ている

からと云うのが有力説である。

現在、山での糞尿処理が大きな問題になっているのは周知の通りで、「富士山」が世界自然遺産登録を見送られた大きな理由の一つとも云われる。

他の山用語に、“沈”と云う言葉がある。終日移動せず、のんびり過ごすことで、長期の山行時、体を休めたり、日程調整日として組み入れられる嬉しい1日である。

山頂へと高度を上げるに連れ、岩場の道が多くなり、山斜面には切り刻まれた岩肌が露出し、岩山の様相を色濃く見せ始め、かつて、江戸城々壁用にも切り出されたと云うガイドを思い出す。

それにしても、余りの急登続き！

呼吸を整えるため、写真撮影を口実に、彩色を見つけては立ち止まり、パーティ列は間延びするばかり。

興醒めは山頂近くに設けられた入山ゲート。乾坤山、「日本寺」の拝観料と称し、入園料600円を請求する。

何とも理不尽で法外と顔をしかめるが、ここまで来てはどうなるものでなく、周りに抜け道探すも、岩壁に刻まれた「百尺観音」が見てござる。

途中、浜金谷からケーブル・カーで上ってきた人々と合流し、最後の急坂を登り切ると、公園の様な山頂展望台にやっと到着。

早速、ガイド・ブックで定番案内される名所、「地獄のぞき」に上り、記念写真の一枚もと、グラビア通りにポーズを取ると、撮ってくれないどころか、一部メンバーは、そ知らぬ顔して近寄らず。

理由は簡単、名所地は崖上の宙にせり出した大岩上に、粗雑な柵で周囲を囲っただけの危うい代物、君子危うきに近寄らずと云うか。

山頂は360度のパノラマ視界。

南の方向、館山/太平洋方面の展望が開け、昨日の宿/岩井を指さしたり、今日の食事処/保田を探したりと大はしゃぎ。

広場に陣取り、お疲れ様と、お湯を沸かして、コーヒー、紅茶で一休み。

やがて、ガイド嬢に引率された団体客が到着し、狭い山頂大賑わい。

ケーブルばかりか、登山自動車道(有料)もあったかと舌打ちし、観光客の中に、ハイヒール履きでスカート姿の女性を見ては、最早退散する他なしと観念し、火器をしまっってリュックを担ぐ。

表参道は石畳と石段の急坂続き。

道脇には、「西国観音」、「百躰観音」と、至る所に仏様が居並び、余りの多さに、少し欲張り過ぎではと罰当たりを云う。

パンフで現在位置を確認しながら、網の目の様に張り巡らされた迷路を下り、千五百羅漢道から大仏前参道を歩くと、「大仏広場」。

総高31.05mの「鋸山日本寺薬師瑠璃光如来」が鎮座し、「奈良東大寺廬遮那仏」/18.18m、「鎌倉高德院阿弥陀如来」/13.35mを凌ぐ大々仏と大自慢。

トイレに行ったり、身を整えたりと、しばし休憩後、腹が空いたと荷を担ぎ、過ぎるほどに整備された表参道石段をドタッ！バタッ！（もはや、“トコトコ”のリズム感はなし）と下り、仁王門で、「鋸山」とお別れする。

内房線々路沿いをJR保田駅に向かい、南に歩く。

鉄路と歩道の間には黒土の畑が造作され、野菜に混じり、色んな花々が植栽。さすが、「花街道」と感心し、泥土の付いた花名札を手繰っては読み上げる。

とは云うものの、歩けど歩けど町並み遠く、鉄路の先に、駅舎らしき建物はとんと見え、重いザックが肩に食い込み、脚は正に棒となる。

いつまで続くか、この行軍、せめて、土の道を歩きたや！

やっと駅に辿り着くと、お目当ての料理店/保田漁協直営の「ばんや」は更に先との非情な案内書。バスに乗るのは中途半端と、自棄のやんぱち、またまた歩く。

町の通りを抜け、海沿いの道を歩く頃には、会話どころか、いつの間にか隊列が崩れてしまい、先頭としんがり間に大差が付く。

収束しようにも、先陣は知らん振りでもいよいよ歩き、後ろの御仁は大将気取りで悠々歩き、取り付くしまは一切なし。

「ばんや」は保田漁港並びのレストランで、大漁旗をはためかせて大歓迎。

ウエスタン・スタイルを意識したか、牧場風に周囲を木柵で囲い、前広場の片隅には魚の青空市場を併営する。

“やれやれ”とばかりに、木ベンチに腰掛け一息付くと、入口付近は「滝見苑」にも劣らぬ盛況振り。

悪い予感があったか、幹事が走り、戻って来ると、“満員御礼、待っても限なし、確か、来る途中にも料理屋が1軒あった筈”と慰める。

道を戻り、広い通りに面す魚料理店、「Y屋」の暖簾をくぐる。

威勢良い掛け声で迎えてくれる店内は、どこにでも見られる大衆和風料理店風で、すでに数組の先客が飲食中。

靴を脱ぐのが面倒と、奥の座敷を敬遠、調理場に近い、土間の木テーブルを選び、“お疲れ様”と冷たいビールで乾杯交わす。

笑顔の可愛い娘さんが伝票片手にテーブル脇に立ち、メンバー全員に順の視線を送って注文伺い。

喜び勇んで、さあさあ、どれどれと、「品書き」を拝見。「刺身定食」、「天ぷら定食」と、いずれ見事な達筆書きで、続く数字も“2”から始まる重厚さ！

メンバーは急に口をもごもご、視線は宙を彷徨い、辺りを見回し、何故か、「グラス」を机上に戻す。

沈黙を破り、米本氏が妙手を放つ。

土間に立て掛けられた黒板指さし、“金目鯛の煮付け(¥700)に、ご飯とみそ汁”と一品を拾う高度技。

何とも不思議で、どうにも不思議、メンバー全員の注文は偶然それに一致し、可愛い娘さんが大声で注文を復唱する。

会話を戻し、冷たいビールで緊張ほぐし、“その手に乗らず”とばかりに、手間暇掛かる調理の合間にも、ビール追加は一切せず。

やっと登場の「金目鯛定食」は煮汁たっぷり、肉の盛り上がりが見事な大振りで、ご飯、みそ汁、漬け物が付き、旨い、旨いと舌鼓。

骨以外は一切残さずの満足表示で店主を喜ばし、お茶で仕上げて、にこにこ勘定、楊枝をくわえて、“ご馳走様”と店を出る。

JR保田駅に戻り、今回の旅も無事終了。

帰路は、米本、山田の両氏は、隣駅浜金谷からフェリー利用で、久里浜へ、小林氏は、JRを乗り継ぎ船橋へ、残る御仁は、木更津から、「海ほたる」経由で川崎へと算段し、待ち時間を利用し、全員で駅前スーパーを覗く。

【余談42】旅先での楽しみとし、地元スーパー・マーケットへの立ち寄りをお薦めする。

土産物の購入は空港・駅前、朝市等、その地の名産品を取り揃えてくれる物産店を利用することが多いと思うが、周知の通り、広宣費、場所代、扱い量等、種々の要因から、販価は、かなり割高となっている。

しかし、当然のことながら、その地にも人々の日常生活があり、その一方に、彼等の暮らしを支える、極一般的な市場も並立されている。

地元スーパー・マーケットは後者市場の典型で、民芸品等を求めることはできないが、食品に関しては、新鮮、廉価な地元産品を手に入れることができる。

立ち寄りブースは、自ずと、魚、野菜、惣菜売場となり、内陸山国では、魚介類の品揃えは少なく、加工物が多くなるが、ヤマメ等渓谷の幸や、ラップ無しの、葉艶の良い野菜も見られ、奥多摩の駅前ミニ・スーパーでもその傾向を感じる。

一方、北国では、豊富で活きのいい寒流魚の隅に、見慣れた暖流魚が寝転び、南国では山の幸・海の幸共に、何故かグロテスクな商品物が目立つ。

惣菜売場も楽しい。全国の正月料理(おせち料理)を知りたいなら、是非、年末に一見、デパート、紹介本とは違った世界が見られる。

今回の買い物は「富津のアジの開き」のみ、トホホ...

駅に戻り、昨夜の残り酒を引っ張り出して、木ベンチで小宴開始。

飲酒が不満を解放させたか、怒りが沸々、“さっきの定食代金(額は失念)は何だ、法外なばかりか、何とも理不尽、価格建てにどうにも合点がいかぬ!”と口火が切られると、別の方から、“あの煮付けは、素人も素人、ど素人、表面を照からず程度に煮るのがコツで、露が多ければ良いと云うものではない!”と怒号が続き、周囲に乗客が集まっているのも忘れ、メンバーは得たりとばかりに首を振り振り、相槌打っての憂さ晴らし。

なお明るい晩秋南房総の夕、全員同じ電車に乗り込み、帰路に着く。

第十四回

日 時：' 05 . 6 . 25 (土) ~ 6 . 26 (日)

概略行程：

- 1日目 湯河原駅～幕山公園～幕山～幕山公園～湯河原駅～真鶴駅～貴船神社宮前～
宿泊/民宿「三ツ石」
- 2日目 中川一政美術館前～原生林入口～森林遊歩道～ケープ・真鶴/三ツ石～真鶴ケープパレス～真鶴駅

メンバー：齋木、米本、山田、吉川、小林、森、磯崎

今回のトレッキングは、山田氏が主宰し、湯河原/幕山登山(626m)、真鶴半島/原生林ウォークと、前回に続いての海浜歩き。

大谷氏は別行事が重なり欠席するも、会頭が久し振りに参加し、7名出席の大デレゲーション。梅雨真っ盛りの候、懸念された天気は森氏の参加で余裕綽々、暗雲が立ち去り、

初夏の好天に恵まれる。

集合地は、JR東海道線 / 湯河原駅。

神奈川県の外れ、伊豆半島の根元東端に位置する湯河原は熱海、伊豆に連なる静かな湯の町として知られ、「さがみの小京都」とも称される。町の南側を流れる千歳川を渡ると静岡県。

三々五々の集まりながら、メンバーの準備は万端、昼食弁当抱えて笑顔で挨拶。姿を隠す透明人間1名居るも、“はは～ん”と合点し、予定を変えて、駅前から幕山公園行きのバスに乗る。

10:00 AM 幕山公園入り口に到着。

バス停から公園迄は、なだらかな上り坂の広い舗装路。道の両側には、疎林の林が続き、生い茂る樹々草木は、早、初夏の葉色を装う。

少し歩くと、右手の林に、季節の花、「紫陽花」の群落を発見。

青色の輝きが余りに鮮やかで、早速分け入って、全員で、“チーズ”と唱和する。

幕山公園は幕山山麓を利用した自然園。

園内には約4,000本の紅梅、白梅が植栽され、梅の季節は更に良と案内されるが、敷地の広さに恵まれ、樹々は伸びやか、虫が生息すると云う清流も清冽さに溢れ、自然を取り込んだ造園振りに感心する。

山腹のパッドレス（岩場登りのトレーニング壁）を遠望しながら、園内を軽く散策した後、昼食迄は自由な時間。

A-PARTY / 齋木、山田、吉川の3氏は山麓逍遥、etc、B-PARTY / 小林、森、磯崎の3氏は、一汗欠きに幕山登山、**残る1名は...**

A-PARTYの行動は定かならずも、齋木蘆風氏が一端を詠む。

ヒメシヤラの 白き花咲く 峡(かい)の道
清流の岩場に カトンボ 憩いとり
汗づくの 登山の道に 風渡る
崖登る 男の汗と 重装備
清流の 枯木の枝に 浮具(うき)一つ

B-PARTYは「白銀ハイキングコース」を“ヒーファー、ハーファー”、擦登る。

やっと辿り着いた山頂は小さな草原で、東南の真鶴半島は霞もかかるか、うっすらとし

た外形を見せるだけで、真南に位置する筈の伊豆半島は、角度もあるのか、一切姿を見せず。

心地良い汗を拭き拭き、記念の写真なんぞを一枚と順にポーズを取り合う内に、空腹を覚えて下山時間の遅れに気付く。

携帯でA-PARTYに状況報告するや、下山が余りにも遅いので、山田氏が途中迄迎えに向かったとのびっくり情報、直登コース、「幕山ハイキングコース」をすたこら下る。

<言い訳> 直登しても、12時迄の下山は当初から無理。その上、時間の掛かる裏道を取り、かつ出足で道を間違えたことはA-PARTYも承知の筈。

元々曖昧に予想した下山時間に遅れたからと非難するのは、余りにも大人気無く、年長組A-PARTYのいじめでは...、済みませんでした。

昼食は、各自準備の自慢メニュー。

大樹を日傘に、広い園に据えられた木テーブルに坐り、爽やかな初夏の風を受けながら、ワイワイ、ガヤガヤ楽しい食事。

NO.1は、吉川氏の「細君お手製おにぎり」に譲るとしても、NO.2は、湯河原駅前コンビニ調達の「冷氷盛りそば」と自惚れ、何故か、今頃、謎の御仁は、駅前、「立ち食いそば」で食事中と確信する。

湯河原駅に戻り、東海道線を1駅上って真鶴駅に移動。

またまた、ここでも一騒動。歩きの予定を変え、宿までバスで行くことは決まったが、降車すべきバス停が2説に分かれて大紛糾。

バスの運転手に訊ね、宿の女将に電話するも、「宮前」、「貴船神社」共に譲らず、結局、どちらからも変わらぬ距離と裁定し、祭りで知られる「貴船神社」下車で円満解決。

駅前コンビニで酒と氷を調達し、笑顔で乗車。

(約1ヶ月後、'05.7.28貴船祭りに参加した船の転覆事故発生)

バス停位置は貴船神社の参道入り口前、やれ嬉しや、海の臭いがプーンとする。

談笑中の漁協関係者らしき男性3名に宿への道を訊ねると、地図迄探してくれる嬉しい応接、指示に従い、夕食前の腹ごなしには充分過ぎる、急な坂道、石段を上る。

宿は半島の尾根部から東側、「真鶴港」側に少し下った民家の並びに位置し、眼下の先には、人気が見られぬものの、なお明るさを残す「真鶴港」。更に、その先には、きらきらと海面輝かく「相模の灘」。

さあさあ、いざや、民宿、「三ツ石」に到着。

山の宿とは装いを異にし、屋根は赤色、壁は白色にペインティングされた海浜の宿。女将の歓迎を受け、入り口直ぐの階段を上る。

部屋は2階3室が準備され、海からの涼風が爽やかに吹き抜けるベランダでは、どこで先行したか、透明人間/米本氏が読書中。

メンバーは、一応、驚いた風を見せ、慌てず騒がずエールを交わし、部屋割りに従い荷を降ろす。

窓外には、先ほど眺めた湾の風景が広がり、夕なずみによるものか、海面のダイヤモンド光が煌めきを増す。

宴は刺身がふんだん、「海の幸」一杯で、女将の、“久方振りに腕を振るわせてもらいましたよ”との、笑顔の口上聞きながら、旨い旨いと舌鼓。

【余談43】真相は未だ藪の中にあるが、真鶴町で山田氏と女将の確執が噂された。

何でも、山田氏が宿に予約の電話を入れた際、先方の対応がどことなくおぼつかなかったため、改めて、民宿協会に、「大事な宿」かどうかの確認を行ったところ、どういう理由か、その事が女将の耳に伝わったようで、さあ大変、気分を害した女将は、“何でしたら、お断わりさせていただいても良うござんすよ”と臍を曲げ、悔しがる歯ざしり音がケープ真鶴の「三ツ石」付近まで響き渡ったとのことである。

幸いにも、最終、“料理で目にももの見せてやる”ことに女将が心変わりし、今回の大判振る舞いに至ったものと思われる。

こう云うことはあり得る。山梨/初狩、「破魔射場」の予約時も同様で、大女将の対応振りが気になり、よっぽど確認しようと思ったが、何故か、電話の先に、古びた“囲炉裏部屋”が見え隠れしたため、“面白そう”と打っちゃった記憶がある。

全員、ベランダのある部屋に集まり、いつもの二次会。

横開きの硝子戸を目一杯開け放つと、海からの爽やかな「風」が通り、口に含むロックウイスキーが一層まるやか、懐古談に花を咲かせて、お腹を抱えて大笑い。

夜が更けて、火照る体に浴衣の袖を肩迄たくし上げる頃、リーダーは近隣への影響を女将に確認する気遣いを見せる。

ムニャ、ムニャ...、畜生、蚊が...、パチーン、...寝られねーよ！ムニャ、ムニャ...、スー。スー。

あれ、いつの間にか夜が明けてらあ...、「日の出」を見逃したよ～！

本日も好天に恵まれ、コース確認も兼ね、朝食前に早朝散歩。

意外なるか、少し上った半島尾根部には広い舗装路が走り、道の両側は民家が連なる住

宅街。

通りの向かいに見慣れた標識ポールを見つけ、細目で焦点合わせすると、バ*停「済度」とか、「ケーブ*鶴行き」とかの悪夢文字。

慌てて眼を反らし、口数少なく逆方向へ歩く。

パーティは2班に分かれ、先発の山田、吉川、小林、森、磯崎組は、なお、人の往来少ない尾根路を歩き、中川一政美術館前から樹林に覆われた「お林遊歩道」に入り、真鶴岬に抜ける。

意外の近距離に、若干、拍子抜けするが、更に、急な石段を下り、磯の岩場で小休止。眼前には、笠島とも呼ばれる巨岩、「三ツ石」が並び、その先には「太平洋」。

早朝から訪れた家族連れは、早、磯の浅瀬に入り、貝を拾ったり、小蟹を探したりと楽しそうに戯れる。

メンバーは泰然、岩に腰掛け、お茶を沸かして悠々休む。

時間を見計らい、岬に登り返すと、間無く、後陣、齋木、米本組が、若干、遅れて到着。

宿での、出発前の一勝負に、厳しい「コウ争い」があったか、あるいは、“もう一番”が繰り返されたか、更には、ベランダの浜風が余りに心地良かったか。

汗ばむ候に、真鶴ケーブパレス1階で、「ソフト・クリーム」を賞味。

なかなか美味しくながら、付される冷水はそれ以上に旨く、留まるところなく、“お変わり”が続く。

昼食時間迄を、自由時間とし、再度、散会。

齋木、米本の後陣組は道を戻り、「中川一政美術館」を訪ね、山田、小林、森組は原生林の森を散策、吉川、磯崎組は岬の大樹の下で一眠り。

真鶴ケーブパレス / 2階レストランに再集し、ビール付きの「バーベキューセット」で中食。

混雑を予想し、早めに入場するが、意外や、昼食時に入っても利用客は少なく、可愛い女性店員さんの笑顔を独占して、ワイワイ、ガヤガヤ楽しいランチ。

尾根道を走る定期バスで JR 真鶴駅へ向かう。

幸甚かな、例のバス停に気付くメンバーは居らず、何事もないまま真鶴駅に到着し、全員、東海道線 / 東京行きに乗車。

今回、神奈川組は家が近く、山田、齋木、米本、磯崎の順で抜けていく。

第十五回

日 時：' 0 5 . 1 1 . 2 6 (土) ~ 1 1 . 2 7 (日)

概略行程：

- 1 日目 武蔵五日市駅～浅間尾根 / 峠の茶店～浅間嶺～人里峠～ 本松（一本杉）～数馬分岐～ 宿泊 / 民宿「浅間坂」
- 2 日目 都民の森～鞘口峠～三頭山東峰・中央峰～笹尾根～三頭大滝～都民の森～武蔵五日市駅

メンバー：山田、小林、森、磯崎

南房総 / 東京湾、真鶴岬 / 相模湾と海浜近くの山歩きが続いた後、今回は久し振りに奥多摩に戻り、晩秋の尾根歩き。

【余談 4 4】当初は、“奥多摩の紅葉狩り”をテーマとし、久し振りの御岳山、「登奈利荘」再訪を予定し、記録的な残暑が続いていることから、紅葉の盛りは例年の2週間遅れと伝えられたため、訪問時期を11月末に設定した。

ところが、11月に入ると急に冷え込みが厳しくなり、“紅葉前線”が一挙に移動、急遽、案内を、“落葉の道を踏みしめて”に変え、行き先も変更した。

今回の参加者は最少人数の4名。

会頭は体調整備、米本氏は社内旅行、大谷氏は社内会議と、それぞれの事情で欠席し、更に、吉川氏も急な所用が入り、直前に不参加となる。

集合地は武蔵五日市線のターミナル / 武蔵五日市駅で、待合わせ時間は前回より30分早めて、8:50AM。

例によって、土曜日の駅前バス・ターミナルはハイカーで溢れ返る人の波、大きく手を振り、互いの居場所を知らせ合って、全員、遅れることなく、無事集合。

メンバーに、吉川氏の急な欠席を伝えると共に、未定で案内した初日の訪問先を、候補地をリストアップしてアンケート。

結果は、“このメンバーなら、ひよっとすると”と予感した、最もハードな「三頭山(1,531m)登山」が満票確保!

因みに他のコースは、本命と予想した、「飯盒炊さん」+「陶器、和紙の制作教室」、穴は「三頭山山麓散策から宿迄の尾根歩き」や、「里山、紅葉巡り」と、いずれもお茶を濁すもの。

メンバーの意を受け、大幅な行程変更。(もっとも、計画通りに行動した回が、むしろ、少なかったかも！)

初日は、当初、2日目に予定していた「浅間尾根歩き」とし、2日目は、「三頭山登山」とガラガラ・ポーン！

勇躍、全員揃って、昼の弁当と夜の酒を調達に、駅前コンビニへと向かう。
(‘09.11.2 残念ながら、同コンビニは閉店済み。その後にレンタサイクル店がオープンしたが、命運如何なり)

バス・ターミナルに戻ると、9時前後に集中した便が一段落したためか、人の波は引き、駅前には静けさが戻る。

上機嫌なバス案内人から、“「払沢の滝」方面のバスは間もなく到着だよ”とガイドされるが、「時坂(とっさか)峠」への嫌な登り道を頭に浮かべ、更には、“奥多摩地区のバスとタクシー料金の見合いは4名”の格言を思いだし、タクシー移動を決断。

無愛想なタクシー運転手は、“ザックは後ろのトランクに”と邪慳に云うが、行き先を告げた途端に態度を豹変、破顔一笑、揉手も厭わんばかりにドアを飛び出す！

向かう先は瀬戸沢林道の終着地、「峠の茶店」。

弁舌爽やかな運転手に、今年の、紅葉の盛り時期を尋ねると、“1週間位前かねえ”とあっけらかんに云い、山麓周辺か、町中辺りかと問うとすると、“今年は雨が少なかったから、色付きが良くなかったねえ”と強烈パンチを喰らい、会話を打切って黙り込む。

その後は、さっきの呪文を、早、忘れ、一人当たりのバス料金を4掛けしながら、料金メーターと睨めっこ。

払沢の滝入口脇から浅間尾根への林道に入り、急坂の広い舗装路を九十九に上ると、間無く、谷間に数軒の民家が寄り添う時坂集落。

以前、ゼイゼイ云いながら、この道を登っていた時、洗濯物籠を抱えた老婆が、道の先を足腰しっかりと歩いていたことを思い出して、つい苦笑。

高度を上げると、車窓からは、時折、遠くの山並みが展望でき、御前山の支稜山斜面に紅葉、黄葉の斑な綾取りを眺望。

徐々に道幅が狭まり、所々で、垂れ下がる樹々の枝が車体を擦り始め、舗装路の痛みから車体のバウンドが大きくなる頃、峠の近さを知る。

浅間尾根上、「峠の茶店」には、駅から約30分で到着。

尾根に取り付いてからの距離が意外に長かったが、それでも通常のバス利用だと、駅から2時間は掛かると思われ、料金比較はともかく、大幅な時間稼ぎと弁明する。

「峠の茶店」は木の香臭う休憩所。

営業努力も充分で、至る所に案内看板を掲げ、山菜料理や麺類、更には名物団子も準備し、下って来たハイカーの休息を誘う。

ただ、偶然なるかな、未だ利用客を見掛けたことが無く、内部の様子は定かでない！

北面の展望に恵まれる店先の広場から、柔らかな晩秋の朝陽に照らされた奥多摩三山(大岳山、三頭山、御前山)を一望すると、ここでも紅葉が斑に輝く。

現在は撤去されているが、以前、野趣豊かなドラム缶風呂が据えられていたことをメンバーに語り、脚元の朽ちた木ベンチに荷を降ろして身支度する。

さあ出発、これより先は土の道！

小橋で、「瀬戸沢」の源流を渡り、「瀬戸沢の一軒家」を覗いた後、沢沿いの道を辿ると、間無く、「飲料用」と木札をブラ下げた「小沢の水場」。

早、歩きを止めて、水筒水を「払沢の滝」の上流水に入れ替える。

岩場の急坂から、歩きを再開。

高度を上げるに連れ、流れの水勢が細り、終には消失。伏流したものと思われるが、渓谷は岩と倒木だらけの、見るも無惨な崩壊の谷と化す。

沢を離れた登山道は、やがて谷を大きく巻き、尾根の北側山腹にからむ頃には杉の林から広葉樹の森に一変。

彩色を残す樹々の回廊を潜りながら、落葉の絨毯をザック、ザックと踏みしめ、“どうだ、どうだ”とばかりに腰を振り振り、後に続くメンバーに自慢する。

時折、北面の展望が開け、都度立ち止まって、「大岳山」、「御前山」の山容に眺め入る。

トイレ施設もある「浅間嶺休憩所」から、最後の小急坂を登り、昼食予定地の「浅間嶺」に到着。

初めて南面の展望が開け、眼前には、「三頭山」から張り出す「笹尾根」が横たわり、その奥には、「丹沢山塊」の峰々が重なり合う。

そして、視線を、右手、遙か彼方上空に移すと、早、雲がたなびき、霞に包まれ始めた「富士山」が、天空に浮かぶが如く雲上に頭を出す。

嶺頂周辺には、なお、秋色を充分に残し、富士を撮るアングルに穂を揺らすススキをアレンジする。

とは云うものの、嶺の標柱脇に立つ「桜樹」は、すっかり葉を落として裸木化し、風に

飛ばされたか、つい先日、樹下周辺に拾い集めた桜葉は、一切不見当。

食事場所にと目論んでいた木テーブルでは、早、1組の年配カップルが休憩中。

相席を願い出る勇氣はなく、やむなく、隣の木ベンチ2本に荷を降ろし、食事の準備に取り掛かる。

今回は、小林氏が懐かしい石油バーナー式火器を持参し、森氏の分と合わせて火器3式の悠々湯沸かし。

火を止めて、味噌汁に湯を注ぐ頃には、ハイカー達が2方向から続々到着し、間無く、山上至る所で湯沸かし音が響き渡る。

寒気を感じる頃、やや長目の食事を終え、嶺を下って、緑の回廊歩きを再開。

再び、冗談を言い合ったり、大きく深呼吸したり、はたまた、前に走って写真を撮ったりと、大忙し！

“へんぼり”、あるいは、“へんぼり”、とも読む、「人里分岐」を過ぎると、周囲は打って変わって針葉樹の森に一変し、登山道からは落葉が消失。

今度は、鬱蒼とした樹々の繁りから洩れる陽の陰影を楽しみながら、木の根を露出し、乾いたり湿ったりの土道を踏み、静寂の山中に笑い声を響かす。

やがて、尾根の背に近づいたか、登山道は北面を巻いたり、南面を巻いたりと移動し始め、再び、展望を取り戻す。

途中、「一本松(一本杉)」で一服し、その先の大岩では、案内板に記された「猿の手形」を皆なで探す。

数馬分岐に到着し、また休憩。

脚の朽ちた木ベンチに荷を降ろし、知床/羅臼産の昆布茶を飲みながら、“杉が植樹される前、ここは谷を見下ろす好展望の傾斜地であったのに...”とメンバーに愚痴を云い、なお、背丈2mに達しない杉の樹間から、植樹中、山腹に造作されていた材料小屋を探す。

若干、早過ぎると思いながらも、メンバーの強い要望(督促)を受け、今日の宿へと立ち上がり、「藤原峠」、「風張峠」への尾根道を右手に見送り、南西方向への坂道を下る。

南面山麓の展望が開け始めると、右手遙か遠くの山中腹に、門構えが立派な、大きな一軒家を発見し、ついお節介に、足の便は如何とパス道間の車道を探す。

林道を横断し、更に、道をジグザグ下ると、畑地や墓地、民家が現れ始め、すっかり山里風景。

石垣脇に根を張り、柘榴色に紅葉した「紫陽花」に、しばし足を止め、「民宿 浅間坂」の入り口では、午後の陽を浴び、紅に輝く「紅葉」の大樹に見入る。

「民宿 浅間坂」は旧館、新館、ロッジを構える大型旅館。

「こんにやく料理」を目玉とするも、その一方で、「クラシック・コンサート」を定期開催する等趣向を凝らし、御岳の「御師の講宿」とはひと味異相。

自慢は、何と云っても、旧館前に造作された大テラス。

眼前には、浅間尾根より一段高い笹尾根が横たわり、ガーデン風に造作されたテラス周辺には、季節の花々ばかりか、「柿」や「柚子」が負けじとばかりに秋色を輝やかせる。

【余談45】「民宿 浅間坂」の存在は、「浅間尾根縦走路」の取り付き途中に立地することから、以前から承知していた。

早朝、最寄りのバス停、「浅間尾根登山口」で下車すると、同宿向けに宛名書きされ、ナイロン袋に包装された朝刊が待合所の木席に置かれているのが良く目撃された。

もちろん、配達人は多摩バス（旧西東京バス）運転手で、バス停毎に見事なコントロールで投げ放つ。

宿迄は急坂を登って約20分。何度か、向かい序でに届けようかと思っただが、生活リズムを崩してしまうのではと実行したことはない。

今回、宿泊先に選んだのは、「浅間尾根縦走」に至便であることは無論、決め手は、パンフ入手に事前に立ち寄った際、応接した2名の女性に好感が感じられたことである。

（案内パンフから、1名は弘子ばあちゃん、もう一方の中年女性は若女将と知る）

部屋は新館、「山海堂」。

崖上に造られた二階家二階部で、一階は、入浴だけでも利用可能な、当宿ご自慢施設の“数馬浅間の湯”。「檜」と「岩」の両風呂を併設し、男女交互に日替わりユースする。

風呂に眼のない山田氏は、荷を降ろすや否や、嗅覚鋭く、直ぐに階下へ向かう。

カメラを片手に、なお明るいテラスに出て、晩秋夕風景を楽しむ。

眼下には「浅間尾根」と「笹尾根」の間を縫う様に延びる檜原街道が見え隠れし、水澄ましの様に走る乗用車の後を、鯨の様な多摩バス（旧西東京バス）が追い掛ける。

軒下に吊された「干し柿」や木テーブル上に並べられた「蔦の蔓」、「椎茸」の乾物を観たり触ったりし、しばし時を過ごす。

帳場に若女将を訪ね、夕食時間を確認し、翌日の昼食用に「おにぎり弁当」を注文、「都民の森」行バスの始発時刻を訊くと、何と、“お送りしましょうか”との嬉しい返事。その上、竹籠に盛られていた柚子迄貰い、玄関を出るや否や、喜びを隠せず、思わず部屋まで

スキップ、スキップ！

夕食は、玄関横の大広間。

所狭しとばかりに大小5組の宴席が整えられ、着席する顔ぶれはマウンテンバイクでツーリングする若い男性5人連れや若いカップルと、従来宿に比し、若干、様変わりのメンバー構成。

それでも卓上に並べられた料理は、案内通り、「鮎の塩焼き」をメインディッシュに、小鉢に盛られた「山の幸」ふんだんで、“ヘルシーさ”は微動だにせず。

翌早朝、静寂に包まれたテラスに立ち、大きく深呼吸。

眼前の笹尾根は浅間尾根より一段高く、ピークを造る「大羽根山」の北斜面が朝陽に照らされて光輝き、斑模様の紅葉を浮かび上がらせる。

朝の冷氣によるものか、木床、木テーブル、木ベンチ共に霜に覆われ、脚元は滑りやすく誠に覚つかないが、霜を拭いて、森氏が炒れてくれたドリップ・コーヒーを啜み、珠玉の時間を楽しむ。

いつのまにか、鳥達の囀り声も加わり、“お山の朝”の始まり、始まり！

そうこうする内、朝風呂（本日は岩風呂）から上がった山田氏と宿の亭主で、風呂の制作者でもある小林中氏も加わり、園芸談議。

同氏の本業は都庁登録の建築工事業者で、子息は現在、神奈川／藤沢市で大工業を修業中と云うことから、更に会話が弾む。

朝食後、小林社長に送られ「都民の森」へ。

つい最近、石原都知事が視察に訪れ、改めて自然保護の重要性を認識し、引き続き保全に全力を尽くすと約束、「三頭大滝」まで歩いたとのこと。

木材工芸センター横の「丸太切り場」で汲水し、山田氏と丸太杉の早挽き競争。

あ～あ、何とも悲惨！所要時間ダブルスコアの完敗で、鈍りきった腕を振り振り、3ヶ目の「木製置台」を確保し、ザックに収める。

登山コースは最もポピュラーな鞆口峠（1,142m）越えを選ぶが、取り付き急な本道のだらだら坂を回避し、炭焼窯側の迂回路から登る。

道の周辺には、早、ハイカーの声が響きわたり、本日も人盛況の予感あり。

鞆口峠で一休みするが、左手前方には、見上げるだけでも嫌になる急峻な木階段が迫る。

つつい出発をためらい、四方山話を延ばして氣息を整えるが、痺れを切らしたメンバ

一に急かされ、止む無く立ち上がる。

道は急なばかりか、途中からは足場確保が難しい固土坂。

慎重に歩を進めると、後に続くメンバーは苛立ちを隠さず、一旦道を譲るや、いつの間にか遙か先をホイホイ登ってしまう...トホホッ。

一緒に登る親子4人の楽しい会話。

父親、“おーい急に黙り込んで、さっきまでの元気はどうしたい？”

息子、“違うよ、皆が話したくなさそうだから、黙ってやっているだけだよ”

つい微笑みながら、前方見上げるや、いつの間にやら、メンバーの姿が消失。

“何を勘違いしているのか、リーダーを追払らかしてどう云うつもりだ！”

三頭山はブナ林の山。

すっかり葉を落とし、冬枯れ模様の「ブナの路」を、“言葉少なに、ただ一人歩く”。

途中、旧登山道との分岐に出合い、北西側奥多摩湖の展望を求め、「ブナの路」を離れて西側尾根道に入る。

若干荒れてはいるが、人が少なく、樹間の所々から藍色の湖面が見え隠れする静かなコース、一人歩きの気楽さを楽しむ。

尾根の本道と合流し、木ベンチに座り汗を拭く。

“あれれっ、向こうから登ってくるのは烏隊。その後ろに続くのは例の親子四人連れ！”
不満そうな様子と、罰の悪そうな顔色が入り混じり、早速、事情を質すや、“分岐路の先で、しばらく待っていたが、いつまで経っても来ないので...”と言葉を濁す。

そうか、そうか、正体見たり枯れ尾花！ 終に見限られたか、くわばら、くわばら！

その後は、“さぁ、さぁ、どうぞ”と先頭に追いやられ、尻を押されて急坂を這い登る。

見晴らし小屋に立ち寄った後、「白樺の木」が絵になる展望台で休み、最後、三角点を置く東峰から最高峰の西峰に登り、無事、烏森会登山の最高峰、「三頭山」山頂に立つ。

(「三頭山」の語源は、「御堂山」の様であるが、何故かメンバーは「みとうさん」を「みずさん」と読む)

南面に正対する富士は、早、霞に包まれ、浮城のごとく、銀嶺輝く山頂部を見せるのみ。

それでも、続々と到着するハイカーは、“富士山、富士山”と歓喜の声。

富士を観るには最高のビュー・ポイントとなる南側木ベンチに荷を降ろし、味噌汁用の

湯を沸かす。

宿で調達した昼食弁当を開き、“おにぎり3個は多すぎる”とか、“漬物付かずは非常識”と、さっきの謝意を忘れて、早、文句を云う。

食後のコーヒーを楽しみ、しばし一服。

展望明瞭な北面に回り、据え付けられた銅製の案内板を指さしながら、奥多摩三山の更に北奥に位置する石尾根を北西に辿り、頭をちょこんと出した峰に、あれが「雲取山」と山名を追う。

下山前、山標背景に全員の笑顔を撮影。

急坂の笹尾根を少し南東に下り、途中、三頭沢への岩場道に入り、沢沿いに三頭大滝へと下る。

谷間の樹々は冬枯れ模様で、すっかり裸木化、踏みしめる落葉も谷風に飛ばされたか、量が少なく、黒墨み濡れた腐葉ばかり。転倒に注意しながら、慎重に下山する。

三頭大滝の紅葉も終わっており、木テーブルに荷を降ろすこともなく、都民の森入口へと木屑の道を下る。

登る前とは別の水場で、ポリタン、予備水筒を満杯にし、森の入口で、「檜原柿」を購入していると、先行したメンバーが、“バスが出るぞ”と大声上げる。

第十六回

日 時：'06.5.27(土)～5.28(日)

概略行程：

1日目 武蔵五日市駅～上養沢～御岳林道～七代の滝～ロック・ガーデン～御岳沢休憩所～綾広の滝～長尾平～ 宿泊/旅館「憩山荘」

2日目 ～大塚山～御岳平～滝本～払沢～玉堂美術館～御岳駅～鳩ノ巣駅～鳩ノ巣バンガロー(昼食)～鳩ノ巣駅

メンバー：米本、山田、小林、森、磯崎

新緑トレッキングは、前回に続き、奥多摩の山。

向かう先は約2年振りの御岳山。何と、今回はケーブル・カーに乗らず、山麓から登ろうと云う大胆な行程を計画し、その上、宿泊先は日観連加盟の「憩山荘」。

むべなるか、週初めの天気予報は雲と傘マークで埋め尽くされ、前日には、身支度に迷うことのない確実な降雨予報。

集合場所は、前回同様、武蔵五日市駅。

霧雨模様の駅頭には、さすが人は少なく、今日に限っては、通勤、通学者が疎らに行き交うターミナル。

5,000円のバスカードと寝酒を購入した後、バス駐車場裏手に位置する、「小倉公園」に上り、お湯を沸かして、本日、2杯目のコーヒーを喫む。

小さな公園ながら、周りを樹々が囲い、雨に洗われた黄緑色の若葉が、何とも清々しい。

雨足が強まるのを機に、駅に戻り、メンバーを出迎え。

会頭は体調調整中で、吉川氏は外せぬ仕事、大谷氏は例会の由にて、それぞれ欠席。“計画書に驚き、参加を見送ったのでは？”と心ない陰口を云う輩居るも、厳しく諫言。

電車が到着する度に、山田、米本、小林&森氏の順でメンバーの笑顔が加わり、無事、全員集結。

意気揚々と、「上養沢」行きのバスに乗り込み、乗客5名で出発する。

「上養沢」は武蔵五日市駅の北西方向に位置し、「大岳山」に連なる「馬頭刈尾根」と「日の出山」に連なる「金比羅尾根」が収束する、家並み数軒の谷間集落。

峡間の県道201号線を、「養沢川」沿いに上る。

途中、「大岳鍾乳洞」や「養沢荘（公共保養施設）」、「養沢神社」、を通過するが、乗降客に動きはなし。

【余談46】当路線は第二回トレッキングでも帰路に利用している。

「日の出山」から下山後、武蔵五日市駅へ出たもので季節は同時期、その折りは雨上り後であったが、今回同様、雨に輝く新緑が印象に残っている。

今回のメンバーでは米本、山田両氏が参加しているが、当初、記憶になし。

終着バス停、「上養沢」の小さな広場でザックを開いて、最後の身支度。

合羽を被ったり、傘を拡げたりと、カラフルな雨具が咲き乱れる中、山田氏の新調ザックに気付き、眼を瞠る。

“あの色調、あの格子縞は、...”

紛ごうことなく、次回購入候補の一つに考えていた「ニッピン製」で、山田氏は今回から火器も持参し、装備の整備に意欲が満々。

【余談47】「ニッピン」の正式商号は「日本用品(株)」で、秋葉原に本店店舗を置く他、神田小川町にも2店舗を擁し、それなりの規模と知名度を有す山岳用品の専門店。

長い付き合いで、山歩き再開時から、山靴等の重装備は当社製品を愛用させてもらっているが、その間、秋葉原2号店の閉館、本店販売フロアの縮小等があり、スポーツ用品業界の、経営面での厳しさは当社でも例外にないようである。

ザックは、長い間、当社オリジナル・ブランド品、「テクノライト」シリーズを愛用させてもらっている。背当て部分にネットを組み込み、フィット感、通風効果を高める工夫を施しているのが特徴であるが、選択の決め手は両サイドに取り付けられたサブポケットである。かつて学生時代に使用した大型ザック、「キスリング」に対するノスタルジアそのものと云われても反論はしない。

不思議なもので、若干の仕様違いや色違いはあるものの、山歩きの途中、同じワンポイント・マーク、「山と太陽」を見掛けると、つい親近感を誘発される。

しかし、酷使も10年近くなると布地の傷みばかりか、縫製部至る所で綻びを見せ始め、“そろそろ”と思い始めていた頃、とんでもないアクシデントが発生！

‘05年秋、「高川山」頂上間近の登山道片隅で休憩中、立て掛けていたザックが倒れた弾みで登山道から山斜面にダイビング(まさに、ぴったりの表現！)

青い塊(12kg内外)は山斜面、疎林の間をびっくりする様なスピードで飛空し、たちまち遙か彼方に消失、杉の木立に衝突しないのが摩訶不思議！

止む得ず、残像のみを頼りに、ジグザグの登山道を横断するように山斜面を直降下し、後を追う。

状況は何とも絶望的。途中から登山道を下り、ザックの中身を思い浮かべながら、放棄時の影響勘定を始めてしまう。

あれれっ、道の先に、眼の上に手を翳しながら下方の谷間を覗き込み、何かを指差す人が！

さっき、上で擦れ違ったばかりの中年夫婦で、それきたとばかりに、その方向に視線を移すや、木立に囲まれた大岩の下に、青色の何かが...

勇躍、枯れ木を伝って藪斜面を掛け降りるや、傷付き汚れた我がザックに相異なしと、ついに捕縛。

さすが登山ザック！ストックのホルダーベルト支持布が1cm角程度鍵形に引き裂かれていたものの、それ以外に大きな支障は見られず。

とは云うものの、カルピナで取り付けていたカメラはケースのみで中身は行方不明、またザック内収納のプラスチックボックスも輝割れ、衝撃の強さを窺わせる。

カメラ本体を探しながら、再び、急な山斜面坂を登り返すと、奇跡かな、枯れた杉葉上に我がカメラ！

しかし、残念無念、レンズ部、筐体が破損し、フィルム抽出がやっとで、見事にお釈迦と化す。

再度、登山道を登り、“良かった、良かった”と安堵する一方、“ほとんど山頂間近であったのに...”と愚痴るが、人身事故に至らなかった幸甚に気付き、思わず冷や汗をかく。

こうした事情から、次のザックを探しに、その後何回か、「ニッピン」に立ち寄っていたが、現在の物より、若干、容量の大きい物をの条件から、「格子縞」も眼に止まっていた一つであった。

余談が長くなってしまったが、序でに云うと、「ニッピン」では、すでに、あの格子縞ザックを店頭においておらず、現在は、前の物より一回り容量の大きい(35cc)同じテクノライトを背負っている。

準備は万端、バス停を後に、舗装路の続きを、北に歩き始める。

道沿い周辺には、なお数軒の民家が散見されるも、人の気配はなく、無遠慮に垣根越しに邸内を覗き、外部と峻別するかのように入手された庭に苦笑する。

降り止まぬ雨に、進むに連れ、つい寡黙になり、周囲を包む、雨に洗われて光輝く若葉に見入ったり、右手を流れる養沢川の瀬音に聞き入ったりして歩く。

道の先、林道への曲がり角に立派な公衆便所が建ち、その右横に立つ「日の出山」への登山道木標を認めると、やっと両名の記憶も蘇る。

途中、一度の休憩を挟み、更に1時間強、なだらかな上りの林道を歩いて、終着点に到達。

ここから、沢沿いの急坂登山道に入り、間無く、長尾平/売店前からの直降下ルートと合流、第二回目にこのコースを辿ったが、両名の記憶は如何也？

ロック・ガーデン下流部となる岩場道を進むと、途中、教師に引率された小学生数名が小さな沢を囲み、何かを観察中。挨拶を交わすのみで、小さな木橋の道を開けてもらい、先を急ぐ。

濡れて滑りやすくなった大岩を谷側から慎重に巻くと、「七代の滝」。

生憎の天候により人影は見られないが、本日も水量豊かに怒濤の流れ。白い激流が滑るように七段の釜を打つ。

足場の滑り易さを警戒してか、メンバーは鉄階段下に座り込み、滝淵に近寄ろうともせず。

当初予定した滝流を眺めながらの昼食は、雨により早々に変更、重いザックをまた担ぎ、今回の最大難路となる急な鉄階段の連続をゼイゼイ登り、蛇がとぐるを巻いた様な木の根を踏み分け、何とか天狗岩下に這い登る。

余りの、呼吸の乱れに、しばし休憩。

かつて、ロープを伝って天狗岩上に登ったとか、岩下の石段に並んで撮った写真は傑作であったとか云いながら、氣息を整える。

久し振りのロック・ガーデン歩き。

人気がなく、静寂に包まれたガーデンを右に左にと足場を移動しながら、ゆっくりと辿る。頭上、周囲の樹々は雨に濡れ、黄緑色鮮やかな若葉に満ち溢れる。

屋根付きの「御岳沢休憩所」に入り昼食。

今回は弁当持参であるが、3台の火器が並べられ、余裕綽々。味噌汁用に、カップ麺用にと湯を沸かす。

漬物等、各自自慢の食料が提供される中、最近常食の「胡瓜」+「もろみ」を披露すると、あっさり味がまずまず好評。

しばらくして、中年女性2人組みが到着し、拡げた荷物を寄せて、早速、席を譲る好々爺振りを発揮。

雨の降り止まぬ中、ガーデン歩きを再開。

濡れた岩場道を慎重に辿り、「綾広の滝」でロック・ガーデン歩きを無事終了。

水場から長尾平へと回り、本日雨休業の売店軒下で雨宿り。いつもなら、人盛況な長尾平に人影はなし。

今回のテーマ、御岳山（御嶽神社）に登る（参拝）タイミングを窺うも、メンバーは忘れた振りして知らぬ顔。

終には、“早く宿に入るうや”の合唱が始まり、止むなく神社の脇道を歩き、本日の旅荘へと向かう。

眼にももの見せてやる！

驚くなかれ、本日の旅荘、「憩山荘」は“日観連”の加盟店。しかも、事前の料金打ち合わせはなく、ただ、“登奈利さんでは、いかほどのご利用額で...”の問い合わせに答えたのみ。

“母ちゃんから、しっかり、小遣い貰って来たか？”とばかりに、メンバーの顔を一瞥する。

【余談48】今回、久し振りに「登奈利荘」に予約電話を入れたが、女将から、“満室ですので悪しからず”とすげなく断られ、“宜しければ、別の宿をご紹介させてもらいましょうか”と反撃を受け、案内されたのが当荘である。何でも女将の縁戚筋に当たると云う。

そこで、女将に一言申す。

女将、いくら何でも、あれは無いでしょう。エッ、何のことだって？ とぼけちゃ困りますよ、私は、TV東京も見ていますよ。

あれは、奥多摩を訪ねる旅番組で、「ザ・ガードマン」で一躍有名になった俳優倉石功夫妻が案内人でしたねえ。

奥多摩ノ川苔谷の名瀑、「百尋の滝」を登った後、当日の宿は、御岳山々上、御師の宿、「能保利」と紹介されました。

「能保利」さんは茅葺き屋根が印象的な旅荘で、場所は確か、お宅の少し先、神社への急な坂道が始まる左手でしたねえ。

例によって、御岳産の、旬の野菜が並べられ、夫妻が、「旨い、旨い」と言いながら、“都心から約2時間で、こんなに自然が満喫できるなんて”と常套句を発止しながら、感嘆するのは致し方ないにしても、隣の席で食宴する女連れの泊まり客にマイクが向けられた時、“料理も美味しいですし、いいですねえ”と答えるのが浴衣に羽織掛けの女将とは...、どう云う仕掛けだったのでしょうか。

長くなった序でに苦情を続けますが、案内画像そのものにも多々疑念が有りました。

視聴者は気付きっこないと高を括っているのか、繋ぎ合わせの映像内容は奥多摩駅周辺から急に御岳ロック・ガーデンに飛んだり、また奥多摩駅に戻ると云う、時系列矛盾を平気でやり、また、ハイカーで行き交うロック・ガーデン入口木橋に若い女性を座らせて食事をさせる等、一時、通行止めにもしたのでしょいか、何度も木橋を渡ったことのあるメンバーなら直ぐに解る“やらせ”を堂々とやる等、ああ、この退廃振りは！

「憩山荘」は御師集落高台に位置する一軒家。

広い敷地に庭を配し、建物間口も、「登奈利荘」、「南山荘」の規模を凌駕する。

若干、早目ではあるが、若女将の出迎えを受けて、無事入場。

ずぶ濡れの出で立ちに、手慣れた手順か、早速、玄関上がり場横、ストーブが燃やされる板場に案内され、立てハンガーに、帽子、合羽、タオルと濡れた衣類を掛ける様に勧められる。

部屋は二部屋に分かれ、例によって、年長組みと年少組みの自然な分かれ。

硝子戸を引くと、降り続く雨に、遠くの視界は閉ざされるが、周囲を囲む樹々には雨滴に光輝く青葉が溢れ、寒さも忘れて、しばし見入る。

長い夕を暖かい部屋で、お茶を飲んだり、TVを観たり、はたまた、昔話に花を咲かせながら、各自のんびりと過ごす。

宴は1階大広間。

例によって、自家栽培した春の野菜を蒟蒻、天ぷら、サラダ、煮物で楽しみ、岩魚で舌鼓。いつものように、立ち上がって料理膳を写真でパチリ。

この時、「登奈利荘」の、女将との縁戚関係を訊いた筈も、記憶にはなし。

二次会はウィスキー片手に、“プロ野球の監督論”。何故か昔を思い起こすようで、皆な
の意見にもかつてのようなチームへの執着は感じられず、ただ淡々と自説を披瀝するのみ。
適当な時間に話を切り上げ、寢床に向かう。

翌朝も雨。

硝子戸越しに窓外を見ると、樹々の青さは、ますます輝きを増し、至る所で雨滴を光らす。

早起きした米本氏は、早朝一人、皆を代表して、御嶽神社（御岳山）を参拝（登山）してきたと云い、山田氏は、例によって、朝風呂を楽しむ。

朝食を摂りながら、下山コースを思案。

TVの天気予報は、雨は午前中に止むと予想し、心なしか、時間と共に雨脚も弱まる風に見え、裏参道下山は、何の因果か、これまで2度変更、見送られており、何とか実行したいと思う一方、岩場道の滑りが懸念され、また、小枝の残滴にあえて濡れることもないかと思案が迷走。

最終的には、またまた断念、「大塚山」に立ち寄った後、ケーブルで下山し、御岳駅前の「玉堂美術館」を覗き、最後だけは予定通り、「鳩ノ巣バンガロー」でバーベキューとメンバーに説明し、“そうせい公”の同意を得る。

1階板場で、すっかり乾いた雨衣を再装備し、いよいよ出発。

おととと！ 笑顔の若女将から勘定書きを受け取り、震えを隠して内訳見るや、何とお見事、「登奈利荘」の料金にぴたり同額、縁戚関係ここに見たり！

挨拶に立ち寄ることもなく、「登奈利荘」前を通り過ぎて、御岳ビジターセンター脇から富士峰園地巻道を歩き、いつも休む例の木テーブル先を左に折れ、「大塚山」への登山道に入る。

「大塚山」山頂に着く頃には、雨はすっかり止み、朝靄が消失、辺りは、いつの間にか明るさを増し、心なしか青葉が別色の輝きを見せる。

ただ、蒸し暑さも格段、獲物を見つけたかの様に虫の群が一勢にまとわり付き、メンバーは閉口の限り、準備した「キンカン」でスプレーし捲る。

しばらく山頂に佇んだ後、御岳平へ下る。

ケーブル、バスと乗り継ぎ、御岳駅ひとつ手前のバス停、「払沢」で下車し、案内看板を辿りながら、「玉堂美術館」に入場。

川合玉堂は日本人の“心のふるさと”と云われる「山村」、「農村」風景を描くことにより、日本人の心象原風景を表現する日本画家として知られ、自身長く奥多摩に居住し、「むかしみち」の途中、「数馬峡橋」のたもと等々、奥多摩の至る所に同氏の踏み後が記されている。

静寂に包まれた建物外観とは一変し、館内は人で盛況。

特に年配女性の姿が目立ち、抑制された会話の中にも、熱心な鑑賞振りが伝わる。下絵も多く展示され、予想以上の緻密さに、絵画の原則に変わりなしと感嘆する一方、創作過程が見え透いてしまうのではと下司の勘繰りをする。

一通りの観賞を終え、入口部に設置された玉堂紹介ビデオを見ながら、メンバーの戻りを待ち、傍らの時刻表とも睨めっこ。

玉堂の描く風景を知らぬ世代はどう観るかと思いながら…。

遊歩道を歩いて御岳駅へ、奥多摩行下り電車に乗り、鳩ノ巣へ。

「鳩ノ巣バンガロー」は多摩川/鳩ノ巣渓谷沿いに位置するキャンプ場で、第一回トレッキングの最終立寄地。

その折りは予約がないのを理由に冷たく撃退されたが、今回は予約済み。

女将の、“内のビールは高いから、途中の店で買ってきた方がいいよ！”との指示通り、缶ビールを抱えて急な石坂を下り、管理事務所でバーベキューの食材を受領する。

対応振りから、亭主、女将共、負けず劣らずの太っ腹と見たが、若干、女将が強腕か！

一番奥の、渓谷沿いの屋根付き竈場を占有し、場所の設営、火熾しに取り掛かる。

シェフは野外料理に長けた森氏と自然に決まり、同氏の指導の下、野菜をカットし、オーソドックスなバーベキュー料理の調理を開始。

木ベンチのシーソーでビールがこぼれたりの小騒動あるも、“旨い、旨い”と箸をつつき合い、仕上げの焼そばに溢れるばかりの油が注がれた時に、思わずクリーム入れるも、“旨いから”とシェフは涼しい顔。

鳩ノ巣渓谷は御岳渓谷に比し、遙かに谷が深く、雨に水量を増した多摩川上空は空間を切る様に、「雲仙橋」が峡谷間を繋ぎ、右手に進むと青梅街道、左手に渡ると裏参道にも繋がる登山道。

ポリタン、予備水筒を満タンにし、生け簀の岩魚を見ながら、しばし時を遣り、清算を帰路出発の合図にする。

急坂を登り返して鳩ノ巣駅へ。

ホーム上で、森氏が各自の最短帰宅コースを携帯で検索するが、幾人耳を傾けたやら。

第十七回

日 時：5 / 1 2 (土) ~ / 1 3 (日)

概略行程：

1 日目 白丸駅～数馬の切り通し～数馬峡橋～白丸ダム／魚道～鳩ノ巣小橋～鳩ノ巣パンガロー／昼食～鳩ノ巣駅～御岳駅～滝本～御岳平～ 宿泊／登奈利荘

2 日目 ～長尾平～御岳平～滝本～御岳～御岳ドライブイン／昼食～御岳駅

メンバー：米本、山田、吉川、小林、磯崎～

秋を見送り、新緑の奥多摩を訪問。

会頭は別の所用から、大谷氏は海外ボランティア中から、それぞれ欠席。出席を予定していた森氏も、直前の仕事トラブルにより急遽不参加を余儀なくされる。

また、体調調整中の小林氏は、無理を押し、途中からの参加となる。

初日は、予報通りの清々しい快晴。

待ち合わせの青梅線／白丸駅に一番乗りして、駅のホームが見下ろせる坂上道端に腰掛け、持参のコーヒーを飲みながら、メンバーの到着を待つ。

坂の直ぐ上、左手民家の庭には春の花が、今が盛りとばかりに咲き乱れ、樹々は目に鮮やかな新緑の輝き。とりわけ見事なのは、碧空背景に、一枚一枚が大振りて朱色を塗り立てたばかりの様な薄葉の輝き。(後着した山田氏から、柿の新葉と知らされる)

例によって、イヤ・ホーンからは始まったばかりの“悠々土曜ワイド、「永六輔・その新世界」”が鳴り響く。

先ず姿を現したのは、久し振りの参加となる吉川氏。

例によって、コンパクトにまとめたザックを背負いホームを悠々闊歩。坂上から声を掛けて、驚かす。

次に到着したのは、最も、遠距離地からの参加と思われる山田氏。

切符の回収箱を探す風は案内状の文意が伝わらずか、それとも本意になかったためか、いずれにしても堂々闊歩。

(話を聞くと、両名は同じホリデー快速に乗車し、山田氏が青梅で各停に乗り換えたのに対し、吉川氏は終点奥多摩迄行き、一駅引き返した由。この選択、両者共に間違いはなし)

最後は想定通りの電車(10:09着)で到着した米本氏。

自宅から4時間も掛かった由で、その原因は、川崎駅での南部線乗換を見送ってしまい、東京経由になってしまったためと云うが、**見送った理由については口をもごもご、明確には語らず。**

揃ったメンバーに森氏の急な欠席と、小林氏が昼食地ノ鳩ノ巣ガーデンで合流する旨を伝え、最初の訪問地、「数馬の切り通し」へと急坂の続きを上る。

久し振りの再会に、息を継ぎながらの、互いの近況話に花が咲くが、舗装路を外れ、「溪山窯」前の土道を抜けて静かな山中に入る頃には、絵の具を塗りばめた様な新緑を愛でたり、樹間に洩れる陽光に喜んだりと、すっかりハイキングモード一色。

駅から約10分で「数馬の切り通し」に到着。

鳩ノ巣から氷川（奥多摩）に抜ける道を確保するため、大岩をツルハシとゲンノウで切り開いたもので、幅は約1m、奥行き約2m、高さ約3m程度の切り通し。

江戸中期迄主要道として利用されたようだが、現在は途中で行き止まりとなり、代わって下方多摩川沿いに青梅街道が走り、岩盤部は白丸トンネルで抜ける。

薄暗い林間から眺める「切り通し」の向こうには、一転、広葉樹の森が拡がり、陽光が新緑を明るく照らす。これを見たメンバーはご自慢の高級デジカメをおもむるに取り出して、カシャッ、カシャッと初操作。

と同時に、吉川氏の携帯電話が鳴り響き、青梅駅に着いた小林氏から待ち合わせ時間の確認電話。

静寂の山中で、エレクトロニクス技術の凄まじさを実感させられる。

道を戻り、途中の木階段を下って、山小屋風に造作された、手作り味噌の「四季の家」裏手を抜け、更に、青梅街道を渡って数馬峡橋へと一挙に歩き、橋の袂に立てられた川合玉堂、田山花袋、山田早苗の歌碑を案内し、しばし佇む。

いつも思うが、余りの達筆に折角の奥多摩賛歌も判読出来ず。未熟者と片付けるには何とも勿体なく、何か工夫はないものであろうか？

多摩川ノ鳩ノ巣溪谷橋上へとメンバーを誘う。

眼前には、両岸から斑模様の新緑が萌え広がり、眼下の濃紺、明鏡止水の川面を包むように春絶景、メンバーからは思わず溜息が洩れる。

無粋と叱責されても、一言云わねば。

渓流が滞留している不思議さを指摘し、その理由は下流直ぐ先に、「白丸ダム」があり、眼下に拡がる水面は云わば「白丸湖」と説明するや、アレレッ、帽子が、帽子が風で...！

宙を舞い舞い、風留め付き布地丸帽が、遙か下方の川面に向かって浮遊しながら降下。

「白丸湖」でカヌーを漕ぐ若者が数組居り、彼らに拾ってもらってはと勧める人もいるが、さほど未練ある物でもなく、代わりに、首に巻いたタオルを頭に被って、きりりと結ぶ。

橋を渡って右岸沿いに、「鳩ノ巣溪谷遊歩道」を歩く予定であったが、過日の崩落事故で、現在、通行禁止中、(事前訪問で承知済み)メンバーに事情を伝えて、左岸側、青梅街道を歩くと宣言し、数馬峡橋を後にする。

【余談49】奥多摩トレッキングのベースは「多摩川」を巡るトレースでもある。

多摩川は雲取山の南西、埼玉、山梨両県にまたがる「笠取山 1,953m」を源流とし、奥多摩湖、氷川、鳩ノ巣、御岳の各溪谷を経、途中、秋川とも合流し、羽村取水堰、府中、調布を抜け、東京湾迄の滔々たる流れ。

烏森トレッキングでは奥多摩湖、むかしみち、氷川キャンプ場、鳩ノ巣溪谷、御岳溪谷、秋川溪谷、秋川橋河川公園等で触れ合っている。

なお、右岸、左岸の呼称は川上から見て決められる。

この辺り、青梅街道とは云え、道幅狭小、車輛、オートバイ、サイクリング車、ハイカーが行き交うが、向かい先は奥多摩氷川方面に集中し、我々とは逆方向、さながら、朝の通勤ラッシュ時に下り電車に乗るような雰囲気、誠に複雑な風景。

それでも、白いガードの右側、多摩川左岸沿いを縦一列に並んで歩き、途中、山田氏から岸辺に繁茂する樹々種の説明を受け、時折、川向こうに見え隠れする溪谷遊歩道を遠差しして、“本来はあの道を歩く予定であったのに...”と、弁明を繰り返す。

約20分で、街道から少し外れた川沿いの広場に到着。

駐車場とトイレが設けられ、その奥には白丸魚道管理棟が建ち、更に、右手の階段を下ると白丸のダム堤。

まずは魚道の見学と、フェンス扉がオープンされた小さな建物施設に入場し、ループ状の鉄階段を下って、水路を敷く地階フロアーに降り立つ。

【余談50】魚道は文字通り、魚のための道で、遡上時、堰堤、ダム等の大障害を乗り越えるための専用水路である。

魚道そのものは多摩川下流、「二ヶ領宿河原堰堤」等で承知しており、水量次第ではあるが、晴天下、遡上する魚が必死に飛び跳ねる様を觀て感心している。

ただ、それらの施設は堰堤と一体で造られており、案内に気付かぬ人も多々居ると思われるが、それに対し白丸魚道は後工事のためか、ダム堤を迂回する大掛かりなもので、施

設内部の関心から、前々から一度訪ねて見たかった建物である。

しかし、立ち寄る時間が早朝と云うこともあり、いつも閉館され、閉館日、閉館時間の案内もなされておらず、これまで見学する機会がなかったが、今回は奥多摩町観光産業課に架電し、当日の営業と11:00からの閉館を知り、やっと訪問が実現した。

「白丸魚道」は平成12年完工で、ダム堤の下流側手前左岸をジグザグにコンクリートスロープで上り、ダム脇を迂回して白丸湖に繋がる。

水路幅は2m弱、遡上する魚の休憩ゾーンとして、ここでも中央部にコンクリート壁を立てている。

しかし、魚生息環境のためか、水路の周辺は何とも薄暗く、慣れた眼にも数匹の小さな魚影を認めるのが精一杯、若干の期待外れに、“大層な施設なこと”と、つい愚痴を漏らす。

白丸湖への水路出口を確認し、ダム堤へと鉄梯子下る。

上流側眼前にはゴミの滞留した湖面が漂い、下流側遙か下方には岩の渓谷と魚道入口コンクリートスロープを遠望、ここでもパチリ、パチリとカメラの連射音。

堤を渡って、ここで遊歩道と合流。

右手、数馬峡橋方面への道はロープ閉鎖され、左手、下流沿いの右岸道にシフトし、やっと鳩ノ巣渓谷遊歩道に入る。

間無く、木テーブルを設置する休憩所に到着、早くも小休止。

湯沸かしを求める声もあるが、鳩ノ巣ガーデンは近く、小林氏もそろそろ到着する時刻と説明し、早々に出発。

渓谷岩場への急な石段を下る途中、後詰めの山田氏から厳しいレクチャーひとつ。

“正面を見据え、背筋を立てて、そのまま前に脚を運ぶ吉川氏の石段下りは教科書通りの百点満点、それに引き換え、横を向いて、石段と平行に脚を降ろす先頭の御仁は危険極まりない駄目な歩きの典型例”と！

とは仰いますが、私も、もう若くはありません。腰と膝にはサポーター、足を踏み外してしまうと、最早、ヒラリと着地する自信はありません。...こんな急階段怖いですよ！

鉄柵でガードされた岩場に、全員、無事降り立つ。

渓谷上流を見上げ、さきほど見下ろしたばかりの魚道スロープを仰ぐ。

すっかり透明色に戻った溪流が岩だらけの渓谷を縫う様に流れ落ち、待ち受ける大岩に激突して飛沫を上げたり、淵に流れ込んで渦を巻いたり白色混濁模様。

遊歩道と云うには、若干、荒れてはいるが、途中、溪流釣りを楽しむ人の魚籠を探したり、鳩ノ巣から上って来るアベックとエールを交わしたりし、岩場続きの道を慎重に下る。前方上部に「鳩ノ巣小橋」が現れ、鳩ノ巣に到着したことをメンバーに告げる。

橋を渡ると陶磁器店を併営する小さな喫茶店や画廊、更には、食事ができて売店も置く宿屋が並び、この辺りは鳩ノ巣の行楽ゾーン。

神社を祭った小山下に立て掛けられた案内板が、江戸大火の後、家屋再建用の木材集積地となり、その飯場に鳩が巣作りしたことから現在の地名になったと説明する。

急坂を一旦青梅街道まで上り、橋の脇から、「鳩ノ巣ガーデンキャンプ場」への急坂を下り直し、管理人小屋の前で小林氏と合流。

昨秋と同じ、一番奥の屋根付き調理場を選び、木テーブル、木ベンチに荷を降ろす。**無論、直ぐにギッタンパッコンする不安定さは承知しており、慎重にバランスを図る。**

奥のテーブルでは、先着女性陣がパーベキューを調理中。いやはや姦しいこと！

ザックを開いて、秘匿していた本日のメニューを披露。

木テーブル上に、「蕎麦束」、「海苔」、「薬味（葱、生姜）」、「めんつゆ」、「ゴマ」、「トマト」を並べ、ずばり、昼のメニューは手軽であっさり、「ざる蕎麦」で一本勝負！

早速、各自段取りに掛かり、吉川氏は竈の火熾しを、山田氏他は調理器具、水の手配に、幹事は「トマト」の冷やしに走る。

想定外は缶ビールの購入に管理人小屋に向かった某氏の疾走。

折角前回、“うちのビールは法外だからねえー、飲むんなら、来る途中で買って来た方がいいよ！”と、女将から貴重なアドバイスを受けていたにもかかわらず...、買うなら買うで、ひと登りして青梅街道沿いの店まで行って...、そんな元気がある訳ないか！

麺を茹でるだけとは云え、メンバーの中には様式美を大事にする御仁や、空きっ腹にアルコールが効いた御仁も居り、例によって擦った揉んだで調理が進行。

それでも箆に盛られた蕎麦が中央に据えられ、各自の手元につゆ小鉢（コーヒー・カップ、プラスチック製メンバーズ・カップ、魔法瓶のキャップ他）が整うと準備は完了、“いただきます”の声が出揃う前に、割り箸、個人箸が入り乱れ、旨い旨いと一挙に平らげられ、本音かどうか、味量共に完璧であったと自讃し合う。

食後のデザートに溪流で冷やしたトマトを嚙りながら、昼食代を精算。

「氷川」、「秋川橋」、「十里木」と炊さんの回を重ねたが、何と云っても、ここでの自炊が最も割安とメンバーの意見が一致し、爪楊枝を加える。

風薫る5月の午後、新緑に包まれ、水豊かな多摩川鳩ノ巣渓谷河辺で、しばし休息する。

視線の正面先には「雲仙橋」が溪谷断崖間を繋ぎ、その背に広がる青空は、早、夏の色。

御岳に移動し、ケーブルで山上へ。

いつもの大塚山分岐への道は取らず、表参道を直進して、早々に本日の宿 / 登奈利荘に入場。

“お久しぶりです”と、女将に三つ指ついて迎えられ、いつもの階上右手の部屋に荷を降ろす。勝手を知った定宿に、手順通りに硝子戸を全開して緑の風を取り込み、テレビを付けて天気予報を睨んだり衣服をベランダに干したりして、最後は御岳山の銘菓、「山の呼び声」をお茶請けに、緑茶を飲んで先ずは一服。

初めての小林氏は別として、メンバーの荷を置く場所が毎回同じゾーンであることに気付き、つい苦笑い。

まだまだ明るい山上の夕、宴迄の時間をテレビで大相撲を見たり、ザックを整理したり、風呂に入ったりと各自各様に過ごす。

宴は、いつもの1階大広間。

馳走を前に、楽しい宴の始まりは、いつものようにビールで乾杯！

改めて挨拶する女将と旧交を暖め、例の旅番組出演をからかうと、“お互い様ですから”とさりとかわし、それ以上は取り合わず。

おやっ、変ですよ？

ビールが、料理が、旨くないんです！

どうしたんでしょう？ あれっ、まあ！？

...皆様、誠に申し訳ありませんが、失礼して、一寸、休ませていただきます。

退席し部屋に戻ると、ちょうど息子が寝床を述べている最中で、片隅の布団に潜り込んでボタンキュー。

微かな人声に眼を覚まし、二次会と気付き勇躍加わるも、直ぐにダウンして、再び寝床に戻り、静かに(?)眠る。

翌朝も晴れ。

いつものように、米本氏は早朝の「日の出山」に登り、山田氏は朝風呂で汗を流しと相変わらず気力、体力十二分のご両人。

何とか体調も回復に向かい、少量ながら、朝食も摂る。

未定であった本日の行程を相談すると、例によって「そうせい侯」、**具体的、積極的な意見は出ずで**、取りあえず長尾平に向かうことにする。

大事を取って先に下山する小林氏と宿の前で別れ、急坂の表参道を御獄神社へと歩く。

広葉樹の林 / 長尾平は、何とも爽やかな初夏の候、生い茂る青葉に包まれ、五月の風が樹間を渡る。

先端の展望台迄歩き、四阿屋石垣下の平地、いつもの中程木テーブルに荷を降ろし、お湯も沸かさず、山上の朝をゆったりと堪能する。(いや沸かしたかな? 何しろ、あれ以降の記憶はおぼろで...)

メンバーには懐かしい'70代のテープ音楽を流すも、何故か音に雑音が混じり今一つ、体調の悪さを示すかごとくで、早々にスイッチをオフ。

南西に霞む「日の出山」山頂に人影を探して見たり、昔の思い出に話を咲かせて、しばし談笑。

話の区切りに、強さを増す陽射に木陰を求めて樹下(以前、漆の木が生えていた辺り)に移動し、草むらに寝転ぶや、いつの間にやら、またスヤスヤと眠る。

暑気と虫の羽音に眼を覚まして周囲を見回すと、全員木テーブルを離れて思い思いの場所で休息中。

再び木テーブルに集まり、何の合図もなく、早、下山の荷造りを始め、参道を戻って御岳平からケーブルで下山、滝本からバスで御岳駅へ。

昼食をとるメンバーの求めに、始めて、京王電鉄経営の、駅前、「御岳ドライブイン」2階に入場し、御岳溪谷が一望できる窓際に座る。

何とも驚いたのは、メンバーが頼んだメニューは全員「ざる蕎麦」。

その後、米本、山田両氏が「カツカレー」にオーダー変更したものの、次回以降の参考にと手帳にメモして、一人冷水を飲む。

駅前バス停で、これから御岳山に向かう人の並びを見、若干、早過ぎるかなと惜別しながら、御岳駅への石段を上る。

(後日、原因が風邪引きであったことが判明。メンバーに改めて詫び、次回からの体調管理を誓う)

第十八回

日 時: '07.12月1日(土)~12月2日(日)

概略行程:

1日目 伊勢原駅~大山ケーブル駅~追分~下社~二重滝~見晴台(770m 食事)
~下社~追分~ 宿泊/旅館ますだ

2日目 ~社務所入口~伊勢原駅~秦野駅~震生湖~秦野駅

メンバー: 山田、吉川、小林、磯崎

9月の熱風猛暑が続く中、今年の紅葉は日照時間に恵まれて色付き鮮やかと云われ、行き先には迷うが、早い時期から、秋の山歩きは“紅葉狩り”と決める。

ただ、10月に入ると急に冷え込みが厳しくなり、色付く前にくすんでしまうのではとの懸念も伝わるが、今更変えられるかと猪突猛進、鳥森会では初めての「丹沢」を案内する。

【余談51】神奈川県西部に広がる丹沢山塊はアルペン登山入門の山と云われ、多くの愛好家に親しまれている。

山群の標高そのものは2,000mにも届かないが、山塊は大きく、急峻な尾根道は展望に優れ、アルペン登山を十分に堪能させてくれる山容である。

しかし、その一方で、山深いがため、バス停から山麓までのアプローチが長く(1時間前後)また、山そのものの崩落現象から赤土の尾根は細り、緑が少なく危険なのが中高年ハイカーの訪問を躊躇させる要因にもなっている。

米本氏は所用で、森氏は仕事の調整が付かず欠席。

早朝の小田急/伊勢原駅に山田、吉川、小林氏の順に到着し、愛妻弁当持参のY氏を除き、各自、駅頭で弁当を整え、勇躍、大山ケーブル下り行き臨時バスに乗り込む。

車内は現在が紅葉の盛りとばかりに満員御礼。

「社務局入口」バス停が近づき、窓外に目を凝らすと、道の右手に、本日の宿、「旅館 ますだ」の駐車場看板を見つける。

人で溢れ返る大山山麓は紅葉に燃え、踏みしめ歩く駒の参道脇では、「柿」や「柚子」等、秋の実りが並べられ、嬉しくて、ついほくそ笑む。

運よくケーブル・カーには直ぐに乗車でき、瞬く間に下社に到着、早、大山登山の1/2強を終える。

生憎の天候に、伊勢原、秦野の市街や相模灘の展望は今一つであるが、下社のモミジは見事な紅葉鮮色を披露し、辺りにシャッター音が絶え間なし。

白く輝く石段を上り、阿夫利神社下社に参拝。大山の宮水をガイドするも、意外やメンバーの関心は薄く、拍子抜け。

【余談52】前述した通り、山の岩清水には眼がない。生で飲むなど注意書きしてあっても、問答無用で、ゴクツ、ゴクツと喉を鳴らして痛飲する。

あえて好みを云えば、水量豊かで、人の立ち入りが少ない深山の水場。バックを放り投げ、独り占めして、頭から水をかぶり、洗顔、痛飲三昧。

各山、各所に水場を見つけるが、お気に入りには奥多摩/川苔山山頂下、白岩の滝上水場

である。

売店脇を下り、見晴らし台への山道に降り立つ。

谷を巻くように歩き、左手に二重滝を見遣りながら、なだらかな山道を登る。今回の山歩きでは最も急進な上り坂を、“ひいふう、ひいふう”合唱しながら、なんとか到達、一挙に展望が開く。

見晴らし台は人の波。西正面に座す大山（1、251.7m）は雲に山頂を隠すが、遠くに大山三峰（934.6m）が幽かに山容を表わす。嘗て急坂に転倒したことはおくびにも出さず。

運良く、中程の木テーブルが空き、早速、荷を降ろす。

スケジュールでは、早、昼食タイム。いつものように、「カップヌードル・ビッグ」を取り出し、他のメンバーには徳用味噌汁を配って湯を沸かす。

賑わう周囲の声に、負けてはならじとばかりに大声張り上げ、互いの近況を語り合うが、近年、健康話が富に増えるは自然の成り行きと云うべきか。

昼時を過ぎると、いつの間にか辺りは静かになり、心地良い微風についまどろむが、こら辺りでと背筋を伸ばして秘話の公開、さあ聞いとくれ！

“いや、いや、今回の宿探しには何とも難渋しました”

“何しろ、適当なガイド書もありませんので、図書館で大山地区の宿ガイド一覧表を借りてきましたが、住所はすべて大山 番地表記のため、地図を見ても所在場所がまったく解らず、どこを選んで良いものやら、まったく見当が付きませんでした”

“そこで、ええいままよ、とばかりに若い地番に架電してみました。すべて満員御礼であるばかりか、中には、「大将、紅葉が盛りのこの時期、今頃申し込んでもそりゃ無理と云うもんだよ！」と冷たくあしらう所もあり、最初の内こそ、今が盛りかと、ほくそ笑んでおりましたが、3軒も断られて、前述の様に突き放されてしまいますと、ついつい弱気になりまして、「いまの時期、丹沢は無理なのか」、「今回のトレッキングは諦めるか」と、ついついしょぼくれてしまいました”

“それでもメンバーの輝く眼の輝きを思い起こしまして、「多少遠くても」とか、「ここで断られたら」と大山922番地に電話を入れますと、何と、「ご用意出来ます」と、少し低いトーンでの応接をいただき、場所を訊ねますと、「バス停社務所入口下車直ぐです」と有無を云わせぬ応答を受けてしまい、社務所なら阿夫利にも、さほど遠くはなかるうとついつい予約をしてしまい、後で、地図で社務所を探す始末でした”

“2日前の木曜日に、最終の人員を連絡しますと、相変わらずの低い声で、「解りました」との渋い返事を受け、何となく社務所とケーブル駅との距離が離れていく思いでした”

“ところがどっこい、いえいえ、ところがです、前日夜、女将さんから電話をいただきました。何とも美しい日本語で！”

「今般の当館ご利用、誠に有難うございます。御懸念に在りました当方への御足の件でございますが、当方関係先に申しつけまして、お送り申し上げるよう段取り致しました」「お登りになる道中に、「塚本土産店」なるお店がございますので、どうかお声をお掛け下さいませ。お互い助け合っている仲ですので、御遠慮は御無用に願います。明日は晴れそうでございます。お会いするのが楽しみでございます」

“ところがです、「塚本土産店」なるお店がどこに在るのが解りません。参道途中の土産店の中か、あるいはケーブルを上った後の下社の近辺か、そうかと云って、こんな楽しい話を事前に漏らす訳にもいきません。止む無く割引になるケーブル往復切符も利用せず、ここまで来ましたが、皆様はどう思われますか？”

意外や、メンバーは興味を示さず、白けた様子で、拍子抜け。やむなく下山の準備に取り掛かり、振り向いた大山山頂の雲が去り、“あれ！大山のてっぺんが”と話題を逸らすのが精一杯。

来た道を戻る途中、小林氏が木の根に足を取られて転倒するも、山田氏の機敏な対応に助けられて大過なし。同氏のパワーには敬服するばかり。

下社に戻り、神社下の見事な紅葉を背景に皆でデジカメ！

かつて活躍した我がアナログカメラは今日もザックベルトにセットされたままで出番はなし。

【余談53】カメラのデジタル化移行スピードには何とも驚いた。

すべては技術革新の凄さで、プリント印刷技術の平準化等、アナログ写真が有す優位性をあっと云う間に克服し、デジタル一眼レフの登場により、いとも簡単にアナログ山を寄り切ってしまった。

未だデジカメを手にしないのは、余りに合理的過ぎるからであると、また、云いわけをする。

「塚本土産店」はケーブル下の参道上手に位置し、直ぐに見つかる。

店の女に女将の言を伝えるや、何故か要領得ずして、迷惑そうな対応振り。何とも不愉快で嫌なら結構とも思うが、取りあえずはお茶をと薦められ、店内の立派な木テーブルに荷を降ろす。

その間に、「柿」と「柚子」を買い求めんと石段を駆け下るが、計算違いで参道入り口ま

で下る羽目になってしまい、何ともはや…。

結論的には、店主らしき男性に送ってもらうが、ジレンマにあるのか愛想はなく、口数も少なし。

「ますだ」は大山街道脇の脇道を上って直ぐの、周囲を雑木と竹林に囲まれた山麓の宿。小田急協力店の看板が宿の格を語り、造りに雅やかさを示すものの、すっかり世俗を抜け出した様な、ひっそりとした佇み。

気取らない女将と如才ない年配女性に迎えられ、玄関階上の部屋に荷を降ろす。

差し出された宿帳につい緊張するが、年も隠さず丁寧に記帳するは、まさに当館の迫力と云うべきか。

泊り客は我々だけか、宿全体が静寂に包まれ、竹林を抜ける風が涼を誘う。

あれ！ 何とも嬉や、自室での宴。烏森会では初めてではないかと記憶を手繰るも、千葉はどうであったかと思い起こすも、定かにあらず。

宴の仕切り役は先ほどの年配女性。聞き上手な上に話上手で、艶話を含めて、あらゆるジャンルに応じ、見事の間を取り持つ。

柚子入りポンズで云々と言いながら、彩豊かな小鉢群の中に大山名物、「湯豆腐」が見当たらずと云う輩も居るが、こまかい、こまかいと、つい云い放つ不思議な雰囲気。

途中、女将が挨拶に登場し、一瞬緊張。

主に台所を担当していると云い繕うが、電話での印象とは異なり、物静かで温厚そうな女性で、密かに思い込みを正す。

笑満ち溢れる宴が続くが、秋の夜長はあっと云う間に更け、皆が寝入ったのは2：30 AM頃、心地良い一日の終了。

翌朝、7時を回っても誰一人起きる気配なし。

一人、寝ぼけ眼でカーテンを引くと、窓外は明るい秋の朝。眼前に広がる竹林に、まるで葉音が聞こえるかの様に、枯葉が舞い散り、思わず雨戸を開いて耳を傾けるが、風の音すら聞こえず。

堆高く盛られた地表の枯葉に、ザクツザクツと踏みしめる音を思いながら、丹沢の秋の終わりを知る。

朝食には湯豆腐が並べられ、一声発して、ボリューム感溢れるメニューを平らげる。

未定であった本日の行程として、関東大震災により出来た日本一新しい自然湖、秦野の「震生湖」行きを提案するが、吉川、小林の両氏は、早、自宅に帰るコースを詮議しており、聞く耳を持たず。

宿を発ち、社務所入口バス停から伊勢原駅へ。

車中には通勤、通学の地元人が乗り込み、途中、擦れ違うバスには丹沢の秋を訪れるハイカー達、やれ、何とももったいなや！

伊勢原駅と繋がるビル階上の喫茶店に入り、しばし歓談。話題は専ら、「旅館 ますだ」の評価で、良宿であったと褒め讃える。

意志の固い両名と別れ、丹沢登山の拠点駅、秦野駅に移動。

改札口前のコンビニで昼食弁当を購入し、準備は万端、いざや向かわんとバス停に向かうが、便数の少ないバスは出たばかり。止む無く、駅近くの名水、「弘法の里湯」を汲みに行き、後の移動はタクシーを奮発する。

小高い丘上に現れた「震生湖」は周囲1kmの小さな湖。

ヘラブナ始め約12種の魚類が生息すると云う、湖畔の至る所に釣り人の姿が見られ、まるで雨が降るかのように落葉舞い散る湖面に糸を垂らす。

紅葉はここでも見事に照り輝き、抜ける青空を背景に、秋色を十分に堪能する。

途中、親子で耕作中の畑地納屋片隅を借りて、湯を沸かして昼食を摂る。

午後は断層後を訪ねようと歩き回るが、人に訊ねても、案内看板を見ても終に解らず、辿り着いた丘上から秦野市街を眺め、これなら歩いても行けると帰りのバス時刻チェックを無駄にして、坂道を下る。

ぶらぶら歩きで、駅まで約25分。

奥多摩/青梅線に比し、駅からの便至便な小田急線に乗り込み、今回のトレッキングも無事終了。山田氏は厚木で下車し、八高線に乗り換える。

第十九回

日時：'08.5/31(土)～6/1(日)

概略行程：

1日目 野上駅～埼玉伝統工芸会館～美の山～宝登山神社

宿泊/民宿 やなぎや

2日目 ～宿～ケーブル駅～宝登山(497m)～宝登山神社～長瀬ライン下り～岩畳
～長瀬駅

メンバー：米本、吉川、小林、磯崎

行き先を初めて埼玉県とし、奥多摩の北部、奥武蔵を選ぶ。

今回は山田氏と森氏が欠席し、米本氏は大宮での社行事参加のため夕刻からの合流となる。天気予報は週初めから芳しくないばかりか、日々、傘マークが拡がり、とどめは前日の、女将からの電話、“明日の秩父は雨ですよ”と、とどめを刺す。

待ち合せ場所は秩父鉄道／野上駅。

雨足が強くなったり、弱くなったりする中、雨二モ負ケズ、風二モ負ケズと、先発精鋭3名が思い思いの方角から集まる。

先着は小林氏。何とワゴン車で乗り付けての参加は前代未門。

間なく下り電車が到着し、吉川氏も姿を現わす。

【余談54】 今回の待ち合せ場所／野上駅は秩父鉄道の途中駅で、JR熊谷駅、西武鉄道秩父駅、東武鉄道寄居駅経由の3コースを案内した。

時間を選ぶか、コストを選ぶか、それとも車窓風景を選ぶか、中々決め難いと思ったが、結論は簡単、乗り換えの少ない、解り易いコースが選ばれたようである。

三人が揃い、二人がワゴン車に乗り込むや、直ちに発進。

予定の長瀬アルプスには鼻っから登る気はなく、下調べをしたと云う和紙のふるさと、小川町「埼玉伝統工芸会館」に車は向かう。

無論、メンバーからは何ら異議は出ず。

若干、道に迷うが、その間の奥武蔵ドライブがまた楽しい。

会館に到着した頃には雨も小降りになり、周囲の風景も、やや明るさを増す。

和風造りの建物は比較的新しく、広い敷地内には道の駅、「おがわまち」を併設、9時半からの開館に、早、何組かの来館者の姿を見掛け、道の駅の効果を知る。

300円の入場料を支払い入館。

手工芸品と切絵を楽しんだ後、いよいよ紙漉きに挑戦。吉川、小林両氏がハガキ大8枚組に挑戦する大胆を発揮するのに対し、花葉入り1枚紙の制作を選び、女性係員の助けを借りながら厚手の和紙を漉く。

1週間後に郵送してくれると云う結果や如何。

途中、米本氏から電話が入り、今なお横浜に在宅し、これからこちらに向かうとの由。本日の行事は雨で中止になったとのことであるが、“中止は昨日の内に決まっていたのでは”と、誰かが呟くと、“いやいや、今朝になってでしょう”と、誰かが庇う。

【余談55】今回初めて和紙を漉く体験機会を得たが悪くはない。次なる目標として、木工加工、陶磁器制作、炭焼き、蕎麦打ち等にも挑戦してみたい。

昼食地は長瀬の南、車で登れる美の山（蓑山 587m）をターゲットにし、国道140号線を再び戻る。何とも機動力に溢れるが、これで良いものであろうかと、何かを頭を掠める。

山頂近くに車を止め、雨を避けて展示館内のベンチに食卓を作る。

今回初めてウイナー炒めを披露するが、食欲旺盛なメンバーには至って好評。小川町駅前コンビニで購入した弁当とカップ・ヌードル・ビッグで昼食。

食後のコーヒーを楽しみ、後から駆け付けた団体さんにベンチを譲り、“ごゆっくり”と云いながら堂々退場。

周囲を包む紫陽花が雨に濡れて何とも鮮やか。

早、本日の宿泊地、長瀬に到着。

宝登山神社の境内に車を止め、玉砂利を踏みながら、雨も厭わずしばし散策。ロープウェイ駅にも足を伸ばして、奥武蔵の春夏境目を目撃、満喫する。

行場を失い（？）若干、早くはあるが、神社近くの「民宿 やなぎや」に入る。

かつての手広い営業を忍ばせるかの様に、店頭ウインドーには雉や鳥獣の剥製が飾られ、広い土間には大きな木テーブルが据えられる。

奥の方から、体の不自由な亭主まで顔を出してくれて、老夫婦が大歓迎。

頂戴したコピー資料によると、同氏は30年も運送業を経営していた他、12代も続くハンター一族で、国鳥である雉の保護に尽力してきた由。

当店で雉肉が提供できるのは、山に放した後の残鳥処理を任されているためとのことである。

お茶を供されて、秩父の話を聞きながら、しばし休息。

途中で米本氏が合流し、時間を見計らい階上に上る。

夕餉は女将の独演会。

秩父は武甲山（1,295m 日本200名山）の、山肌を削り取られた醜い姿に表象されるように、かつてはセメント産業が栄えた地である。

現在、同事業も他所に移り、もう一方の観光産業は、皮肉なことではあるが、交通の利便化が日帰り旅行を可能にし、旅館業には厳しい営業環境下にあると云う。

女将の話術は巧みであるが、余りの長さにも辟易、話を聞き流すようにビールを飲み乾し、視線を外してしまう。

とは云え、同女は善女、予約時、“近くに交番があるが、あんた等大丈夫だよ”とユーモアを發揮し、前日の架電は、“悪天候に中止になるのを心配して”、と正直な心根を吐露してくれる。

部屋に戻り、焼酎による2次会開始。回を重ねる毎に、酒量が落ちるのは止むなし。

翌朝は一転、太陽と青空が顔を出し、好天満々。

早朝の長瀬駅まで下駄を鳴らして歩く。駅の周辺には、かつての賑わい振りの面影が十分、立派な看板で商店街を案内する。

眼を凝らして見ると、嗚呼、正直なるかな、旅館3店に消去線が引かれる。

旨い朝食を平らげ、“いざ登らん宝登山に”と、リュックを背負うと、女将が奥に走り、取って返して、厚誼に感謝とワインの差し入れ。有り難く頂戴し、別れを告げる。

清々しい朝の参道を歩く途中、うどん屋のお姉さんから“御帰り時には是非ご利用下さい”と、割引券を貰い、その直後に、開店前の別の料理店を指さし、“昼食に、「流し素麺」何ぞは如何”と云うは不義理が過ぎるが、昨日来の話にて勘弁願う。

参道の途中を左に折れ、急坂を上ってケーブル駅へ。予定通り、9:40分発の始発ケーブル・カーに乗車。

山頂駅は要塞にも似て、周りをコンクリート壁で囲まれる。

南面に武甲山を探すが、壁に沿う様に植えられた樹々が視界を遮り、見えず。石灰掘削のため、山肌を削られた醜さを隠すかの様に。

周囲は若い家族連れ等、人で溢れ、ケーブル・カーにそんな収容能力があったかと頭を混乱させていると、前方の広い登山道から、汗を拭き拭き登って来る人の行列を見て、彼ら以上の重装備である我が身を振り返って、つい苦笑い。

梅園の道から山頂を目指し、額には、早、緊張の汗。

急坂続きの山道を踏破し、途中、奥の院に足を延ばす。火を焚く女官に挨拶し、かつて日本武尊を火災から救ったと云う狼像の頭を撫でるが、この話、奥多摩の山でも聞いたことあり。

頂上は近いぞ！

山麓からは徒歩50分、山頂駅からは同8分の山頂に到着。

疎林に囲まれ、静寂に包まれた山頂からは南面に展望が開け、前方左手には独立峰武甲山が恥じかしげに痛々しい山肌を見せる。

心地良い涼風を受けながら、据えられたベンチで、しばし休憩。

何故か、ここまで訪れる人は少なく、望遠鏡を操作する人、持参した小椅子に腰掛けて絵筆を握る人等、数名の姿を散見する程度で、ケーブル駅とは妙なる対照。

右手前方の暗い樹間から登山者が姿を見せ、当初予定した長瀬アルプスからの縦走者ではと周辺に眼を凝らすも、標識らしきものは見当たらず。

“ コーヒー何ぞを ” と思うが、眼の前に立て掛けられた「火器使用厳禁」看板が睨むため、移動を決めて席を立つ。

少し下ると、「奥の院」への道を分ける尾根路脇に大きな岩石を見つけて荷を降ろす。

早速、湯を沸かしていると、後ろの方で、自信たっぷりに道案内するメンバーの声、“**こっちは山頂へ、あっちは奥の院行きだ、遠回りになっちゃうが、山頂にも行けるよ**”。

コーヒーと紅茶を楽しみ、しばし歓談。

ケーブル・カーを降り、宝登神社廻りで参道を下る。

昼食「流し素麺」は店内テーブルを回転しての小仕掛けなものであることが判明したのと、時間が早いこともあり見送る。

途中、米本氏が昨日立ち寄ったと云う、旧新井家住宅と郷土資料館に向かう。

館の南側に1万㎡の花苑口が拡がり、多くの人々が、何の言葉も発することなく静かに見入る。

視線の先には可憐な「ハナビシソウ」の花が風にそよぎ、我がメンバーも、内部には入ることなく、しばし佇む。

次なるプログラムは今回のメインイベントのひとつ、「長瀬ライン下り」。

乗船時間約30分のハーフコース(3km)を選び、13:00発の専用バスに乗車し、出発点の親鼻橋に向かう。

意外なるか、乗船場は荒れた河原に無造作に設けられ、何ともあっけなし。

先に下船する人は後から乗船するようにと指示され、船首側左舷側に座るが、これは幸運、迫力に恵まれると喜びはしゃぎ、水除けのビニール・シートを左肩に掲げる。

漕ぎ手は二人で、ガイド役を兼ねる若手が船首に立ち、ベテランが船尾に回るが、実質的には後者のコントロール下に置かれると後で聞く。

前日の雨に水嵩が増し、本日のハーフコースは10分短縮されて、所要時間約20分と案内され、水流の凄まじさを知るも、スタートするや、予想以上のハイスピード。

コース兩岸には切立った岩壁が立ち並び、岩の隙間には松の木が逞しく根を張り、水墨

画を観るかのような見事な景観を醸し出す。

大雨時には、あの高さまで水深が昇ると説明し、所々に残るその形跡を指し示す。荒川上流にダム在りや否やと思考するが、それにしてもあの高さまで達するとは…。

コース途中、自然の急流コースを回避し、人工路を迂回しながら慎重に進む判断は、誠に天晴れと拍手する。

興奮めは、どうやって辿り着いたか、やや低い左岸岩壁にへばり付き、釣り糸を垂らす多くの太公望、どちらが観光しているのやら…。

驚いたのは、三脚をセットし、岩上で待ち構えるカメラマン、後日、写真を郵送すると云うが、我がメンバーに申し込む人はなし。

駅の東手、岩畳近くの間差点で下船し、待ちかまえる次の30分乗船客と交替する。

人で混み合う土産店の通りを抜け、駅近くの蕎麦屋に入り昼食。初夏の汗ばみに、笹そばが人気を集める。

食後、再び岩畳に戻り散歩を楽しむ。岩場の大きさは誠に立派であるが、歩き難さ、ゴミ捨てによる汚れは半端でなく、「彩の国 埼玉」は何処にと嘆く。

車を駐車している「やなぎや」に戻り、帰途に向かう。

途中、東武東上線 / 小川町駅で降りてもらい、メンバーに別れを告げる。

第二十回

日 時：'08.12/6(土)～12/7(日)

概略行程：

1日目 西立川駅～国営昭和記念公園～西立川駅～相模湖駅～相模湖公園～弁天島～
宿泊 / 弁天島温泉 天下茶屋

2日目 ～千木良バス停～高尾山口～清滝ケーブル駅～高尾山駅～薬王院～高尾山～モ
ミジ台(昼食)～高尾山駅～清滝ケーブル駅～トリックアート美術館～高尾山
口

メンバー：山田、吉川、小林、磯崎

青梅線西立川駅での待合せ時間は9：30AM集合と、いつもよりはのんびりと。

晴天下、先着は吉川、山田の両氏で、小林氏も定刻に到着。大谷氏の欠席葉書を回覧しながら、米本、大谷、森氏の欠席を伝える。

【余談56】第20回と云うことで従来の枠組みに囚われず、数泊、遠方の旅も考えたが、

最終、これまで通りの計画枠に留まった。事情背景は、仕事が多忙であったのと、案作りが思っていたほど容易でなかったからで、機会があれば、改めて計画してみたい。

もう一つの理由として、ワープロに、前々回時の計画原案が残されていたことも告白しておく。

「昭和記念公園」は旧米軍立川基地で、返還を受けた後、昭和天皇在位50周年を記念して造られた国営公園である。総面積は180haで、年間入場者数は250万人以上と云われ、四季折々の花を咲かせて迎えてくれる。

【余談57】基地返還の時期や公園開園年月等は定かでないが、昭和43年頃、青梅線車内から米軍基地を眺めた記憶がある。広い芝生の庭、所々に白い建物が配置され、まさに、日本国の風景ではなく、白黒TVで見たアメリカの世界であった。

立川駅からも入れるが、最寄り駅は次駅西立川駅で、ホリデー快速も停車する拠点駅になっている。

西立川口から入場。

紅葉大樹の下に設けられた、池の畔のベンチに腰を掛けて、ここでの火熾しは可能かの詮議に始まり、どのコースを巡るか、レンタサイクルは如何かと、いつもの様に付け焼刃の論議をし、例によって、最終的には道なりに歩くことにする。

ここでも、山田氏から樹種の解説を得るが、スケールの壮大さに加え、立派な自然林の大樹が多く、“何とも贅沢な森林公園”と感嘆する。

進む道は複雑多岐に至る所で別れ、案内看板を見ても、さっぱり見当が付かず。途中、ダイナミックな知恵の輪に出会い、しばらく奮闘するも、最後は、解答が得られないまま、尻尾を巻いて立ち去る。

初冬の陽を浴びて、銀杏の実を拾ってみたり、花見カレンダーに案内されたコウテイダリアの花を探しながら、のどかなウォーキングを楽しむが、向かう方向は一点、バーベキューガーデンへ。

管理棟に出向き、バーベキューの用具と食材を入手し、合わせてビールも調達。

広場にテーブルを立て、肉と野菜、焼きそばのオーソドックスメニューによるバーベキューを楽しむが、規制の厳しさには何とも苛立つ。

西立川駅から、一旦、立川駅に戻り、中央線を下って、相模湖駅に移動。

以前、素通りした相模湖公園に立寄るが、既に、紅葉期を終へ、枯葉を残すのみ。

相模ダムエン堤ノ筑井大橋を渡り、右手に嵐山登山口を見遣る頃には、早、日が暮れ始め、若干、気懸りになるが、弁天橋を渡って急坂を登る頃には脚元も暗くなり、メンバー

からのブーイングが最高潮。

やっと、甲州街道に合流し、宿への石段を下る。

本日の宿は、日本交通公社協定の弁天島温泉「天下茶屋」。

山宿と表現するよりは、割烹旅館と云う風情で、事前にチェックしたネット情報では、好悪二つの書き込みがあり、我らと同時刻に入場した男女の動向がどうにも気に懸かる。

食事は自室で。疲れたせい、メンバーの酒量は進まず、早々に就寝。

翌朝、千木良バス停から朝一番の高尾山口駅行バスに乗車。

途中、大垂水峠バス停脇に高尾山への登山口を見送るが、登山者の姿も多々有り。

京王高尾山口駅から街道脇のコンビニに入り、昼食弁当を購入。

ケーブルで山頂駅に上り、人混みをかき分け薬王院を抜けて山頂へ。余りの人の多さに落着く場所もなし。

山頂も同様。富士山はすっきりとした姿を見せるが、見晴らし台周辺は人で溢れ、写真を撮るのに、“お前が邪魔だ”とばかりに、手を横に振り振り、互いに人払いのし合いっこ。

もみじ台に移動し、昼食。

無論、すでに樹々は葉落し、紅葉を偲ぶ縁もないが、眼前、富士の眺望を救いとする。

眼前で、喜劇と悲劇を目撃。

中年女性二人組ハイカーの後を、高年女性二人組ハイカーが後を追ひ、“何しろ、この先の道は良く解らなくてネッ、以前、途中で引き返したこともあったんだよ、悪いけど、あんたらの後に付いて行くからネッ”

おやまあ！と驚いていると、しばらくして、高年女性二人組ハイカーが引き返してきて、“何とも、冷たいもんだよ”とブツブツ云いながら、眼の前を通り過ぎて行く。

はっきり云って、高年女性二人組ハイカーに非がある。前者にとっては楽しい山歩きに迷惑なばかりか、何かの事故があった際に云々云われた日には堪ったものではない。

後者は、先導者を見付けて出直すべきである。

山頂下の周遊道を巡る内、道に迷うが、いつの間にか薬王院に出、ケーブルで下山。

以前から一度入場したいと思っていた、駅前、「トリック・アート美術館」に入る。

眼の錯覚を利用したトリックの連続は、それなりに興味を引くが、余りの数の多さに落着いて見る事ができず。

館入口に造られたテラス木テーブルに座り、サービス券でコーラを飲む。

陽が高い高尾山麓には、なお行き交う人が絶えず。

第二十一回

日 時：'09.5/9(土)

概略行程：鎌倉～鶴岡八幡宮～建長寺～天園山ハイキングコース(半僧坊)～十王岩～百八やぐら～鎌倉宮～鶴岡八幡宮～江ノ電鎌倉～長谷駅～由比ヶ浜～高德院(鎌倉大仏)～長谷寺～長谷駅～江ノ電藤沢駅

メンバー：米本、吉川、小林、森、磯崎

春の計画を愚図っている内、小林氏より日帰りによる鎌倉散策の案内を受ける。何年振りの鎌倉かと記録を辿ると、'95.8以来の14年振り、鶴岡八幡宮、建長寺、大仏、銭洗弁天、湘南の海、ヨットハーバー、江の島、レンタサイクルと記憶が蘇る。

先行して、早朝の北鎌倉駅に下車。

学校が集まるのか、通学生の波に押され、建長寺の門前辺りでやっと列から外れ、時代に取り残された人かの様にポツネと佇み、心の中は過去の記憶との照合作業、“色は違えど、記憶する風景”と安堵する。

開門時には、なお早く、外人カップルがサイクリング車で乗り付けるのを機に、駅西口に回り、鎌倉街道を鎌倉駅方向に線路沿いに歩き始める。

途中、再度、学生の流れに合流するが、道路の右手側を歩き、マイペースを確保、我が姿は彼等の眼に如何が映っているのか。

右手に亀ヶ谷坂の道を見つけて、迷わず右折、向かう先は不明も、時間はたっぷり、案内書で見た切り通しの道かと想いながら、急坂を上る。

静寂の道脇に、石段の奥先に玄関を構える旧家屋を見遣り、川沿い、横須賀線沿いの通りに出会う。民家の庭には春の花々が溢れ、ひとつひとつ愛でながら、鎌倉駅を目指す。

道を間違い、遠回りするも、何とか鎌倉駅に到着。

駅前賑わい、併設する江の電駅も確認するが、かつて利用したレンタサイクル店は見当たらず。余りの風景の違いに驚き、一瞬、時の流れかとも思うが、直ぐに駅裏と確信し、横断路を探す。

ここでも、道を遠回りし、やっと鎌倉駅西口に到着。レンタサイクル店も健在で、過去の記憶が一気に一致。駅前ファーストフード店に入り、コーヒーを飲む。

混雑する中央改札口前で、小林、森両氏と合流、吉川氏は午後から、米本氏は夕刻からの参加と聞く。

鎌倉幕府成立の年1192(いいくに)を反すうしながら、参道を歩いて鶴岡八幡宮へ。
源頼朝、義経でもって走馬灯を回している内、中学生時代に演じた弁慶勸進帳を読む場も浮かび上がり、ついつい苦笑。

広い境内は参拝客で溢れ、老若男女が喧々諤々、古都の晩春に酔いしれるかのように。

本堂で合掌する森氏を見遣り、鎌倉市街を遠望したり、次に向かう建長寺への道を探ったりと世俗に動く。

神宮脇を抜けて、広い通りを歩き建長寺へ。

神仏混淆、両者の相違も解らず、往時の執権者の威勢振りや統治の工夫振りに想いを馳せる。境内三門脇の梵鐘は国宝に指定されている由、つらつら眺めるも、その価値解らず。

天園山ハイキングコース入口を探し、奥へ奥へと歩き、半僧坊へと辿り着く。

供えられたベンチに座り、先ずは一服、行き交う人の多さに、コースの人気振りを知る。

【余談58】“鎌倉アルプス”は、以前から気になっていたハイキングコースの一つである。あの鎌倉にと、今一つ判然としなかったが、どうやら、今回の天園山コースや源氏山コースを含めた、鎌倉地区丘陵の総称のようである。

“沼津アルプス”、“神戸アルプス”、更には、“長瀬アルプス”と喧しいが、雑誌メディアに踊らされ過ぎないように。

ハイキングコースに入るや、直ぐに山道となり、小高い丘からは急な下り、水ぬかる道は滑りに要注意と、足下を確かめながら、笹の道や岩場の道を慎重に進む。

時折、開ける展望に、明るい鎌倉市街を遠望。

行き交う人は多いが、道は意外に人の手が入っておらず、かつては兵や刺客達が徘徊していたのではと想いを馳せたりもする。

木標の立つ分岐路に到着。

吉川氏との待合せ時間を考え再協議、進路を変更して、太平山行きを断念、鎌倉宮へと下山する。

鎌倉宮の無料休憩所に入り、昼食。

火器の使用は言語道断と、カップ・ヌードルを断念して、駅前調達のコンビニ弁当で済みます。晩春の古都片隅に休み、それぞれの近況を語り合う。

鶴岡八幡宮に向かい、歩きを再開。緑に包まれた滑川沿いに歩道を探すが、行き止まりばかりで、止む無く車道を歩行、やがて八幡宮の参道に出会う。

太鼓橋の袂で吉川氏と合流、午後の行動を詮議する。予定した源氏山ハイキングや銭洗弁天行は断念し、江ノ電で長谷に移動を決めるが、森氏は別の約束で、鎌倉駅で別れる。

満員の車内はすでに夏の色。

乗客は涼風を求めてクーラー下に集まるが、何と国際色豊かと思嘆する。

【余談59】経済のボーダレス化は外国人との出会いを日常化するばかりか、風景まで一変している。以前見掛けた彼等は観光客であり、ビジネスマンであり、目撃箇所もほぼ限定されていた。

ところが今やどうだ、多くの外国人が集まる六本木や町工場、飲食店で出会う東南アジア、東アジアからの労働者には驚かないが、何とも戸惑うのは自宅近くで出会う彼等である。

麻布の外人向けスーパーではなく、名ばかりスーパーで、実体は街の八百屋さんでもあるディスカウント店のレジにニコニコ顔で並び、隣接マンションには、エリートである筈の金髪住民が居住し、用向きは不明であるが、通勤時の毎早朝に擦れ違う、短パン姿で眼の青い初老外国人。ひょっとすると、その内、彼等は町会にも出席し始めるのではと苦笑する。

大仏寺、「高德院」への最寄り駅、長谷駅で下車。

まずは、湘南の海を眺めながら珈琲なんぞをと、南の「由比ヶ浜」へ向かう。

眼前に相模灘が拡がり、その向こうには太平洋。左手先には三浦半島が伸び、右手には橋で繋がる江の島。

浜辺では、晩春の強風を受け、サーフィンを楽しむ人、凧上げを楽しむ人で賑わう。

壊れた木舟に腰を掛け、体を風除けにして、舟底木組みの間で湯を沸かす。

道に戻って、「高德院」へ。

駅を通り過ぎて、更に、北に進む。広い通りは車が行き交い、狭い歩道は往く人、帰る人で溢れ返り、何とかならないものかとの苛立ちを、天麩羅屋親父の楽しい店頭口上に耳をそば立てて凌ぐ。

【余談60】後日、ラジオで知る。某観光地で道の渋滞策に往路復路を決めた所、往路沿いの店の売上高が激減した由。

理由は簡単、荷物となる土産物を往路に買う人が少ないため、直ぐに元に戻した由、むべなるかな！

門脇の木戸口をくぐり、拝観料を納めて入場。

玉砂利を敷き詰めた境内の中央正面に、五月の青空を背に大仏が鎮座し、その周囲を、来観者が取り囲むが、無表情な大仏に比し、眼の上に手を翳したり、携帯カメラを掲げたりと、何とも忙しい人々達。

玉砂利の敷き詰められた境内を一周し、大仏の臀部左側に体内進入口の存在を確認。入体料は50円と記憶する。

奈良 / 東大寺、千葉 / 日本寺大仏との背比べが話題になるが、当寺から3, 2, 1の順。

高德院を後にし、紫陽花寺として知られる長谷寺に立寄る。

自然石を敷いた石段を順路通りに進み、展望台を置く最上部まで登るが、紫陽花は葉影すら見せず。

机を並べた休憩所からは、先ほど珈琲を沸かした由比ヶ浜が一望でき、しばし、夕泥む湘南の海浜風景を楽しむ。

【余談61】後に、鎌倉案内で知ったが、長谷寺の紫陽花は奥のある個所に群生している由。しかし、小生がイメージした紫陽花寺は、院の至る所が紫陽花の花で埋まり、傘を打つ雨音さえ楽しい、水滴る花寺であった。

江ノ電に乗り、最終の訪問先、藤沢へ。ここで、米本氏が自宅から合流。

駅前の洒落た焼き鳥屋に入り、喉を潤すが、幹事の気配りも届かず、齋木会頭はここも欠席する。